

329
309



始



329-309



大泉黑石
A. C. KOKCKRIM
著

露西亞文學史

株式會社 大鏡閣藏版

大正
11. 3. 1
内交

序

口傳文學はその民族の想像力即ち民族が持ち合せてゐる詩的能力の一切を包括して云ふところの文學上の總計であつて、それはその民族口傳によつて、云ひ替ゆれば人の口から耳へ、口から耳へと代々傳へられた原始的の形の儘の文學である、私は今この口傳文學の發生を私の父の國であるロシアに就て述べるために、先づその時代のスラヴ民族の生活に伴ふところのまことに神秘的な迷信から始めやうと思ふのである、それはロシアとしての有史以前にさかのぼるとき、私はそこに自然——偉大なる北國の自然と云ふ外界からはつきりとその存在の區別を立てゝゐた無智無學の一民族を考へずにはゐられないのである。まことに彼等は自分達の力弱いこと、頼り少ないと、心細いことを充分に意識してゐたのであつた。その三ツの心の状態は、たとへば熱と寒氣、飢と渴、不幸と悲哀、光と闇と云ふやうなものに、絶へず彼等を犠牲にしてゐた或大きな自然の力——彼等の力では逆も打ち勝つことの出来なかつた大きな強い力と相面接し且つその偉大なる力の下に五體を投げ出してゐるのだと云ふところから來たのは無論のことであつて、従つて彼等はその偉大なる力の所有者である「自然」より以上に恐ろしく壯嚴なる對象を持たないのであつた。彼等はその「自然」の中に神としての最高意志を認め、その神の足もとに、いつも小兒のやうな敬虔な心と絶對服従の心と諦らめの心とを以て身命を任せて逆ら

ふことがないのであつた。だから自然界に於ける春夏秋冬の不思議な現象を神の手による神秘的な奇蹟として眺めてゐた。この心持ちは今でも現今の露西亞人にもまだ深く刻みのこされてはゐるが、有史以前の彼等の目を通してゐる自然界の勝利の沈静も怒りの恐脅も、今云つたやうに光と闇とが熱と寒氣と云ふ風に全然相反した風物との感觸のことごとにつれて、心を撃つものとなつてゐたのである。これを具體的に云へば、彼等は、いづれの國にもさうした時代があつたやうに、太陽、月、暁、黄昏、電光雷鳴、雨、風を崇拜した。次に彼等は自分達を圍繞する家畜を、ある原始的な幻想によつて崇拜したのである。第一は私たちの所謂神人同形説で次を獸人同形説にあてはまる所の一種の宗教を持つてゐたと見られるであらうか、この自然の力——それは動的にしる靜的にしる、の崇拜は彼等が春秋に行ふた盛大なる祭典によつて明かに見ることが出来る。この祭典の儀式に謠はれた典詞（のりことば）に於ても知ることが出来る。自然界の變動の前に自分達の獨立的生存をつゞける目的で、その自然の天助を切願するために、かうして抑制された彼等の希望は彼等自身の神秘極まる動作と言葉によつて現はされてゐたが、その動作と言葉にまでも、彼等は魔術的の力を自ら與へて自ら信じてゐたのであつた。この民族の自然界に於ける心の苦闘は、民族の中の代表的人物によつて深刻に裏書きされてゐた。それはその時代の、その民族の中の英雄達に外ならないのである。彼等はその英雄のことを「ボガツイリ」と稱してゐた。「ボガツイリ」は民族の力の代表者であつた。私たちの目から見ると正にこの民族

が具體するところの抒情詩的神話の立ち場から云ふと、彼等の祭典なるものは、民族詩の歴史をつくるためには實に豊富な泉であつた。その外にも、國民の「詩の歴史」を探るためには片斷的存在物がある、そして是等も又この國民の信仰時代の状態を説明してくれることが出来ないものでもない。かくのごとき古代の遺物を今一通り此處に擧ぐれば、それは「謎々」であり、「諺」であり、「妖術的呪咀」であるが、それ等を通じて私たちは彼等が古代の、てぶりを知ることが出来るが、しかし、それは要するに國民文學としての立派な形式を備へてゐたのではないのであるばかりでなく、私がいから述べやうとするロシア文學の遠祖となるべき要素と見られてゐる遺物は、この神話時代の「祭典謠」と「神話謠」と「ボガツイリ」の謠即ち「英雄謠」である。是等はいづれも、民族傳説と神話とに密接な關係を持つてゐるもので、民族の思想を迷信或は超自然的のものから普通の物質化するまでの経過としての時期を組み立てた時代の産物と見らるゝ。この「祭典謠」「神話謠」によつてその時代に無数の神々——例へば牛馬の神「ゾオロス」や「ウエリース」、太陽の神「ダジュボグ」電光の神「ベルーン」などを知つた私たちは、下つて、民族自身が歴史的課程を辿つて行くうちに、實際に人間がどんなものであるか、その人間の力がどんなものであるかと云ふことを知り始めて、今まで、いかにも不思議な力を備へてゐるものとして恐れられてゐた「自然」に對する争闘が起つて、從來の不可思議な自然の力は「闇黒の神々」として斥けられるやうになると同時に、その「闇黒の神々」の手か

ら民族を救ひ出すべき光輝ある人間を、民族の眞實の守護神として崇拜するやうになり、その守護神と云ふのが、とりも直さず、先刻云つた「ボガツイリ」(英雄)であつてこの「ボガツイリ」を讚美するための謠(英雄謠)に於て、私たちは、次のやうな事柄を知ることが出来るのである。それは、この時代の「英雄謠」が主としてヴラジミル太公期と韃靼侵入期のものに限られてゐて、それがこの英雄の謠の起る時代に實際に起つた歴史的事件を取り扱つたものである。私はこの英雄謠を別に「史謠」と名づけてゐる。以下項を追ふて説きたいと思ふ「史謠」はこの英雄の謠のことであることを記憶していただきたい。ところで、私は露西亞文學史家の例に従ふて此の史謠の時代「舊ボガツイリ」期と「新ボガツイリ」期又は「キエフ」期に分ちたい。前者に屬するものは概ね神話謠に似、後者に屬するものは主として「ヴラジミル太公」の物語に盡されてゐる。前者に、民族の人間化の特徴があるとするならば、後者には、民族自身がより人間的であり自然を敵として若くは神として、これと闘ひこれに従ふと思ふ思想から脱して人間同志の争闘、例へばスラヴ民族の敵と戦ふと云ふ點に特徴があると思はれる。さて今少しく詳細に「舊ボガツイリ」に就て述べれば、是等傳説俗謠は「スヴィヤトゴール」(後例参照)やヴォルガやミクラ・セリア・セリア・ニノヴァイツチ等の人物に關する傳説的逸話がその殆んど全部を占めてゐるが、ミクラ・セリア・ニノヴァイツチへ來れば時代は幾分「新ボガツイリ」へ繰り入るべき性質を帯びて來る。さて「新ボガツイリ」に就て著しく目立て見えるのは、謠の數が前者のそれよ

りも餘程多いことである。「新ボガツイリ」を「ボレニスイ」と云ふ人もある。「ボレニスイ」は「ボール」即ち平野の意から轉化したものである。この時代の謠は地方々々へ撒き散らされた人々によつて作られたもので、後に至つて是等の人々はキエフの町へ集つてヴラジミル太公に隸屬して了つた。で、この時代の謠の主要人物と云ふのはドブリニア・ニキチチ(後例参照)やミユロンのイリヤなどで、是等の人物は同時期の傳説物語の殆んど何れの中にも目醒しい活躍をしてゐる。この期の謠の特徴と云ふのは、その物語自身に變化が多いこと、人物に生氣があふれてゐることなどであらう。私は、別にノヴォゴロド期の史謠を認めて、それを「舊ボガツイリ」と「新ボガツイリ」の後につけたが、この「ノヴォゴロド期」と云ふのは「町の國」或は「國を形造る一つの町」としてのキエフ市の歴史から岐れて起つたもので、私の考へては、キエフ期とは全然別箇の物である。前に二期に分けた傳説的俗謠の時代へ新しく「ノヴォゴロド」期を加へて此處に三つの時期を作つた私は、又是等の三期に屬する傳説的俗謠を「ブイリナ」(史謠)と一般の「俗歌」とに區別立て、特に「ブイリナ」に就て有る限りの知識を傾けたいと思ふ。「俗歌」の中には全然「ボガツイリ」(英雄)の動作が含ま

れてゐない。それによつて私は區別を立てた。

一九二一・九

大泉 黒石 謹識

Александръ Сренаничъ Корчинъ

凡 例

- 一、此一卷に盛られてゐる内容は、『發生の時代』又は『起源の時期』にあつた露西亞文學が『近代』に入らうとするまでの發達の狀態を研究しそれを年代順に纏めたものであるから、云ひ替ゆれば露西亞古典文學の文化史的研究である。
- 二、その古典の時代から今日に移るまでの露西亞文學の發達の模様に就ての研究はいづれ後日を期して改めて稿を起すことにしてゐる。

(附記) 猶書き漏らし其他不備の個處があれば重版を缺つて訂正追補する積りである

一九二一年九月二十三日

東京の假寓にて

著 者 識

露西亞文學史目次

序

口傳文學は民族の詩的能力の總計——露西亞人が彼等の環境を對象としての自己意識に於ける神の信仰——自然力の崇拜と祭典の典詞と民族の代表的人物即ち「ボガツイル」の傳説と——「謎々」「諺」「妖術的呪咀」に就て何を知らることが出来るか——露西亞文學の遠祖としての「祭典謠」「神話謠」「史謠」は民族の思想が迷信或は超自然的信仰から物質的に進化するまでの経過の中の産物——史謠（抒情詩）の三時代「舊ボガツイル期」「新ボガツイル期」に屬するもの、前者は概ね神話謠、後者は主として「ガラジミル太公の物語によつて盡され、「ノザオゴロット期」に屬するものは「町の國」としてのキエフ市の歴史から岐生したるもの。

一六

第一篇 口傳文學と其時代

一一四

第一章 傳説俗謠の研究

一七七

目次

一

抒情詩(史謠)から近代の散文小説までの發達経路——傳説俗謠の特長とその主要なるもの——「イリアの變裝」(青い酒)——他國の傳説流布と露西亞のそれと——傳説俗謠に對する露西亞人の感激——最初いかなる種類の人々が唄つたか——傳説俗謠の品位と勢力と——傳説俗謠の發見とその蒐集及び出版と——傳説俗謠と歴史上の事實との關係——傳説俗謠發見前後の文學者年代記及びその歴史的觀察と社會事情と——俚歌と史謠との區別——傳説俗謠と隣接民族の傳説との關係——俗謠(民謠)嫁入唄「母よ、わがために織る勿れ」「コリヤヅカ」「鉢の歌」「ステンカ・ラーデン」のこと。「ジブシイ小唄」(ツイガンスキ・タボール)——謠と樂器と——代表的傳説俗謠「サヅコ」——代表的史謠「エルマーク」——民樂家に唄はれた謠。

第二章 史謠三曲

「英雄スウイアドゴル」——「ダブルニアと龍」——「ヴォルガとミクラ・セリアニノウイツチ」

七八一—二一四
一一五—一九八

第二篇 記述文學と其時代

第一章 傳説文學時代の背景と文化草昧時代の文學と

キリスト布教僧によつて齎らされたる宗教書類と文化開發の階段——言語學並に宗教文學の養育者としてのメンテウスとシリルの事業——ウラジミル第一世及び其子ヤロスラ第一世統治下の文化運動——ビザンチン文明ギリシャ文明ブルガリヤ文明との關係——文字の知識普及の目的と最初の著述家——僧ヒラリオンとジデアータの事業——ネルストルに關する事蹟——僧侶文學者と宗教文學の創造と時代の要求——民衆の空想とその文化的發達慾並その能力と資格——「ドルウジユニイ」の文學的所産——禁慾文學或は隱遁者文學對「イゴル遠征譚」——所述の記録とビサンチン修辭學の勢力と——囚人ダニエルとセラビオンの教文と「イゴル遠征譚」對「ザドンシチーナ」——修道士文學全盛期に於ける宗教的内容の私生活物——ロシア文學の沈滞と所謂「文藝復興」の餘波に響應せる第一の現象——ヨハノヴィツチ朝の文學混沌からイワン朝の社會秩序錯亂の渦中にある僧マキシムの活動——その結果としての產物「ドモストロイ」に就て——印刷機と職工の輸入——イワン恐怖王對時代人クルブスキ——十六・十七世紀に於ける文化事業の進歩と社會改良家の續出——僧クリジアニツチとビョトル第一世とボンシニコイ

目次

三

フとプロコボウイッチとカンテミール及びタチシチエーフの文學上の主義主張並に事業

第二章 演劇と戯曲

一四八—一九八

露西亞演劇の創始時代——アンナ朝(トレデアコーフスキー時代)に於ける演劇の狀態と天才トレデアコーフスキー——伊太利音樂とイタリイ演劇と露西亞最古のオペラ劇場と——エリザベタ朝(ウオルコフ時代)に於ける演劇の狀態と巨人ウオルコフ——アラジアの作物とモスクワの「帝室劇場」と——カテリナ朝(フオミン時代)に於ける演劇一般とフオミン——「グラント・オペラ劇場」とフオミンの傑作並に作曲家・俳優の簇出——改造期の文壇と天才オロモノソフの生涯——宗教から解放されたる文學と科學との獨立的機運——改造期文壇から近古文學への過渡期にあるマスローコフ——カテリナ二世の黄金時代とフォン・グイジン並にその喜劇——デルジャヤインの作物からボグダノウイッチの抒情詩まで——露西亞のホーマーと稱せらるゝヘラスコフ——定期刊行物の發行前後に現はれたる文星の群——定期刊行物とその發行或は編輯者——センチメンタリズムの紹介者と

してのカラムジンからその潮流に投ぜざる主義の繼承者——抒情詩「ムロンのイリヤ」

第三篇 近古文學と其時代

一九九—四四六

第一章 詩及詩人

一九九—四四六

露西亞文學始祖詩人ジユコウフスキー略傳——歷史上から見たる詩人と同時代人——ジユコウフスキーの浪漫主義——ジユコウフスキーの作品と社會——ジユコウフスキーの思想——「スヴェトラナ」花に寄する歌——寓話作者クルイロフの一生——クルイロフの作物とその藝術的價值——その寓話に現はれたる彼の思想——ラフォンテインとクルイロフ——他の文學者とクルイロフ——露西亞文學史上のジユコウフスキーとクルイロフの地位——「猫と料理人」「二疋の犬」「凧と胡蝶」「四人合奏」——露西亞浪漫主義文學の醱酵期に於る歴史小説の流行と諸作家——ブウシユキンの時代とブウシユキンの略傳——ブウシユキンとジユコウフスキーとバツウユコーフとデルジャウンとカラムジンと——ブウシユキンの作風と寫實主義——「ルスランとリウドミラ」に關する社會の批評——ブウシユキンの

社會思想と「自由の保護」——シニコフの傳統主義對文化促進運動——政府と詩人と——プウシユキンの作物とその背景としての彼の運命的境遇——詩人の決闘と死と民衆と——「サルタン王物語」序説「青銅の騎手」序曲「毒ある木」「黒い肩掛」「惡魔」(以上短篇の詩)——「エツゲネ・オニエギン」の梗概とその解剖——「詩のための言葉」と「實生活のための言葉」と詩劇「ボリス・ゴドゥノフ」と——「ピサリエーフの批評」——彼の主義の繼承者——露西亞人の浪漫主義乃至神祕主義の文學と——詩人カズロフの文藝上の一提唱としての「苦惱の神聖化」——作に現はれたるカズロフの諷刺的悲哀——「難波船」——「デルグイグの觀照眼」——「バラチンスキ」の厭世的思想とヤズイコフの沈黙主義と——「人生」——ヤズイコフの功蹟としての浪漫主義の獨立——「キリストの名に匿れたるスラヴ流の巡查」「ヤズイコフ——古典主義的傾向のウエネウイチノフとバイロン主義者ボドリンスキーと醜陋詩人ボレジャエフと——シヤクノヴスキとザゴウシユキンとクメルニツキーとカチーニンと——グリボイエドフの半生——演劇とグリボイエドフ——リリエフとバツウシユコフの擬古文學とグリボイエドフ傳統趣味——傑作・喜劇「ゴーレ・アト・ウマア」の美學的乃至歴史的意義——「ゴーレ・アト・ウマア」の梗

概——浪漫主義の文學運動者レルモンツフの略傳——レルモンツフの性格と思想と——レルモンツフの「悲哀」と「過去」の中の「現代の英雄」及「天使」——過去の永遠と厭人主義と——苦痛の蔑視と非人情非人間的の感情意志——コトレアレウスキーの説——英雄的理家としての自尊主義者に描かれたる戀の勝利と大作「惡魔」——レルモンツフの人生乃至宇宙觀の一片——「非地上的」なるレルモンツフの地上に對する愛——メレジコウフスキの言葉に示されたるレルモンツフの宗教——ドストイエフスキの「惡魔」とゴーゴリの「惡魔」とレルモンツフの「惡魔」と——「惡魔」と「神」との和睦——罰せられたる「誇る者」——長詩「惡魔」——浪漫主義全盛時代の五大文學者の一人カルツォフ——民衆詩人或は農民詩人カルツォフの略傳——スタンキエウイツチとスリカエフとカルツォフ——批評家ビエリンスキとジユコウフスキとヴァアゼムスキとツルゲーニエフとカルツォフと——カルツォフの詩の形式と農民の魂——露西亞文學黎明期の一大潮流を形造る一因子としてのカルツォフ——郷土讚美家の死とビエリンスキの言葉と——カルツォフの寫實主義と韻律的の抒情詩と官能描寫と——「自然に出來上つた天才」「民衆の中から生れた詩人」「露西亞のバインス」「露西亞民衆文學者の祖父」の希

望と愛の宣傳——カルツォフの樂天的性質・自己否定・犠牲の精神・運命論者の思想の中の「あきらめ」と「剛氣」——露西亞近代文學期へ入るべき活動時代——詩「收穫」

露西亞古典文學者索引

四四七—四五六

追補

四五七—四五八

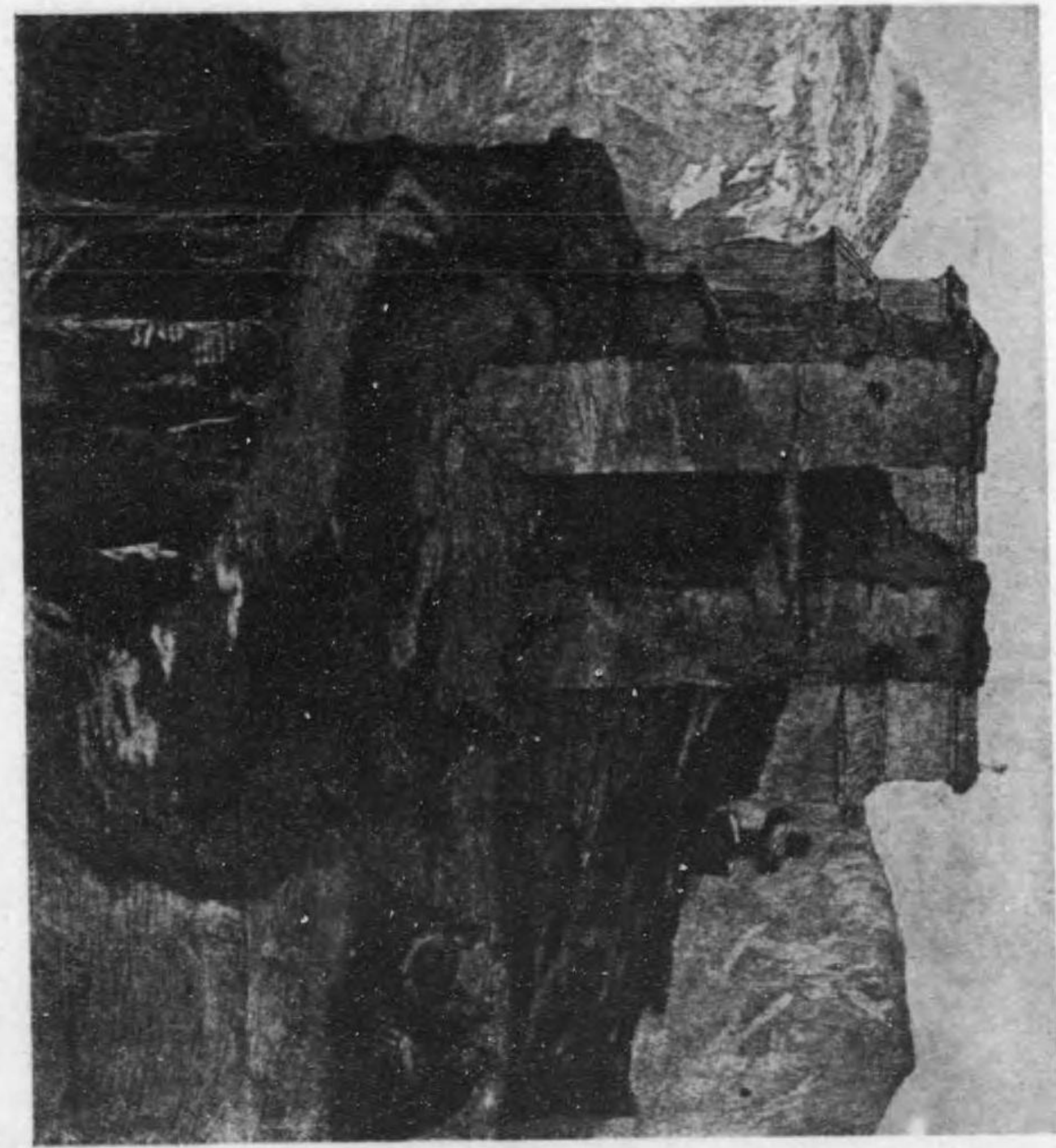
著者の參考書

四五九—四六〇

目次終

カウカツ

シムモントフ作『惡魔』譯書



THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

露西亞文學史

第一篇 口傳文學と其時代

第一章 傳説俗謡の研究

其の一

今の散文小説は無名詩(ベジミアニア)の變體である。無名詩は青年詩(モロダイエツキア)の進歩體である。其青年詩はコサック詩(カザチエスキア)より生れ、コサック詩は昔話(スターリナ)が、脱胎したもので、その昔話は所謂傳説俗謡及び史謡(アイリナ「今日の所謂抒情詩」即ち特徴を失つた形式であると思ふ。その文學は現今の形式を取るまでに、傳説俗謡(史詩・俗唄を含む)から、これだけの變態を経て來たのである。傳説俗謡は露西亞大陸文學の前身であり遠祖であつた。露西亞を研究する人や露西亞文學を研究する人は此處から出發すべきであらう。傳説俗謡或は史謡を等閑に見るのは大いなる誤りと云はねばならぬ。佛蘭西希臘を神が建てた國とすれば露西亞は人間が建てた國と云つても差支へない。だから、前者の傳説俗謡を、神話によるとすれば、後者の俗謡は、正に人間の口碑に基づくものと見なければなるまい。露西亞の傳説は神のものでないからである。神話に基礎を

置いて居ない。人間同志の話に源を發するものだといふことを豫め斷つて置く。(序文既説)

此の露西亞の史謠を三つに分けて見れば、ウラジミル期の一團(又はキエフ期)、ノウオゴロド期の一團と、それからモスクワ期の一團となり、これらを「若き英雄」期の謠として、此外に三つの「若き英雄」期の謠がある。

(俗謠中、シベリアよりアレスに至る、アイスランドよりシブラスに至る個所から集めたものが頗る多い。以下項を追ふて、此史的俗謠に關して、私が知れる限りの事を述べる積りである。)

其一の二

史詩俗謠(傳説俗謠)は色々あるが、其共通點とも云ふべきは、凡てが跑韻脚で、仰揚々格より成る曲尾で終つてゐることであらう。五段、六段乃至七段のもあれば、ぐつと短く、四段で打ち切つたものもある。「ミハイルの通路」などは全部跑韻脚である。詠謠音調(調子)は餘り澤山ないしリズムも一定の限りがあつて、唄ふ人によつては無論流儀を異にするだらうが、歴史的の人名地名或は僞歴史的の人物地名は一定してゐるさうである。兎に角、史謠には嚴然とした一定の特色があるのである。

これを唄ふ人は、史謠式の所作事に従つて、唄ふのだ。

1「イリヤと親しき友」

2「イリヤと偶像」

3「イリヤと三筋路の冒険」

4「イリヤの變裝」

5「イワン・コデイノウキッチ」

6「ウオルガとミクラ」

7「ウオルガ・ウセスラウキッチ」

8「ウオルガ・ウセスラウキッチノ魔法師」

9「ウオルガと村人の子、ミクラ・セリヤニノウキッチ」

10「ムロンのイリヤと獵師ファルコン」

11「ムロンのイリヤとカリン天子」

12「ムロンのイリヤ農英雄と豪氣のスウイヤトゴル」

13「英雄スウキヤトゴル」

14「チュリロ・ブレンコウキッチはおしやれ者」

15「ノウゴロドの勇者ワシリ・ウストラエウイッチ」

16「四十一人のお巡禮」

- 17「おとなしき、ドナイ・イワノウキッチ」
- 18「富めるノウオゴロドの客、商人サヅコ」
- 19「法王の子の勇ましきアリヨシヤ」
- 20「龍退治ドブルーニアとマリーナ」
- 21「ボカルの貴人、スタルツ・ゴヴダイノウキッチ」
- 22「ダイク・ステバノウキッチ」
- 23「懐しき遍路者、ミハイル・イワノウキッチ」
- 24「獵夫ダニコと彼が妻」
- 25「ドルイニヤの龍」
- 26「ドルイニヤとアリヨシヤ」
- 27「商人の倅イワンと彼が馬」

以上二十七曲は、多數に存在する俗謡の中でリブニコフ氏、ヒルフェルデン氏、キルシヤ氏、ダニ
レフ氏、キリエフスキ氏、サハロフ氏が蒐集になるもので、一番人口に膾炙して居るものである。(唄
名の頭に番號を附けたのは、後に至つて謡を研究する場合に、番號を参照するため、其外に意味は
なし。)

此處に掲ぐる「イリヤの變装」(青い酒)の中へ出て来る人物で、ウラジミル太公といふのは、ウラジミ
ル、モノマチユス(一〇五三年生。一一二五年死)の事である相で、この人は酒宴を催すことの盛大なる
點に於て、歴史に名を残してゐる人である。ウラジミルはウラジキ——ミリ(世界統治者)のつひまつ
たものである。露西亞の傳説や歌謡には、よく此のことが書かれてあるから、誰でも知つて居るだら
う。此ウラジミル太公を「美しき太陽」といふのは、露西亞傳説「天と太陽」によるので、何でも、
光と熱の表象といふよりも寧ろ、反對に、受動的な、溫和、佳麗の意を表はすもので、(青い酒)の謡の
中に表はれてゐる様に、俗に云ふ、スペインあたりの *el Rey* (善王)の事だと思はれる。ドブリ
ニアは「怪物退治」の主人公でイリヤは農士である。ボガツイルの子孫は偉大なる體軀と力とで有名
な豪傑ばかり揃つてゐるさうで、自らクレスタアニエ、イリウシニと稱してゐるのが、つまり此連中
である。

青い酒

——イリヤの變装——(4参照)

『我、さま／＼の地に行けり。されどキエフを見ざる事久し。いてや、これより行きて、かの街
人のさまを見む』

かく眩きぬイリヤ、とある日に。

ウラジミル公の樂宴は開かれてゐぬ
彼が王市に入り來る時に。

イリヤはまともに酒宴の庭に入りて命のまゝ群客に加はる。

命のまゝ四方へ福をもて、頭を下げぬ。

美しき太陽のウラジミル公と

アブラシキシアの公妃へ

されどウラジミルは彼を識らざりき。

「汝の名、汝の部落、汝が祖先より繼げる姓は、何と言ふぞ」

イリヤは答へぬ

「美しの小さき太陽、輝くウラジミルよ、我は森の彼方より來れる、ニキタと言ふ者なり」

「おゝ。汝勇敢不覇の奴。予等と共に座して宴に加はり麴麴を喰へ。末座に空席あり、その他の

席は、今日予と共に祝へる貴人や宰相の妻、富める商人、大勇女や、露西亞六十士によりて充ち
居るぞ」

老コサックは此言葉に快からず

末座にて麴麴を裂き喰はんとは！と——

されば、彼は叫びぬ。

「あゝ、美しき太陽のウラジミル公よ、君は鳥共と伍して喰ひ祝はんとし、我を鳥共に加へて末
席に着かしめん所存か。否々、我は仔鳥と共に麴麴は喰らはじ」

此言葉に美しき太陽の太公は怒り、

神速に立ち上りて、物凄き夜の如く、

色をなし吼えたりぬ、野獸のごと、

「やよ、汝等優勢の露西亞英雄よ、汝等は、鳥と呼ばれて忍び得るか、いやさ、忍ぶ氣か。小鳥
と呼ばれても——。英雄よ、彼奴を討て、片腕に三人づゝかゝりて廣間へ引立て、狂暴なる彼の

首を刎ねよ。」

彼等が引つ立てんず時、イリヤは片腕を打ち振りぬ。

三人の英雄は倒れて息絶え果て、

今一腕を奮ふ時、他の三英雄もまた斃れたり。

かくなれば、ウラジミル公は

彼の十二勇士に命じて彼れを討たす。

十二勇士が一度に彼へ打ち向ふとき

後ろより六勇士躍り出て、
共に力を奮へど、皆斃されぬ。
故を問ふ者あらば答へて言はむ
かくの如き汚辱を受くる時
イリヤの心は燃ゆるがためと。
イリヤは強弓に矢をついで
『矢よ。飛んで王公の窓を貫き、黄金の尖塔を破りて、神の社の、靈驗ある十字架を打ち仆せ』
かく心に呪文を稱へたり。
やがて彼は掻き集めぬ
壊れ落ちしすべての小尖塔とすべての十字架とを。
そを携へて王立の酒場へ行き
貴重の尖塔を無数の寶に代へ
青き酒を求めて飲み始めぬ。
彼は、やがて、酒場の食客を招き集め、
青き酒を飲む者をして、

貴重なる尖塔を酒に替へ

手傳はせて、飲みつぶしぬ。

『我等が王公の尖塔を酒に替へて飲み居ると知らば、公は何とするぞ』
と食客等は言ふ。

『まゝよ、飲め飲め、面白き友達よ。明日になれば、我こそキエフの町の王公となりて民を治め、

君等は我宰相にしてくれやうぞ』

キエフの王公ウラジミルはこの災厄の様を知り

この町に來る何者が仕業かと思ふ。

この時に若きダブルイニヤ、ニキチチは云ふ

『我は優勢なる英雄を皆知れども、たゞ一人知らざる者あり。そは老コサック、ムロンのイリヤと云ふ。戦ひに死せりとの布告も聞かず、されば、そは森の彼方より來れるニキタにてはあらずして、正にムロンのイリヤなるべし。殿は、賓客を遇するの道を知らず、彼れが立ち去るに禮を俟たざりしなり』

ウラジミルは驚き呆れて、

『然らば、誰れを遣はして、彼れを名譽の酒宴に招かむか。勇敢なるアリョーシヤ、ポボウイツ

チは彼れに向つて言ふことを知らず。チユリロ・ブレンコウイッチは侍女や婦人の前にて氣取る藝の外何事も出來ず。予等は惻巧の者を遣はさねばなるまじ。誰か、讀み書き、且つ道理ある論を吐く者ぞ。汝、ドブリニア、ニキチ、事態かくの通り故、參れよ。行きて彼の面前に、石の床に額づけよ。その濕る母地に幾度も、かくて「御身を迎ひに、ウラヂミル公より使者は來れり。御身老コザック、ムロンのイリヤを名譽ある崇むべき祝宴に招かむとて。公は御身を知らざりしがために、たゞそれが爲めに、麵麩を喰はせんとて末座に着かせたるが、今や御身を歡喜衷心より遇し、過去の恨を含むなどの仰せなり」と申せ。汝の位地は今日まで最も低けれど、最も高位をさづけ呉れやう、困厄より奇智を以て脱しなば」

ドブリイニヤは心に思へらく

「我はイリヤの手にかゝりて、忽ちに死することなしとは云へず。されど、我若し美しき太陽のウラヂミル公の言に隨はざれば猶惡しかるべし」と。

やがて彼が王立酒場へ現はるゝ時、

イリヤは其處に飲みゐたれば

「彼の背後より近づく方よかるべし」

と考へて後ろより近づきて、

力強きイリヤの肩へ手をかけ、

遺言を述べれば、

「幸福なる哉汝、若きドブリイニア、ニキチ、よ後より來るとは！汝若し我が前面より近づきなば、既に汝は灰と化し居らむ、汝行きて「速やかに全市に布告を出して、三日の間あらゆる酒場を公開して、無料にて人民に青き酒を飲ませ、青き酒を飲まざる者には銘前の麥酒を鯨飲させ、それも飲まぬ者には砂糖水を與へて、凡ての人民に、ムロンのイリヤ、老コザックが、キエフの町に光榮を下しに來ることを知らしめよ」と告げよ。右の如くに行ひ、尊き祝宴を張れ、然らざる時は、公は明朝より、其統治權を失ふべきのみ」

とイリヤは答へぬ。

ドブリイニアは偉駄天に駈け戻り

速やかに、速やかに、布告しぬ。

かくて勢ある酒宴は催されぬ。

食ふためにあらず飲むためにあらず、

老コザックを見物せんがためのみ。

雲霞の如き人々は酒場に群がりたり。

イリヤは公殿に入り、禮を施しぬ
すべての人に、特に公と公妃に。

この時公は神速に立ちて言ふ

「あゝ、汝老コザック、ムロンのイリヤよ。予の傍に汝の席あり、左もよし、右もよし、猶三番
目もよし、汝の好む處に座せよ」

とてイリヤの白き手を取り

甘き口に接吻しぬ、

彼等が共に、甘き馳走の卓子の

四角の椅子に着し時に。

イリヤは最高の座を避けて次席に着き

彼に従へる酒場の醉漢呆痴を側に置きぬ。

かくて、すべての者は楽しく

飲み、且つ食ひ始めたり。

かくて、イリヤは和陸しぬウラジミル太公と。

其一の三

フランス、イタリー、スペインなどで、その國の史詩俗謡が唄はれてゐたのは餘程古いけれ共文字
で書き現はされたのは悉く中世紀頃であるらしい。當時無名の人によつて俗謡が文章の形を採つたま
ま、現今まで少なからず残つてゐる。然し乍ら、文章以前の謡を聞き傳へてゐる人は幾んどないさう
である、例へば彼の「ファロエ、アイランヅ」なども中世紀の中葉には古風なものであにるかゝはら
ず、十九世紀から二十世紀にかけて傳へられて來た文章を見ると、それが、大部新しい形に變つて
居るのを見ても解るだらうと思ふ。

何れの國でも、傳説と云ふものはある。その傳説が人の口から耳、口から耳へと口傳さるゝ時は、
其處に大した變化はないけれども、一度文字を以て表はさるゝ場合には、誇大されたり、縮小されたり、
兎も角も、文章の體裁に重きを置く爲に、いくらかづゝ本來のものとは違つて來る。ところで、
フランス、イタリー、スペイン、ギリシヤでは、傳説を夙く文章にした。かくて筆者は隨意に着色
し削減し、勝手な手加減を加へて、人工を施したが、露西亞はさうでない。

露西亞の傳説は右のやうな、文章の力で全國に撒き散らされたものでなくて、眞個に口から耳へ、
口から耳へと移つて行つたので、従つて、傳説を謠つた俗曲も亦同様である。今に至つて依然として

往時のまゝである。千年も千五百年も前に傳はり始めたものが、今でも其儘跡を留めて居るのである。

其一の四

此史詩、傳説俗謡は不思議にも北部に盛んに唄はれた。露西亞の北部は森林に河川に湖沼が多い、しかし、茫々たる平野に土を耕す人々の間には、餘り持て囃されなかつたさうである。

俗謡を唄ふ人といふのは、別に定つて居るといふ譯ではないけれども、純然たる農夫に少なくて、大工、左官、仕立屋と云ふやうな職人に多かつたと云ふ。無論半職人半農夫である、是等の人々が先して唄ひ、それを真似て、老人であらうが、子供であらうが、男と女の區別なく唄つたもので、そんな人々が、俗謡の中に自身等の祖先の行動を充分に意識して了解して居つたか如何か、其處までは私も知らない。露西亞人に言はすれば、彼等が遠祖の英雄的生活を憧憬するの餘りに、謡が行はれたものだとも云ふかも知れない。或はさうかも知れない。

自分が唄つてゐる謡の一言一句すら、その意味を知らずにゐたといふ譯ではない。それは絶対にあるまい。況んや、俗謡に表はれてゐる奔放な、不羈な、己が父の父を指して、冒險を探し廻る不破戸漢と云ふものもなからうし、また放埒極まる野盜野太刀の類と見るものもなかつたことと信ずる。

「ボガチール」と云ひ「ポリヤニツア」と稱して謡曲中の人物を讚美する、北、東部にあつては遇に「ボガチール」を山師と言ひ「ポリヤニツア」をあばずれ女と觸れ廻る者があれば、やがて、正直素朴の周圍の拳に殴り仆されたらう。

さうでなければ、謡が流行して、代々傳はる筈がないではないか。殊に「ポリヤニツア」などは、大なる感激を以て唄はれ、大なる誇りを以て傳へられて來たものである。

既に此の史的俗謡を熱心に唄ふ人々が、大工、左官、仕立屋、靴職人、網師だとすれば彼等は本業の傍らに、絶えず謡を稽古してゐたのであらう。「謡ひ男の家に秋の收穫がない」と云ふのは、謡を稽古する時間に、土を耕やす暇が潰れた爲である。

傳説時代、史詩の時代には、大地主があつても自家で使つて居る農奴を壓制するやうな事は少しもなかつた。傳説俗謡が行はれてゐる處は近代に至つても、その美風が謡と共に残されて來て、宛然として傳説時代の心持ちで生活し、さながら、往昔にあつて、史詩を吟じ乍ら、それに對する多少の報酬を得て世を過ぎてゐた人々の如く、自由な天地に俯仰してゐるのであつた。

従つて其一帶は、文化の侵蝕を受ることが非常に遅かつたのである。太古の無學者が、太古の衣を被つて古風な世を呑氣に渡つてゐたのである。

我國の「巡禮」又は「札處めぐり」或は「西國偏路」は職業ではないけれども、所謂傳説的の詠歌を唄つて、報謝を受けて居つた一つの修業である、が、ギリシヤでもロシアでも「神々の歌」「傳説的史話」を唄つて處々を巡り歩いた中世紀頃の人々は、それを純然たる職業にして居つた。

『ピリナを唄ふから、一ボルチナを下さい』と云ふやうな古い話が残つてゐる。一ボルチナとは、凡そ七、八十錢位に當るだらう。今では、謠などを歌つて生活する人はない。が、今云つた通り、以前は左様であつた、然し露西亞の方では今でも、そんな連中が放浪してゐるといふやうな話が「エルザレム巡禮」日記中に書いてあつたことを記憶する。

(古歌研究者とか、特殊な人で、時間や其他に充分な餘裕のある人は、今でも家庭的にこれを研究し、唄つてゐる。)

かうして、俗謡史歌を唄ひ乍ら、諸處を放浪して一生を終る人々を、カリキ・ペレコジイと稱したものである。美しい聲を持つて居る人、盲人、不具者にこれが多かつた。これは何れの國でも同じことである、前者は自ら好んで身を入れ、後者は、他に生活の手段を得る體を持つて居なかつたからだ。

其一の五



我が國の昔に「琵琶法師」といふものがあつた。殊に戰國の世に多かつた。何某の城、何某の陣と見れば、直ぐ其處へ出掛けて、琵琶を弾じて、淋しき軍旅の、つれづれに興を加へたものであつた。それは一つの高等な職業と認められてゐたのである。

ロシアにもそれがあつた。史謠を詠つたものである。この點に於て、我國の琵琶曲とロシアの傳説俗謠とはよく似て居る。内容も英雄を主人公又は女主人公として居る。それも似て居る。聖堂・寺院・高貴の邸宅に、スコモキヤ、道化役者、幫間の如きが、出入するのを嚴しく禁じてあつたが、史謠クサカ家は、却て歓迎したといふ話である。従つて高貴族の慰藉とされて居た時代もあつた。スタザル、ドブリニア、アリヨシヤなどが謠はれたらしい。

だから、高貴の子弟で、藝人の群に投じて、琵琶法師式の俗謠を詠つて歩いた者が少なくなかつたのである。決して恥かしい商賣と思はれて居なかつたのである事が解る。

兎に角、これを謠ひ、これを愛し、これあるがために露西亞人は偉い種族だと考へてゐた人々は、殆ど皆、無學者、無教育者、一般に下層階級の者であつて、文學が如何なるものか、一向無頓着で、麥を食ひ、貧しい天地に、何の不平もなく生活してゐたのである、即ち文字の仲介を俟たずに、傳説を知り、傳説の歌を知り、これを詠つて居たものばかりであつた。

偉大なる露西亞文學が、特色ある性質のものとして、世界水平線に現はるゝ時機が、他國のそれよ

り、餘程遅かつたのは、他にも原因があるけれども、一つは史詠に満足する世間に依ると思はれる。

ダニレフ氏がベルムのデミドフ鑛村で、謠を蒐集した話は諸君も御存じだらう。

このダニレフ(ギルシア)氏は其頃(中世紀中葉)何人であるか誰も知るものがなかつたらしい。であるから一八〇四年の五月頃、蒐集された史謠が出版された時は、世間の耳目を惹くことが非常なものであつた。妙な謠だと面白半分、傳説俗謠を讀んだ人があつた。それからこう云ふ連中が、次第に殖えて來たのである。一八一八年の九月頃續編が出版された。

その時は最早八部通り謠が世間に擴がつて居たので、こんな面白い歌なら自分も作つてやらうと云ふやうな道樂氣のある人々が、亂暴にも、古謠を真似て謠を新作して、發表した歴史さへある。

かやうに一般から歡迎されたのであつた。(フローレンスと云ふ女史の記録書には、一八一九年即ち、續編が出版された翌年、素張らしい本が、隣國のライプツヒからも出たと記してある。)

その時分獨逸で此の種の出版をしたか如何か知らないが、何しろ正確なことが記載してなかつたので、私には解らぬ。その本を持ち合せないから、如何なる史謠が集めてあるか窺ふ事が出來ないのが遺憾である。

それからずつと下つて、一八五〇年のことである。即ち此傳説古謠が、露西亞文學に新紀元を形成せんとする少し前である。ペトルザザオズクに居た官吏のペトル・リブニコフ氏が、オロネツ政廳に

同じ様な官吏生活をして居る一同僚の口から、オロネツに行はれた珍しい古風な傳説、古謠を聞いたのであつた。その話が端なくも彼が研究心を刺戟したものと見えて、リブニコフ氏は公務の餘暇を利用して早速調べて見ようと思つたのである。彼の同僚と云ふのも、其の管内に住んで居る老人から、其話を聞いたのだと云ふのである。

リブニコス氏御用新聞に(官報のやうな新聞ではなかつたらしい)掲げた俗謠に、關連する謠を其老人から貰つたのだといふ話だ。

リブニコフ低は是に力を得て、益蒐集に耽つた。其の間に如何なるものが手に入つたか解らな

つた。
十年の後(一八六〇)彼のシャングスク・フェル警吏の助力で以て、俗謠を詠つて村から村へ流れて歩く夫婦者を探し出すことが出來た。所謂カリキを手に入れたので、此夫婦者に強いて知る限りの謠を詠はせたのであるが、耳新しいものは何も知らなくて、カリキはリブニコフ氏を失望させて了つた。

その以前に「瓶子」と云ふあだ名で通つてゐる半農半仕立屋の主人が、此の道に至つて詳しく彼が手に入れた俗謠の或物は、此半仕立屋が目を通してゐると云ふ話を聞いてゐたので、是非其男に逢つて、詳しい話を訊かうと考へてゐたけれ共、其男の本名が何某で、何處に住んでゐるのか、丸て解

らなかつた。

何でも謠に身を入れて家を亡びした爲めに、今では、その習い覺えの史謠を資本に、オルガ河の彼岸の村を、迂路つき廻つて居るといふ話だけ探り出して來たので、冬季の入るや否や、オネガ湖を渡つて、仕立屋搜索に出掛けたのが前後二三回であつた。

リブニコフ氏が漸く此仕立屋を見附けたのは一八六三年であつたさうだ。

何しろ官吏と云へば、村民が大變毛嫌ひするので、色々考へた揚句、リブニコフ氏は村民に變装をして、村民の群に混つたのであるが、彼がブドガへ差しかゝる時、到々「瓶子」の仙人を發見して丁つた。

丁度夜のことである。春の雪がまだ融けきらず、湖面は、冬のまゝに氷で閉されて居た。ラドガへ着いたリブニコフ氏は、或る土民の小屋の畔りて、火を焚いて、暖を取つてゐたが、草臥れて、眠りかけると、突然、悲調な謠聲に眼を醒まして、靜かなる湖面向ひ乍ら、默然として其謠の聲に耳を傾けてゐたのである。

その聲の主は白髮の老爺であつた。リブニコフ氏は、やがて「ノウオゴロドの商人」の曲を聞くと同時に、その歌の主は正に尋ぬる人だと直覺したのである。白髮の老人の傍には七八人の謠ひ手が群をなして、種々の謠を歌つてゐたが、老人が絞り出す皺嗶聲、不分明な句調に優るものがなかつた。老

人の名はレオニチ・ボグダノウキツチと云ふ。

漸く巡り會つた仕立屋の「瓶子」老人のお蔭で、リブニコフは、五萬章ばかり、珍らしいものを知ることが出來たのであつた。

リブニコフ氏はそれまで蒐集して置いた謠を、編輯して二卷となして印行したのである。さきに、ダニレフ氏によつて、紹介された傳説俗謠は、リブニコフ氏によつて更に詳しく愈々擴く世間に知らるゝことになつたのである。

餘りに歓迎された爲めに、餘りリブニコフ氏が精細に蒐めた爲めに、一時は其の謠の眞偽を疑はれるやうなことであつたので、彼は、その次の著作に於て、俗謠蒐集の苦心談じみたものを書いて、世人の誤解を解かうと企て、實行した程であつた。

越へて一八七〇年に、アレキサンデル・ヒルフェルデン氏が、リブニコフ氏に教はつて、例の俗謠吟誦者の群へ研究に出掛けた。ヒルフェルデン氏は、オロネツの東、北部の村落で、十九世紀初め頃の史謠を約三百二十首ばかり發見したと云ふ話で、何しろ彼の邊は森林に沼が多い。ケノゼロ・ワドロゼロあたりを徘徊してゐた同氏は、其著書に、農民の生活情態を大いに讚美してゐるウォルキを用ゐて交通し森と沼との間に生活する土民の心理にまで立ち入つて書いて居る。

其二の一

『俗謡は一個人の作でない。國民全體の詩的能力の、その總計である。一國民詩才の果實である。俗謡が詩化せられんがためには、其國民は強く且勇ましく、活動の時代を経ねばならぬ。』

多事にして時代の特色を現はせる人物に富む時代を経ねばならぬ。何故なれば自己の感情を歌ふやうに、自己の周圍の事のみ多く歌ふからである。彼等は、力の有り餘れる時にのみ歌ふのである。であるから、活氣横溢の時代でなくては國民詩即國民的俗謡を得ることが出来ないのである（ヘンクック・イブセン）

傳説俗謡は只で國民の仕事である。他處から輸入したものでもない。従つて輸出すべきものでもない。

個人の仕事ではなくて、團體の仕事である。他の文學的産物、例へば、小説、詩などは餘程根本から趣を異にして居る。一口に云へば、個性がない。作者の個性がない。無論主人公の個性はある。而も、歴史的といふよりも、荒唐な神人的な個性がある。特に露西亞の傳説俗謡は、原始人間味を帯びて居る。それは、謡を見れば解ることである。

言葉を玩ぶのは詩人の業で、詩人は此謡に限らず、その言葉を以て、己れの強い個性を含めやうとする。

露西亞には、當時詩人は隨分居つたが、俗謡に餘り手をつけなかつた。お蔭で野性の謡が野調を失はず、いさゝかの個性味をも帯びずに傳はつて來ることが出来たのである。

事實は歴史にあつたことでも、動いてゐる俗謡中の主人公などは、歴史を超越して居る。前にも言つた様に、傳説俗謡中の冒険談は、まことに荒唐無稽であるが、その基礎と云ふものは、確乎として歴史の上に築かれて居る。

例へば、俗謡中一番有名なウラジミル・モノマーク太公の祖父に當るイワン第三世の故實が附會されて居るといふ話もある。例令、太公のことでも、事實は動かすことの出来ない歴史上の、人物の、たれからか、出て來て居るのである。

その詮索は私にも、深くは出來ないし、また其處まで研究しないでもいゝだらうと思ふ。イワン時代の謡の背景は主に、ポーランドとの戦争、クリミヤの韃靼人との戦争、或はまたシベリヤ征服、カザン占領に、アストラハン略奪などである。

ホルタヴァの戦ひを謡つた俗謡の中には「ムロンのイリヤ」（10参照）「龍殺しのドブリヤ」（20参照）の傳説を持ち出して合體させてゐるらしい點もある。だから、例へば、ペトロ大帝を謡つたもので、その謡中に現はれて來るペトロ大帝が、眞實のものとは、雲泥の相違があるものもあるであるから、

比較的後に出來たものは、餘り價値がないと見ていしだらうと思ふ。

其二の一

一説に従へば、キエフ期とノウゴロド期の詩謠(主として傳説俗謠)は露西亞人が創造したものではなく、土耳其や、蒙古から源を發し、それが派生したものだとする。

いづれ、これに就いては詳論するとして、此處には參考として言つて置く。

また一説に従へば、俗謠が創造されなくてはならなかつた南部露西亞やキエフ・キエフの近縣を措いて、現今そんな謠を唄つて居る者はないから、多分其處で出來たのではない。以前此地を通過した者が、唄つて過ぎたのだらうと云つて居る。そして此説を稱ゆる人は更に、俗謠が今でもシベリヤとか、アルハンゲルスクとか、シンビルスクに行はれて居たり、それかと思ふとドン河畔のオロネツやベルムそれからウオルン河口に残つて居る處を見ると、これは必ず、シベリヤ漂浪遊民の産物ではなからうと云つて居る。

この現象を、今少しく自然的に説明しやうと思へば、キエフ地方の小史を續けば解るだらうと思ふ。

即ち、ウラジミル太公の謠は十世紀末、十一世紀十二世紀に作られたもので、謠を見ると、露西亞

人が殆んど皆、基督信者になつて居る。

そして韃靼と接觸してゐる處が唄はれてゐる。無論ウラジミル太公統治の下に於て左様である。而して主人公の活動即ち舞臺は、キエフと其近傍に限られ、年代は凡そ、九八八年から、一四七或は八年に渡つてゐる。

空間と時間とに一定の制限がある處から、考へて見ると、俗謠は必らず九八八年から一一四七年前後に、此都で作られたものだとなんぞ出來さうである。

何故なれば、年代に記されて居るウラジミル太公の諸勇士は十三世紀に入る前に、悉く死んで居るからである。その生存中は、絶えず太公の周圍に集つたからである。

*九八八年には基督教が露西亞に這入つて來た。

*一一四七年には、モスコイが始めて年代記に現はれた。そしてウラジミル太公の一子ユリが現今存在するモスコイのクレムリン宮殿の處へ王宮を建てたといふ歴史がある。

傳説俗謠が此都で作られたもので、シベリヤに散在するものは、此都會で作られた謠が、種々の事情の下に遠くへ持つて行かれたのである。そして、自然に別のものが、それを模倣して生れたものと云ふ説明を更に詳しくしやうと思へば『スロワ・オ・ブルコウ・イゴレヴキエ』即ち『イゴル軍の言葉』を見ると、よく會得が出來ると思ふ。

『*スロワ・オ・ブルコウ・イゴヴキエ』の原稿は、ナポレオン第一世がモスコへ攻め寄せたとき市街が炎上した。そのとき(一八二二年)焼けたと言ふ。然し、その原稿の寫本があつた。それは、カザリン二世の手にあつて、その寫本を更に寫したものが、印刷され傳はり傳はつて今日まで残つて居るさうである。私がつて居るのは、その原稿の遠孫に違ひない。

これは文章の形を取つた謠の中で、有名なものである。十七世紀以前に於て、文章の形を取つたものゝ中で、また、これが一番最初のものである。

この史謠の内容は、イゴル遠征から採つたもので、その内容自身が、謠中に活躍する勇士の生存中に出来たものだといふ諸據そのものになつて居る。

これを以て見るも、傳説俗謠は、主として、その主人公が、生きて居る時に、その住んでゐた場所に遠くない處で、出来たものであると云ふことが、解ると思ふ。また古代記と、是等傳記俗謠とを比較して見ると、謠中の勇士が、悉く露西亞人だと云ふことも解る。

その勇士の、謠の中に於ける一舉一動や、彼等の風習は、古代武士の作法から見ると、一つの典型であつたのだ。かくの如く振舞はねば、古代武士として威厳品格を墜すものと見做されてゐたのである。

我國近古の武士か上袴や袴を着けるのが、武士の服裝の典型であり、腹を割くのが自殺の方法の一

つとして、武士の威嚴に適つたものとせられたやうな具合であつた。

傳説俗謠發見前後の文學者年代記 (參考)

十一世紀 (古代)

露希條約時代

十二世紀 (古代)

ルスカヤ・ブラヴダ・ジデアイタ。

イタリオン (キエフ管長)

ウラジミール・モノマク (一〇五三生—一一二五死) 時代—

十三世紀 (古代)

行脚僧アボ・ダニエル

シリル (ツロフ監督)

ネストル期

キエフ期

「イゴル兵の言葉」時代—

十四世紀

ウラジミール監督セラピオン時代

十五世紀

第一篇 口傳文學と其時代

「ザドンシチナ」期

ニキチン時代

十六世紀

アンドレイ・ミハイロウキツチ・クルナスキ(一五〇三生—一五八三死)
恐ろしきイワン(一五三〇生—一五八四死)時代—

十七世紀

「ドモストロイ」期
ユリ・クリザンチ時代

十八世紀

グリゴリ・コトシキン(一六三〇生—一六六七死)
シメオン・ポロツキ(一六二九生—一六八〇死)
イワン・チホノウキツチ・ボソシニコフ(一六七〇生—一七二六死)
フエオファン・ブロボキツチ(一六八一—一七六三死)
ワシリ・ニキチチ・タチシチエフ(一六八六生—一七五〇死)
アンチオク・カンテミル(一七〇八生—一八四四死)
ワシリ・キリロウキツチ・トレヂヤコフスキ(一七〇三生—一七六九死)
ナタリヤ・ボリソヴナ・ドルゴルキ(一七二四生—一七七二死)
ミハイル・ワシリエウキツチ・ロモノソフ(一七二二生—一七六五死)

アレキサンドル・ペトロウキツチ・スマロコフ(一七一八生—一七七七死)

ワシリ・イワノウキツチ・マイコフ(一七二八生—一七七八死)

ミハイル・ワシクエウキツチ・タニロウ(一七三二生—一七九〇死)

大カザリン(一七二九生—一七九六死)

ミハイロ・ミハイロウキツチ・スチエルバトフ(不詳)

ワシリ・ペトロウキツチ・ペトロフ(一七三六生—一七九五死)

イワン・イワノウキツチ・ケムニステル(一七四五生—一七八四死)

ヤコブ・ホリソウキツチ・クニヤズニン(一七四二生—一七九一死)

セル・アンドレウキツチ・ボロシン(一七四一生—一七六九死)

デニス・イワノウキツチ・フォン・ウイジン(一七四四生—一七九二死)

ミルシル・イワノウキツチ・コストロフ(一七五〇生—一七九六死)

アレキサンドル・オニシモウキツチ・オゾレシモフ(一七四二生—)

アレキサンドル・ニコラエウキツチ・ラデイシユチエフ(一七四九生—一八〇二死)

イボリ・フィオドロウキツチ・ボグダーノウキツチ(一七四三生—一八〇三死)

ガソリロ・ペトロウキツチ・カメネフ(一七七二生—一八〇三死)時代

傳説俗話の發見と其出版(一八〇四)

十九世紀

ミハイル・マドウキツチ・ヘラスコフ(一七三三生—一八〇七死)

エカテリナ・ロマノヴナ・ダシコフ(一七四三生—一八一〇死)

第一篇 口傳文學と其時代

ミハイル・ニキチチ・チラエフ(一七五七生—一八〇七死)
 プラトン・セヴシン(一七三七生—一八一二死)
 イワノウキツチ・ノヅキコフ(一七四四生—一八一八死)
 ガプリル・ロマノウキツチ・デルザグイン(一七四三生—一八一六死)
 ワシリ・ワシリレウキツチ・カプニスト(一七五〇生—一八二四死)
 エリ・ネレピンスキ・メレツキ(一七五二生—一八二九死)
 アドリアン・モイセウキツチ・グリボウスキ(一七六六生—一八三三死)
 ウラジスラフ・アレキサンドロウキツチ・オズクロフ(一七七〇生—一八一六死)
 イワン・ミハイロウキツチ・ドルゴルキー(一七六四生—一八二三死)
 イワン・イワノウキツチ・ジンドリエフ(一七六〇生—一八三七死)——時代

其二の三

十一世紀と云へば、現代から約一千年の昔である。その以前に希臘と條約をしてゐる。それは、歴史を讀めば臆ろげながら知ることが出来る。其の時分に、今て云ふ文學などがあつた譯でない。それはイラリオンがキエフの管長になつてから著しく發達した。イラリオンは處々で説教する。その説教の中に、ウラジミル頌徳文などを加へたものらしい。

此のウラジミルと云ふのは所謂前號に於て述べた「美しき太陽」に擬せられた、キエフの太公であ

る。此ウラジミル太公は、今から考へて見ると、餘程傑い人であつたと見えて、其頃(一〇五三—一一二五)既にビザンチン文學に精通して居るばかりでなく、自らペンを執つて我が子に與ゆる教訓の文章を作つた。

此の教訓文章が、靈西亞古代文學の大産物となつたのである。機あらば、紹介しようと思ふ。それがずつと下つて、十二世紀初葉に、ダニエルといふ行脚僧が出て(聖地巡禮日記)を作るしシシルと云ふツロフの監督が、己れの説教を文章の形にして、時代は漸く、ネストル期に入り、つゞいて、キエフ期(一一一一—一一二〇)に進んで来る順序である。キエフ期の主産物と云ふのは、キエフの君主に關する記録である。キエフ統治者の行動を記したものである。その外に大したものは無論ある筈がない。これは後に詳しく述ぶるが、十二世紀末葉中に、イゴル及びイゴルの軍に一大災厄が降つて湧いた。その話は、其頃出來た散文詩を見るとよく解る。これが一寸有名になつた。それから、また、ずつと下つて「ザドンシチナ」が出来る、次の十五世紀には、ニキチンが「印度紀行」を作るし、十六世紀にはクルロスキ公が「恐ろしきイワン」の話を書く、イワンは又イワンで「クルプスキ公へ」といふやうな文を作つたのである。

その文章や記録は悉く、そのまゝ、今まで残つて居る。「家政の栞」と云ふやうな變つた物も出來た。これは、臺處の切り廻しや、子供の育て方などを書いたものである。

一世紀に産物が、僅かに一つか二つづゝ生れたと云ふ譯ではない。以上述べた作物は、其時代を代表すべきものゝみである。其の時代の人心を大いに引つけたと云ふ作物ばかりである。

傳説俗謡が発見され、出版されたのは、これから後のことに屬する。その發見由來に關しては前號に述べたから再び繰り返すことをしない。たゞ、此處には、傳説俗謡が文章となる以前に、これだけの文學があつたといふことだけを示したので、これだけは承知して置かねば、俗謡を研究するに不都合だと考へたからである。

この傳説俗謡が発見され、出版さるゝ三十餘年前に、スマルコフといふ文學者があつた、此のスマルコフ以前は、未だ文學を一個の専門事業と認めて居なかつたのである。

スマルコフが現はれて、漸く、文學と云ふものは、片手間にやる仕事でなくて、やはり専門に研究せねばならぬものだとした。其の點から云へば、スマルコフは露西亞の文人としては第一人者であらう。

このスマルコフの崇拜者に、ワシリ、マイコフと云ふ文學者がある。「エリセイ」といふ傳説詩は、此マイコフが作つたので、擬古文體の始祖である。その以前にも無論あつたが、この人が出て、急にこれが一定の形を造つて了つたから、私は始祖といふのである。

(前號の「青い酒。イリヤの變裝」は、マイコフが獎勵した形式に偽せた積りである。)

丁度此當時である。有名な女帝カザリンが、佛蘭西の文化に心酔して、例のボルテールと交際したり、ルウサウヤ、モンテスキュを崇拜したのは——文學を禁じたり、ノツキコフヤ、ラヂシチュフを苦しめたりしたのも、矢張りこのカザリンの仕業である。此の皇后に「イワン・ツアロウキツチ」の作がある。それから、ミハイル、シチエルバトフ公の「露西亞史」が出来るし、ワシリ・ベトロフの「^{バスタイスロスト}失樂園」の露譯が出た。

この時、傳説俗謡は、まだ姿を隠して文壇の水平線に現はれずにあたが、ミハイル、ヘラスコフが傳説詩「ロシアド」を發表すると間もなく、突如として出て來たのである。

一八〇四年に傳説俗謡が出版されてから、世間の耳目は悉くこれに集まつた。研究する人々は毎日に其數を増して來る。まだ紹介されて居ない謡が、ぼつ／＼出て來る。すると、これを潤色する人も出て來る。亂暴にも、故事に基いて、新らしく、作らうと云ふ者も現はれて、兎に角く賑やかな景色になつた。この状態は、一八一二年、ナポレオンが大軍を率ひて侵略に來る迄續いたのである。

その後も此研究は止んだ譯ではないけれども、以前程盛んでなくなつたことは争はれない事實である。

其當時新作された謡は、内容に於ても、形式に於ても、古代のものとは、殆んど比較にならぬ程劣つて居る。

謠を作つた人は、たゞ昔の事實を面白可笑しく、奇抜に書かうと考へて、出来上つたものであるから、それも無理もない話である。

(この新作の傳説俗謠の一番多かつたのは、所謂モスクワ期である。モスクワ傳説俗謠は、前の二期、即ち、キエフ期、ノウオゴロド期の傳説俗謠よりも、其の傳播された區域は廣いと思はれるほどである。)

前二期の謠が盛んに唄はれる地方にも流行した。ツーラヤサラトフの如き中央地縣まで唄はれて居たのである。

これを、それから、それへと傳へ唄つた人々は、無論その作者ではないから、新作されたのではなくて、キエフ期とノウオゴロド期に發見し切れず、探し出せずに居たものが、新しく紹介されるのだと信じて唄つて歩いたのである。或は全く無意識に唄つてゐたのかも知れない。

傳説俗謠が、半農半職人の間に唄はれたのは何時頃からであるかといふ事は、まだ説かなかつたかと思ふが、これは確かな處は、思には解らない。

然し乍ら、一研究者の説を見ると(此人は傳説俗謠の大家ではない)

「ブイリヌイは現代調に唄ふものである。ポイヤンの調子で唄ふものではない。ポイヤン調は、前者よりも新しいものである。」

(現代調といふのは當時の傳説俗謠特有の調子であるのが推察出来る。これからして見ると、謠は殆んど、一一八五年以前から、盛んに唄はれてゐたものらしい。一一八五年と云へば、ウラジミル太公が死んだ年から約六十年ばかりの後である。つまり俗謠の主人公が逝いてから間もないことだと云ふことが解る。)

イゴルの兵士が災厄に逢つたために「イゴルの兵の言葉」が出来た。それは十二世紀の末葉で「イゴル兵」の物語が、散文詩の形で世に現はれた時、傳説俗謠文章の形を取つて生れて來る機運に逢着してゐたのであつた。世人は、散文詩よりも更に美しき謠の出世を望んでゐたのであつた。而かも出づ可くして出でず、口碑のまま、それから五百年の間、徒らに地中に埋れたのであつた。

五百年の後遂に傳説俗謠はオロネン縣から發見され、それと同時に露西亞の學者をして二派に分たしめた。といふのは、或學者は、キエフの露西亞人は悉く大露西亞に屬し、次いで是等の人々は韃靼人に侵されて亡び生残る者は、北へ北へと移住して了つたのである。その時に、彼等は、彼等が生んだ詩歌をも北へ移して了つたといふのである。

そして、現今今露西亞の南部を占めて居る小露西亞人は、棄て去られた土地を埋むべく、ガリシヤ方面から續々出掛けたものだといふのである。

處が、小露西亞に住んでゐる人々に云はせると、自分達は、昔から此處に居るのだと主張する、ガ

リシヤなんぞから來たのではないと強辯する。つまり露西亞にネストル(十二世紀中葉の傳説歴史家)を與へ「イゴルの言葉」を作る詩人を與へた種族の直系と云つて聞かないのである。で、つまるこゝろ小露西亞人の方では、此古文學即ち傳説俗語は、此方のものだと言ひ、大露西亞人の方では、いや、それは此方の産物だと云ひ合つたのである。

そんな事は、まづ如何でもいゝとして、獨逸、佛蘭西、ノルウェイなどの傳説を調べて見ると美しき太陽、ウラジミル太公の家臣「露西亞六十士」(4 參照)と同名のもがある。「またムロンのイヤ」(10 參照)の名がある。

これは基督教が傳來する頃、露西亞の宮庭でも、多少、獨逸や諾威や佛蘭西など、交宜を保つて居つた。そして、ヤロスラヴのやうに、其子を獨逸や、諾威、佛蘭西の宮庭に嫁せしめたために、露西亞の英雄の名が、この三つの國の古物語にまで用ゐられてゐるのであらうと思ふ。つまりさう云ふやうな關係から、英雄の名が他國にまで廣まつたのではなからうかと思はれる。

傳説を研究した人は、雜作なく解るだらう。

その頃は、讀者も御承知の通り、キエフは露西亞の政治的中心地であると同時にまた、智識の都であつた。地方から這入り込んで來る田舎侍や僧侶は、種々の傳説を此都に残して行つたのである。ワリヤクの兵士などがその一例であらう。

其二の四

或人の話に依ると、露西亞文學と他國の文學とを比較すれば、何とはなしに、露西亞文學は、借り物のやうな氣がするといふのである、即ち露西亞文學は他國の文學の傳來し、歸化したものであると、云ふのである。

今少しく、其の人の説を紹介すれば、露西亞に、基督教が傳來せぬ以前に、文學があつたとすればその文學は、隣國の文學と何等の關係があるに違ひないと云ふのである。

成る程、ギリシヤとの條約を見れば、ビザニチンの感化が及んで居ることは解る。基督教が露西亞に傳來してからといふもの、餘り他國と交通しなくなつた。そして、それがために、智識の流動は俗謠が出版される迄、ばつたり止んで了つたのである。

廣茫たる歐洲の東部に生活する人々は、少かに一方に、文化に浴せる國を控へて居るばかりではあつたから、智識の吸収は出來難かつたのであらう。北の方は、北の方でフィンランドの犖猛な種族が控へて居る爲めに瑞典人との交通することが出來なかつた。

南の方はクマニアン人、カザル人のやうな遊牧の民と、絶えず争つて居つた。其他に恐るべき韃靼

人がゐる、背後には、役に立ちさうでない亞細亞が開けてゐたのである。

只、西北に文明なチュートン族が居つたけれ共、此チュートン族即ち獨逸は、スラヴ人を嫌つてゐたから、あまり交通はしなかつた。

當時、露西亞人が文明の歐洲へ顔を出さうとするには少かにポーランドがあつて、ポーランドを通じてならば、如何か、斯様か、歐洲へ出掛けて行くことが出来る事情であつたけれどもそれも、例の頑冥なリスアニア人が文化に啓發されるに従つて『ムロンのイリア』（俗語10参照）を恐るゝに至つたのであると云ふ話である。

（『ムロンのイリア』の冒頭に

『ムロンの町の片畔、カラヤロフの村うちに、老コザックのイリヤに住む、彼は祖母の罪のため、腕もなければ足もなく、爐の上に坐せしまゝ、三十年を過したり』と云ふのがある。）

のみならず、十六世紀に於て、英利西が露西亞との交通を始めた時も、シギスムンド王は、エリザベス女王に献言して、露西亞に武器は勿論、機械類を輸出することを禁じた程で、露西亞は物質的の闇黒に放置されてゐた譯で従つて基督教をビザンチンから輸入した關係上、如何しても、ビザンチンの感化は免かれまいが、傳説俗語は、それより遙か前にあつたもので、ビザンチンの感化とは、没交

渉であると思ふ。

南部露西亞が韃靼人の侵略を受けたのは、十三世紀で、南部露西亞の文化が荒廢に歸したのはリスニアン人が押し寄せて來た十四世紀から、つゞいて十五世紀である。

三世紀連續的に苦しめられた露西亞人は、斯く是等美しき歌を記憶から失ひかけたのであつた。處が、下つて十六世紀に入る頃、南部露西亞人は、互に團結して、コザック自治體を作り面目を一新したのである。

これによつて、傳説は、一新期を作ることが出來た。そして、キエフ期の傳説を壓倒するに至つた。

是迄の傳説俗語は、地に墜ちて唄ふ者が少なくなるに従つて、*コプザルは益盛に横行し、新種族のコザック英雄の名は天下を風魔するやうになつて來たのである。

（*コプザルと云ふのは、コンドリンのやうな樂器（コプザ）を携へて諸々を浪流し歩き、傳説俗語を唄ひ、それによつて、多少の報酬を受けて、渡世してゐた人々のことである。）

一方キエフや其附近から、外敵の爲に追はれて、北へ北へと移住して行つた人々は、淋しい思ひをウラジミル期の古歌に紛らしては、常に懐しき南の故郷へ歸りたがつて居たのである。

昔の家へ、戻る心は、全く、矢のやうであつたと云ふ。

北へ移住した人々は、長い間の年月に自然古いスカンヂナビヤの叙事詩を知るやうになつた。そして、その叙事詩を文章となした。それは中世紀頃のことである。

古事歌傳説俗謡で、シベリヤに存在するものの中には、古いスカンヂナビヤの産物も混つてゐるやうである。つまり、これがためだらうと思はれる。

其二の五

傳説俗謡の話をするには、史歌のことを述べて、お互に兩者の區別を立てたいと思ふ。傳説俗謡と史歌とは別物である。前者の方が古いことは言ふ迄もないことである。史歌も矢張り俗謡と同じ形式であつて古い史歌には、韃靼人の露西亞侵入などが、主として唄つてある、また間にはシベリヤに於ける、エルマークの功績とが「恐るべきイワン」に關するものも少なくない。

「史歌の一二例を示すならば、

- (1) エルマーク
- (2) ボイヤルの死刑

のやうなもので此處に附けた番號は、後に參考に引くためである。」

既に史歌に就いて、傳説俗謡との區別を述べたならば次に、俚歌(俗謡)「コリヤダ」にも一言を費す

義務があらう。俚歌も史歌と同様に、傳説俗謡に比ぶれば、ずっと新しいものである。

俚歌の中で、世人によく知られて居るものは、「コリヤヅカ」であらう。それは、クリスマスや新年の前夜に唄ふので、例へば、クリスマス祭に、習俗として卓子の上に水を盆や、鉢の類に置いて、その前で、人々の運命を豫するのである。かやうな場合に、運命を占なつて貰ふ人々は、指環とか、首飾とか、耳飾とか、それを持たない人は、パン屑や、石、石炭などを静かに、水中に沈めるのである。(ジユコヴスキの「スウエトラナ」参照)

すると、運命占言者が、何とか宣託する。宣託の最中に、所謂「鉢の歌」を歌ふのである。水の中から、沈めて置いた品を取り上げる際にも歌ふのである。

私が愛する俚歌に

- (1) 「コリヤヅカ」
- (2) 「鉢の歌」又は「盆の歌」
- (3) 「ドーヅ」
- (4) 「いつはらぬ愛」
- (5) 「乞食うた」
- (6) 「嫁入うた」

(7) 「春の歌」

(8) 「別れうた」

などがある。これも番號は、後に參照する外意味はない。以上は、私が、持つて居る「ホルマイ・ルスキー・ビエセニツク」から抄つたもので、この稿を起す時、探し得た民謡に次のやうなものもある。

(9) 「麩麵うり」

(10) 「泣くな弧兒」

(11) 「嫁入と衣裝」

(12) 「非露歌」「かなしき唄」

(13) 「子を失へる母」

(14) 「別れの場」

機會を見て私はこの民謡をも紹介しやう。

其二の六

私は、前條に於て、露西亞の傳説俗謡は、神話に基いたものではなくて、地上の人間の記録だと述べた。今その理由とも云ふべきものを示せば、元來神話が、何處の國にも傳へられて居る如く、露西

亞にもあるが、それは全く地上に屬す可きもので、荒唐なる天上のものではない。

(アールヤ人の神話は、地上自然の森羅萬象の中に求めて、始めて得べきものであつて、地上自然か
ら或物を抽つて、之に神名を附けた。色々の自然物象に向つて神の名を與へたから、其神は一つに限
らずして幾つもある譯だ。と云ふ風に)

そして石に向つて神の名を與へたとすれば、その神は、水に向つて名づけられた神とは、自ら性質
を異にせねばならぬことになる。

この點は、希臘の神々とよく似通つて居る、彼等は、この多くの神の子孫と稱して居た。此自然神
話の特長は、偶像禮拜時代から育まれたものと思はる。(それは前にも大體述べたやうに——)

露西亞人は、此自然神話の神々を局限するにその對象的を、其時代の歴史的事實、歴史的人物に求
めた。

これは、單純なる無生物(例へば木像とか石神)偶像崇拜時代から、幾らか後のことである。ところ
でこれより、生物崇拜期に移つて、歴史的乃至社會的に傑出した人間を神と認めて、崇拜する様にな
つた。「美しき太陽」のウラジミル太公はその一例であらう。

英雄豪傑がその一例であらう。この心理的傾向は、基督教が露西亞に入つて、露西亞人の心に革命
の渦巻を起してから、動くことの出來ぬ時代精神となつて了つた。

であるから、假令傳説俗謡の或物が、露西亞の自然神話に基いて居るとしても、要するに其神々は私共と同じ、手と足を二本づゝ備へて居る哺乳動物に過ぎない。

私が、神の傳説でなくて、人間の傳説であると言ふのは此邊の意味である。

また、土耳古人や蒙古人が、佛教による傳説を傳へるに忠實であつたとして、其兩國の人々と露西亞人とが、接觸して居たからとて、露西亞個有の傳説を忘れ盡して、佛教傳説を傳へ、それを根據として、俗謡を作つたと言ふのも、いさゝか早計だらうと思はれる。で、

もしそれが事實だとすれば、露西亞には國特有の傳説はなくて、あるものは、皆外國からの貰ひものか、それとも、借りものと云はねばならなくなる。

此説をなす學者は更に云ふ。露西亞傳説俗謡又は、英雄傳説は、他のアーリヤ族傳説と、其種族、系統に於て相似であつて、此點は何人と雖も、否定する事は出来ぬ。と

この相似の點に於て、特にリグ、ウエダにラマヤナとエツダにアルチックの傳説が密接であると。これは左様かも知れぬ。然し、韃靼人や蒙古人の源を尋ねて甲と乙、乙と丙、丙と丁といふ鹽梅に、何も彼も、同じ一根から分派したなど、決めつけるのは、賛成出来ない。

餘り詮索がし過ぎる嫌があるだらう。第一他國の俗謡は別としても露西亞のものは、傳説に現はれてゐる思想が別物であるから。

そこで次に、傳説俗謡の代表的作品「商人サッコ」を紹介し、他に俚歌及民謡を翻譯して、傳説俗謡との比較研究をしようと思ふ。

其三の一

ニコライ・ゴリ作喜劇『檢察官』^{レクセツル}の第二幕の第三場で、ペテルスブルグのチノザニク役人を勤めて居る、イワン・アレキサンドロウキツチ・フレスタコフと云ふ男が「母よ妾が爲めに織るなかれ」の唄を唱ふことになつて居る。

これは有名な而も、餘程古くから、露西亞人に愛唱されてゐる俗謡であると云ふことで、『檢察官』が露西亞で屢々上演されたるために、此唄も廣く識られてゐる。

今此俗謡を、リトルフ氏、リブコニフ氏の民謡集より抜いて、譯すれば、次のやうなものになる。但し唄の名は「克蘭ニ、サラファン」(赤い着物)と云ふ。

「織りやさんすなよ。妾のための

赤い着物を。のう母さまや

花嫁ごろもは作るが無益

妾しや嫁入したかない。

解かにやならない、たちまちに

折角結ふた麻の髪

(曠時代の鬘を崩さねばならぬから嫌だと云ふのである)

「綺麗にからんだ、この頭飾

可愛い、まゝに置きやしやんせ。

絹の覆面かなぐりすて、

妾しあ、氣儘になりたいわいな。

男まよはず、この眼と心

もつと綺麗な人はない。

妾しや。恥かしいのよ娘の頃が

輕蔑するのかわが一生を

嫁に行くのは、笑を涙

歡喜を苦嘆に替ゆるも同じ

いやよいやよ、妾はいやよ

黄金の自由は何より貴重。

生きて居るのは、少かの間
氣儘々々。人の妻にはなりやせぬ

(後章を省く)

次に掲ぐるのは、露西亞の有名なる代表的民謡である。

嫁 入 唄 (其二の五、7参照)

往古にあつては、嫁を貰ふのに、これを盗むだものである。それから盗む習慣が漸次廢つて、買ふやうになつた。つまり嫁は買はれて來る理屈であつた。この「嫁入うた」も此時代に出來たものであるといふ。

「彼の女の母はマリウシカに諭しぬ。

彼女の愛するエフイモザナに諭しぬ。

「行くなよ。我子

行くなよ。我愛子

林檎を取りに汝が父の園へ

捕るなよ。斑ら色の蝶

驚かすなよ。小さき小鳥

妨ぐるなよ。鶯の燈める聲
 汝もし、林檎を取らば、
 その樹は枯れむ。
 斑らの蝶を捕ふれば、
 その小蝶は、死すべし。
 まつた、小鳥を驚かさば、
 その小鳥は飛び去らむ。
 鶯の澄める聲を妨げなば
 鶯は啞と變らぬ
 されど、捕へよ、我が子
 捕へよ、我が愛子
 野に光る彼の鷹を、
 緑りの廣野。」
 マリウシカは捕へぬ。
 愛するエフイモヅナは捕へぬ。

野に輝くかの鷹を
 その緑り。その廣野。
 彼女は鷹を手に取りて、
 母の許へ持ち行きぬ。
 「母よ、妾がゴスダリニアよ
 妾は輝く鷹を捕へたり」

(此頃完)

コリヤツカ (其二の五参照)

コリヤツカの説明は(其二の五)に於て簡単に述べてある。今、その謠を示せば、次のやうなものである。

若い男や、若い娘は、「此コリヤダ」を唱ひ乍ら、村々を練り歩くのである。然し、これは、必ずしも貧民の仕事と限つたものでない。中流家庭の女子でも、此謠を唱し歩いて、「何か頂戴な」

と云ふ。謠を唱つて貰つて聽いて居る家々では、何に限らず、菓子などを此少青年男女に呉れる。貧乏者だから、可哀相で恵むと云ふ意味でなくて、愛嬌に呉れるのである。それは新年前夜かクリスマス

マスである。

「河の彼方に、早瀬の彼方に、

オイ、コリヤヅカ!

密林ありて、

森の中には、火が燃えて居る。

偉大なる火が燃えて居る。

その火の周圍に椅子あつて、

櫛の椅子あつて、

椅子の上には善い若者が、

善い青年と、綺麗な乙女、

コリヤヅカを唱ひ居る。

コリヤード。コリヤード!

その中央に老爺が踞み、

はがね小刀^{ナイフ}を磨いて居る。

大きな釜は、ふつ／＼沸る、

釜の側には野羊が一匹、
殺されるのを待つて居る。

「我がイワヌシコ

出て來い、飛んで來い。」

私が飛んで來て居つたなら、

でも、この光る石。

私しを釜へ押し込める。

黄色の小沙が、

私の心を吸ふて噪がす。

オイ、コリヤヅカ。オイ、コリヤヅカ。

(此話完)

録の歌 (其の五、2参照)

これも、其の五に於て略記してある。唄は次の様だ。

「天鵝絨を轉び下る一つの小粒——天榮あれ!

如何なる眞珠玉も是程澄明ならず——天榮あれ!

轉びルビーに眞球玉較ぶれば——天榮あれ！

最とも美しや——天榮あれ！

ルビーの側にありて眞珠玉の大きさよ——天榮あれ！

花嫁、花嫁、目出度かれ——天榮あれ！

其三の二

獨逸の民謡に、ライン河を唱つたものが少なくない。今は殆んど俗謡化して了つてゐるハイブリックヒハインの「ローレライ」と或點がよく似てゐるものに、我が露西亞の「海賊ステインカ・ラーヂン」がある。

これは傳説俗謡と史謡と民謡との特點を備へてゐる謡である。

古い昔のことである。ヴォルガ河を上下する海賊船があつた。海賊の巨頭をステインカ・ラーヂンと云ふのである。此男は所謂義賊であつた、だから、貧乏仲間からは、大いに敬はれ、部下からは、畏れられてゐたといふのである。

彼は、中年に達して戀を知つた。平たく云へば、頗る美人の戀人が出來て、夢中なつたお蔭で、部下を顧ることを忘れ、部下の心は漸くステインカ・ラーヂンから離れやうとした。

餘程感の深い海賊と見えて、彼れは部下の不平を知つて大いに煩悶した。煩悶の結果、考へつた。

戀人も大事であるが、十幾年の長い月日に、生死を共にする覺悟で暮して來た部下は、更に貴いといふのである。

深夜ステインカ・ラーヂンは、船を抜けて戀人に逢ひに行く、其夜彼はヴォルガの流に戀人を投じた。部下の不平は消える。彼の心は昔に歸らうとしても左様は行かなかつた。戀人を憶ふ心は彼女が生ける日よりも烈しかつた。戀人を殺した翌夜、彼も亦女の跡を追ふて、ヴォルガの水底に己れが五體を葬つたのである。これ丈けの話である。ヴォルガを唱つたものに「愛するヴォルガよ」がよく唱はれる。

これで傳説俗謡のことは、一通り書いた積りである。詳しく述べれば、際限がない。私は、前號に於て約束した代表的傳説俗謡「商人サヅコ」と民謡一篇とを紹介して、本稿を次回で切り上げやうと思ふ。

其終りの一

——人馴れし態は自由に遊び

草原萬物生氣あふれ

仕事に家庭の平和あり

朝は短旅を行くによし

女の小唄子供の聲

野砧の響す

——プーシユキンのジプシイの天幕小屋から——

(露西亞ジプシイ小唄)

露西亞に此 Tsigan があり、獨逸に Tsigener があり、佛蘭西に Bohemien de France があり、英
利西に、亞米利加に Gipsy がある。けれども、生活状態が少しづつ變つて居るやうに、是等半浮浪群
の唄にも變つた處があり。此處に掲げた短い文句が、露西亞ジプシイの特徴を示してゐると思ふ。こ
れは別に古い唄と云ふ譯でない。思出したから序に書いたのである。

(其三の二)に私は「海賊ステンカ・ラージン」の梗概を述べた。此謠は私も、近頃、露西亞から渡
つて來た大學生バラライカ團が唄ふのを日本で聴いた。其以前にも度々聴いたが。今「Musique hier
et de demain」の著者アルフレット・ブリウノウ氏著一九〇三年發行の「MUSIQUES DE RUSSIE」を
見れば、

『Il vint de St. Petersbourg accompagné d'un orchestre excellent avec sa direction jama Stenka
Razine-etc』

とある。且と云ふのは、有名な民衆音樂家リムスキー・コルサコフ氏のこと、コルサコフ氏が一八
八九年に開かれた萬國博覽會に、トロガデイロで「Dans les steppe de l'Asie centrale」を演奏した時
に、ステンカ・ラージンを詠つたと云ふのである。

此の時の樂器は無論、ドムラやバラライカなどであらうと思ふ。(このステンカ・ラージンは、河に
投じて自殺したことになつて居るけれども、事實彼は一六七一年に刑死したのである。)

其終りの二

商人サツコ (代表的傳説俗謠)

榮あるノツヤゴロド町に、樂手サツコ住めり

彼に黄金の寶なく、一日華麗なる宴に行けり、

彼の奏樂に、商人も貴人も歡びあひぬ。

或日の目出度き宴に、ふと彼は招かれざりき。

その次の宴にも、その次にも。

かくて彼は頻りに悲しみ、イルメン湖へ走り行きぬ。
青き石に腰打かけて、奏て始めぬ。

彼が秘藏の楓樹の豎琴、まださより夜更くる迄。

湖の波忽ち起り、湖水は砂を混へて逆巻くに。

サヅコは恐れを抱き、恐怖は彼を襲ひぬ。

かくて彼は急ぎ、ノヴォゴロドに引返したり。

暗き夜は過ぎ行き、其次の日は明けたり。

されど、猶、宴にサヅコを招く者なし。

彼れは再び湖畔に行きて終日樂を奏て

夜に入り恐れをなして退きぬ。

次の日も何人の彼を招く者もなきまゝに

行きて青き石に腰打ちかけ、楓の琴を、彈ず。

浪は湖心に起り、砂を混へて逆巻きぬ。

されどサヅコは勇を鼓して奏て續くるに。

水精湖底ツルツルイより現はれ出て、言ふ。

『多謝す、汝ノヴォゴロドのサヅコよ！ よくこそ湖底の住人を樂ませし哉。我は目出度き宴を、

催し居たるなり。汝のために、水底の客は、

みな興を催して歡べり、さて識らず、我、如何なる賞を汝に與へてよきか。

されど汝サヅコよ、汝はノヴォゴロドへ歸れ。

されば、明日は富める宴にか招かれむ。ノヴォゴロドの豪商も其席にありて飲み且つ食はむ。

かくて一人一人は己が自慢をすべし。或者は良馬を誇らむ。或者は青年時代の武勇を。

或者は彼がありし日の昔を誇らむ。

されど、賢き者は彼が老ひたる父を、母を、

また、無邪氣なる年若き妻を誇らむ。

その時、汝サヅコも自慢話すべし。次のごとくに。

「余はイルメン湖中に、金色鱗の魚あることを知れり。」と！

さるときは、彼等は同音に、さる魚は世にあらずと

争ひ云ふべければ、汝は彼等と賭をせよ

汝の狂暴なる首と、彼等の市場なる貴き品々と。

かくて、汝は絹網を振り湖畔に至りて投ぜよ。

一投一魚、我汝に金色鱈の魚を與へむ。その時に。

汝は市場の貴き品々を受取れば、

汝は、ノヴォゴロド商人貴客サヅコとなるべし。」

サヅコはノヴォゴロドに歸りたるに翌日果して貴き宴に招かれぬ。

富商は飲み食ひ、彼是と自慢話を始めたり、

彼等はノヴォゴロドのサヅコに向ひ問ふらく、

「サヅコよ、汝は何故に自慢話をせざるか。話の種なきか、自慢の種なきか、サヅコよ」
サヅコは答へぬ。

「否とよ。ノヴォゴロドの商人等、自慢話なきかと問はゞ云はむ。

無盡藏黄金の寶は物のかづならず、そはまた美しき年若の妻にあらず。余に誇るものなし、され

ど言はむ。イルメン湖には金鱈の魚ありと！」

富商等は忽ち彼と爭論し始めたれば、彼は言ふ、

「余は我が狂暴なる首を賭けん。其他に賭物なし」

「我等は市場の貴重品を賭けん。六人の富める商人が市場を！」

然る後彼等は絹網を振ひて湖水へ投じに行く。

第一投に金鱈の小魚を獲たり、第二にも又第三にも。

ノヴォゴロド商人等は、爲す術を知らざりき

萬づの事、サヅコの言葉通りになりければ。

彼等は市場を開きて貴き品をサヅコに渡しぬ。

そを受取るサヅコは此日よりノヴォゴロドの富商となり、

己か町にも地方にも商ひを廣めて、巨利を博しぬ。

かくてノヴォゴロドの富商サヅコは此處に妻をめとり、

白き石もて邸を建て、こゝにすべては神の代の如し。

空には赤き太陽燃え、邸にも赤き美しき日は輝けり。

空に仄かの日あるごとく、邸にもまた月は光りぬ。

群星空にあるごとく、彼が塔にも星きらめきぬ。

サヅコは手を盡して白石殿を美しく飾りたる後に、

祝宴を張りて、ノヴォゴロドの富商、貴人、役人を招きぬ。

役人の名は、ルカ・ジノザイエフ。

トマ・ナザリエフ。

一同飲み且つ食ひ、例によりて自慢話を始めたり。

或者は駿馬を、或者は勇力を、或者は青年時代を。

賢者は彼の老母父を、若き妻の無邪氣さを。

されどサヅコは邸内を趙遙しつゝ叫びぬ。

「やよ、ノヴォゴロドの豪商達、貴人達、役人達、つゞいて市民よ、汝等是我邸に飲み食ひて何を談らんとするか。また我とても何を高言せん。我黄金寶は無盡藏なり。華裳は着破るべくもなし。我侍従武士は買収し難し、我等は黄金の寶を誇りとせん。その寶もて、ノヴォゴロドの萬器を良惡の別なし買ひなば全市に器の影は絶えなむ。」

此時トマとルカの兩吏は速かに立ちて言ふ

「それもて我等と賭するによし」

サヅコ答へて言ふに

「我無限寶に何を以て賭くるか」

兩吏はノヴォゴロトの民のために辯ずるに

「汝サヅコは、三萬金を以て我等に賭を張れ」

かくて、そは諾されて、人々は宴席より散り退きぬ。

翌朝早く起き出て、サヅコは侍従武士等を目醒まして、

彼の寶のうち、彼等が望む儘の物を取らせ、

かくして、彼等を市場へ遣はしぬ。されど彼も直ちに市場へ向つて、

ノヴォゴロドの凡ての器具を、良惡の差別あらばこそ。購ひぬ、

翌朝再び早く起き武士等起して望むまゝに

寶を與へて市場へ行くに、前よりも、更に數多き器具ありたれば、彼れは凡ての種類をまた購ひぬ。

かくして第三の日に、彼が市場に行けば、

そはノヴォゴロ方の勝利とてか、モスクワより

無数の器具は急ぎ市場へ運ばれ居たれば、

市場の店々は、これにて溢るゝばかなるより、

サヅコは考へに沈みたり。

「我若しモスクワより來れる品々を買ひ盡さば、器具は猶も、海の彼方より續々來るべし。

我連も是等白き世界の品を買ひ盡す能はざるべし。

我サヅコ、富める商人なれど此度の勝利はノヴォゴロド方にあり。市は我より富めり。我はいさぎよく、三萬金の賭を棄てむ」

彼はその三萬金を投し、是處に於て、大船を造りぬ、三十隻の暗赤き船と、他に三隻と。船首は野獸に似て、船側は龍に似たり。赤樹の船體、絹の繩索、麻の大帆、鋼の錠。船眼は貴き風信子、船眉はシベリヤの黒貂皮、鉛耳は黒灰色のシベリヤ狐皮を用ゐたり。此赤き船はノヴォゴロドの器具を山と積み、ヴォルコフ河を下り、ラドガ湖を経て彼のネヴァへ向ふ。その水路は青海原へ出づれども、彼は船を「黄金の遊牧民」へと進めて其處に。船に積みし器具を賣り拂ひて巨利を得たり。數多の箱は、赤金、白銀、美玉眞珠にて滿ち滿ちり。船は「黄金の遊牧地」を離るればサヅコはまた、主船「鷹」に乗りて船々を導きぬ。されど、青海に出てより、赤船は急に止りぬ。波浪は打寄せ來り、風は吼え立てぬ。

帆は風に靡りて、船は少しも進む事なく、其場に停止して、早動かずなりたるに、富商サヅコは、良船「鷹」より絶叫すらく、
「やよ、友よ、船人等よ、錘を下ろせ。
青海を測れ、暗礁岩石砂地なきか」
彼等は測りぬ、されど一物なければ。
商賣サヅコは部下に向つて云ふ。

「やよ、我勇敢なる従待武士。我等は暫く航海したり、十二年の長日月を。然るに我等は海神ツアルモルスに對し今日迄何物をも捧げざりき。そが爲に、今に到りて、海神ツアルモルスは我等が青海に沈まんことを命ずるものと見えたり。汝等赤金の箱を海に投ぜよ」
彼等は命の通りに行へども、浪は高く帆は破れ、船々は制せられて、猶も動かざるにより、富人サヅコは再び言ふ。

「やよ、海神の供物少し、今一箱を投ぜよ、純銀の箱を！」
されど、猶暗赤色の船々は動かざれば、美玉眞珠の箱は青海に投ぜられぬ、そもまた無益なり。
サヅコは、今一度言ふ

「我が愛する勇敢の侍従武士よ。既に海神は我等のうちより一人を海底に呼ぶと知れたり汝等運命の木札を造り、札に各自の名を認めよ運ある者の札は浮ぶべし。されど沈める札の主は、我等のうちより出て、一人海中に沈むべきものなり。」

サヅコの命は果されたり、されど、

サヅコの運命こそは、蛇麻草の花の總とはなれり、

サヅコ以外の船人の札は家鴨の如く海に浮びぬれど、

サヅコの札は石のごとく海底に沈み行けり。

富商サヅコは再び部下に向つて言ふ

「この運定めは不公平なり。これより各自他人の札を定むること、河柳を用ひて名を認めよ」

彼は命に従へり、然るにサヅコは一人、海の彼方の叙里亞都の鋼にて運を定めぬ。

かくして、他の札は軽々と浮べど、

ナブートの彼の札は、哀れ、沈みければ、

サヅコは種々の樹を試み驗し最も軽きを撰べり。

されど、部下の重さが浮ぶとき、

軽き彼の札は愈々重さを加へて沈めり。

とは言へ、彼の運命の札は夢浮ばざらむ。

まつた部下の運命の札は夢沈まざるべし。

富人サヅコは言ふ。

「我サヅコは早詮術なきこと明かなり、海神は青海に我が身を乞ふなり、やよ我愛する勇敢の從者武士よ！我大墨壺と餓鳥羽筆と紙とを持て。」

ノゾオゴロドの富買サヅコは摺椅によりて、

愛する勇敢の部下が、此品々を運び來るを取り、

檜樹の卓子に凭りて、彼が所有物の名を記しぬ。

そのうちに、多くは神の寺院に與へ、

多くは貧しき彼の兄弟に、彼の若き妻に、その残りは彼の勇敢なる護衛武士に與へたり。

かくして後、彼は泣き、部下に向つて言ふ。

「おゝ、我部下よ、愛する勇敢の者よ！汝等檜樹の船板を青海の上に置き、吾サヅコが、その上に降らば、青海の上にて命を棄つるに恐るゝことなからむ。まつた、兄弟よ、鉢に純銀を充たし他に赤金を入れ、また他の鉢に眞珠を満たして、其船板の上に置きよ」

かくて彼は右手に聖ミコラの像を取り、

左手には小さき楓樹の堅琴を取れり。

金の美麗なる琴絲見えたり。

彼は高價なる黒貂皮の外套を掛け、一同に打向ひて、

いとも悲しく泣きつゝ、別れを告げたるなり。

船は、そのまゝ白き世界へ

崇巖のノヴォゴロドへと向ひたり。

彼は海原の樅樹の船板に下り、海の上に身を置くに、

彼の暗赤色の船々は黒鷗の如くに、

迅やかに飛ぶがごとく、走り行きぬ、

ノヴォゴロドの富商サヅコは異常に怖れぬ、

樅の船板にて、海原に浮ぶとき。

さは云へ、彼はやがて、眠りに、陥ちぬ。

あゝ、彼が目醒めたる時は、身は大洋の底にありき。

彼は透明の波間に赤陽の燃ゆるを、見ぬ。

次に、彼は海神の住むてふ白岩の宮の、かたへに佇めることを悟りたり。

海神は神座の藁束に座して、言ふ。

『サヅコよ、ノヴォゴロドの富商よ！我は汝を此處に迎へたるなり。汝久しく海に航せるに拘はらず、海の王に何の供物をも捧げざりしたため、汝は今、我に對する供物として來れるぞ。我汝に問ひ、汝の答へを得んために汝を呼びなり。今露西亞にて最も偉大の價値あるものは何なりや。金か銀か、叙利亞都の銅鐵か？我は此問題のために海女神と論争したればなり』

『金と銀は露西亞にて、いと貴し、されど、叙利亞都の銅もそれに劣ることなし。何故なれば、金、銀はともかくも、銅、鐵なければ人は生活する能はず』

とサヅコは答へぬ。

『汝は右手に何を、また左手に何を持つか』

『右手には聖ミコラの像あり。左手は樂器』

『聞くならく、汝は堅琴の名手なりと。我ために一曲彈ぜよ』

と海神は言へり。

サヅコは悟れり、海底にありては彼の命に應ずるの外なしと。

かくて彼は堅琴を取り彈き始めれば、

海神は頓かに踊り狂ひ、彼の長衣の裾もて、

関を造り、外衣の袖を振はせにけり。

美しき海女の合唱舞踊するにつれて、

海人の群は、跳躍し舞踏しぬ。

かくすれば、青海は黄色の砂に濁り渡り、

巨浪大波狂ひ荒れつゝ、數多船數多人を沈め卷込む。

ザヅコは三時が間彈じ居たるに、

海女神は彼に向つて言ふ、

『汝の堅琴を破れよ！ノゾオゴロドの富人よ！汝の目には、海神が宮殿裏に踊りつゝあるやう見ゆれど、彼は海岸にありて踊れるなり。そがために數多の人々は溺れ亡び、凡ての罪なき者は失はる』

ザヅコは堅琴を破り、黄金の絃を切り絶ちぬ。

されど海神は猶も二時彈ぜよと命ずれば

彼は、堅琴は既に破れたりと大膽に答へしに、

そを繕ふに鍛工ありと海神云ふ。

ザヅコは折り返し、そを繕ふことは、

聖き露西亞に於てのみ出來得べしと言ひぬ。

『汝此處にて妻をめとらざるか、汝は青海にて美しき處女を妻に持つ心なきや』

と海神は問ひぬ。ザヅコは答へて、

『青海にありては、我は海神の意に従ふべし』

海神は彼に言ふ。

『汝商人ザヅコよ。第一の三百女より一人をも選ぶ勿れ。假令海女神汝に勸むるも。彼等をして行過ごさせよ。まつた、第二の三百人の女も同様にせよ。かくして第三の、最後に來る女を汝の妻とせよ。彼女は背低く、顔の色他よりも黒かるべし。されど、心して彼女に接吻し體に觸るゝこと勿れ。これを守らば、汝は再び聖き露西亞に行き、美しき太陽の白き世界を見得べければ也。若し汝が、彼に接吻せば、汝は永久に青海の底にありて白き世界を仰ぐこと叶はざらむ』

ザヅコは、言葉の如くに、第一の三百の處女と、

第二とを行き過ごさしめて、第三より、最後に來りしチエルナワなる處女を選びぬ。

海神は彼の爲めに大祝宴を張れり。

ザヅコは横たはりつゝ、深き眠りに落ちぬ。

かくて、漸く醒めたる時、彼は發見しぬ、

彼はチエルナワ河の峻岸にありしことを。
やがて眺め渡す彼の眼に映れるは、
ヴォルコフを急航し來る彼の赤黒き船々なり。
即ち、船にありては、勇敢の彼の部下等が、
青海の底にあるべきサツコの軍を案じ居たるなり。
峻しき岸に立てるサツコの姿は、
この時部下の眼界にも入りとて、
青海に残し來し彼のことなれば、
彼は驚異しぬ、彼等に先じて町に歸りしとて。
かくて、彼等は歡び騒ぎサツコを祝ひぬ。
やがて、彼の邸に行きしとき彼は、
彼の年若き妻に會釋して後赤黒船の荷を降しぬ。
聖ミコラの寺院と聖母の寺院を建造し、
彼の罪の許しを乞ふとて祈りけり。
再び彼は青海に船を浮ぶることなくして、

彼の町の邸に安樂に生活したり。

(此 話 完)

此一編は、ギリシヤ神話のアリオンや、アラビヤ物語によく似通つた點がある、けれども、私は全然別物だと考つて居る。また話中の人物及事柄は事實である。海神又は海王は勿論皇帝ではない。主人公のサツコは百歳の壽を保つたと云ふ記録があり、また國內諸々の寺院建築を企て、果したといふ話もある。其考證は確でないにしても、當人の傑物であつたことは事實らしい。

其終りの三

エルマーク (代表的史話)

光榮あるサラトフ草原の上
サラトフの町の下
カミシンの町の上
自由民コサツク集まれり
彼等兄弟は徒黨を組めり
ドンのコサツク、ゲレベンとヤイクと
彼等の領首はエルマーク、チモフェイの子なり

彼等の隊長は、アスバシカ、キヴレンチの子なり
彼等は小圖を企てたり。

『此夏、此暖き夏は過ぎつゝあり、兄弟よ
寒き冬は近づきつゝあり、兄弟よ

兄弟よ、我等は何處に此冬を過さむ？

ヤイクに行けば、恐ろしき狭路あり

ヴォルガに行けば、盜賊と思はれ

カザンの町へ行けば、帝王あり、

帝王イワン・とヴィシレウツチ——恐ろしや。

彼處に彼は大軍を擁す。』

『彼處にて、エルマークよ、汝は絞殺されむ

そして我等コサツクは征服され、

強固なる牢獄に投ぜられむ』

チモフエイの子、エルマークは説き出しぬ。

『氣を付けよ、兄弟、氣を付けよ、

そして我エルマークの言を聽け！

此冬をアストラハンに過さずや

美しき春巡り來なば

兄弟よ、我等は侵掠に出でむ

恐ろしき帝の前に我等が酒を得ずや。』

『おゝ兄弟等よ、我勇敢なる首領よ！

我等は銘々に船を作らむ

毛皮の橈架を、

松樹の橈を！

兄弟等よ、我等は神護の下に行かむ

嶮山を越えずや、

不貢の國に入らずや、

帝王、我等の主君は以て喜ぶべし

我は自身白帝の許に行かむ

我は黒貂の皮外套を纏ひ

我は白帝の許に行きて我恭順を示す

『おゝ！君は我希望なり、正教派の帝王よ、

我に死刑を命ぜずして、我が言を述ぶるを許せ、

我はエルマーク、チモフェイの子なれば！

我は盜賊なり、ドンの首領なり。

青海に航せるは我なりき、

青さ海を越えて、裏海を、

そして、數航を打ち破りし者、

我等の希望、我等の正教信者の帝王よ、

我は我が此の叛逆者の首を君に齎さむ、

それと共にシベリヤ帝國をも進ずべし』

正教派の帝王は言へり、

彼は口を開けり、恐ろしきイワン、グイシレウイツチ

『おゝ、汝はエルマークなるか、チモフェイの子の汝はドンの戰士の首領なるか

我汝と汝の徒黨を赦すべし

我汝の信ずべき忠勤により汝を赦すべし

我汝に相續財産として光榮ある温順のドンを與ふべし』

(此 謠 完)

これは、エルマークの功蹟を讃めた史謠で、この外に知られてゐるのに、ピョートル大帝のアゾウ占領や、クセニヤ・ポリソヅナ妃のことなどがある。皆、當時の作になるもので、珍らしい(以下参考)

「ボージ・ツアラ、フラニ」

「バフチサライの泉」

「コマリンスカヤ」

「ヨランダ」

「ツアールの許嫁」

「ドウプロウスキ」

「ルース、アムール」

「石のまらうど」

「荒野にて」

「コバンチナ」

「ムラダ」

「ユーゲネ・オニエギン」

「ボリス・ゴドウノフ」

「皇帝に捧げたる命」

「ルスタンとリウドミウ」

「コウカサスの囚人」

「ルーサルカ」

などは各有名なる民樂家に唄はれて來た、史謠である。けれども、是等のうちには近代の作になるものが多い。一寸參考のために掲げて置いた。

其一から其終りまでに、私は大體に於て、露西亞傳説俗謠の話を終へた積りである。民謠や史謠を挿んだのは比較研究に便ならしむるがためであつた。

傳説俗謠から色々の時代を経て、今日ではやゝ散文體の民謠が生れるやうになつた。遙かに千年の昔にさかのぼる時は、其處に一つの傳説俗謠があつたばかりで、それから、耳と目の兩岐に分れた。耳の方は、民謠になつた。目の方は今日の小説になつて居る。

私は今迄諸君と共に耳の方を研究して來たのである。耳の方から耳で聽くの方が眞實であるけれど窮したことがあつた。どうも仕方がない。

最初は、佛蘭西や獨逸、伊太利などの俗謠(傳説的)と比較する積りて一生懸命になつて居つたが、考へて見れば、そうすると大變長くなる恐れがあるために全然止めた譯である。

露西亞の謠の特徴を充分説明するには誰が何と云つても他國の謠を引合ひに出さなければ出來る話

ではない。

そこで、話は餘計な史謠や俗謠を列べて、消極的にその特點を示したのである。以上の大觀的記述を私は必要に應じて以下に詳釋しやう。

第二章 史謠三曲

英雄スヴィアトゴル

ドブルーニアと龍

ヴォルガとミクラ・セリアニノヴィツチ

英雄スヴィアトゴル

英雄スヴィアトゴルは良馬に鞍置いて、

野に乗り出す支度した。

渺茫たる平野の旅に

彼は血管に湧き溢れる力をためす、べき相手にも出會はなかつた。

力を負ひ乍ら、恰も重荷のやうに、彼は云ふのである。

『もしこの大空に輪が固けられてゐるならば、俺はそれを引ずり下ろしてやるのだが！もしこの濕へる大地に確乎と柱が立てられてゐるならば、そして、そこに輪が確乎とつけられてゐるならば、俺は全土を持ちあげ乍ら振ぢ曲げてやるのだが！』

かくて廣々とした草原を辿つて行く程に、前に、一人の旅人が乗りつけて來るのを見た。しかし、どうしても彼を乗り越すことが出來ないのだ。

彼は跑を乗り出したが旅人は相變らず前に居る。

——大きく、一跳び——だが旅人は相變らず彼の目の前に行く。

そこで此英雄呼んで云ふに、

『おい！そこに行く旅の者。暫く止つてくれ、俺は良い馬に乗つてゐるのだが、どうしてもお前に追いつけないのだ。』

すると旅人はハタと停つて、脊負ふてゐた一對の小さい革囊を取つて濕地に投げつけた。

『お前の革囊には一體何が入つてゐるのか？』とスヴィアトゴル。

『大地の上から取り上げて見たら、何が入つてゐるか解るだらう』とこの男の答へ。

そこで良馬を降りたスヴィアトゴルは、片手にその革囊を引つ摺み——取り上げやうとしたが駄目だつた。

ときに彼は兩手で摺んだ——が、たゞ通ふものは吐息だけで、

彼は泥土の中へ膝までぬかつた

白い顔から流るゝものは涙でなくて血だ。

その時スヴィアトゴルは云つた。

『お前の旅囊には一體何が入つてゐるのか？俺の力はまだ——亡びないが、俺はこれを持ち上げ

ることが出来ないよ』

『そこの中には地球の重さが入つてゐるのだ。』とこの男は答へた。

『するとお前は誰だ？ お前は何と云ふ者か？ そしてお前の名は何だ？』

『俺は村人の子、ミクルーシカ、セリアニノウイツチといふものだ。』

『ではそのミクルーシカ、神が與へた俺の運命どうして知ることが出来るか、俺に教へてくれ』
『路の岐れ目に出るまで眞つ直ぐに馬を乗りつけろ。そこで左手へ廻つて、全速力で馬を放て、さすればお前は北の山々に行き會ふだらう。その山々のある大きな樹の下に一人の冶工が立つてゐる。その冶工についてお前の運命を尋たらよかう』

ところでスヴァイトゴールは命ぜられた通り三日の間馬に乗りつけ、一本の大樹と一人の冶工に出會つた。冶工は立ち乍ら美しき二つの毛を鑄てゐた。

英雄は尋ねた。

『お前は何を造つてゐるのか。冶工よ』

『俺はこれから結婚しやうと云ふやうな人間の運命を拵へてゐるのだ』

と冶工は答へた。

『すると俺は一體どんな女と結婚するかしら？』

『お前の嫁になる女は海に近いこの國內にゐる。この王様の町の。その女は三十年間も糞の塊の上に横つてゐたのだ』

そこでこの英雄は立ち乍ら考へた。

『いや何だよ、俺はこれからその海邊の王國へ出掛けて行つて俺の嫁になる女を殺してやらう』
そうして彼は海邊の國の王立の町へ出掛けたのだ。

ある一軒の哀れな小屋へやつて来て入り込んだ。

そこには誰もゐなかつたが一人の處女が糞の塊の上に寝てゐた。

そして彼女の體はまるで縦の皮のやうだつた。

スヴァイトゴールは五百ルーブル取り出して卓子の上に投げ出し乍ら、

鋭い劍で女の眞つ白い胸を突き刺した。

そして彼はこの國を立ち退いた。

すると後で起き上つた處女は自分の身の廻りを見詰めるのだ。

彼女の手足からは縦の皮が剥げ落ちて、

全世界にこれまで見たこともなければ、この白い世界のどこにも聞いたこともないやうな美しい娘になつたのだ。

卓子の上には五百ルーブルの金があつた。

彼女はそれで商賣を始めた。

彼女はこの蓄へられた知らない黄金の寶で暗赤色の船々を造つて、貴重器具を積み込み、壯大なる青海原へ浮かび出た。

それから彼女が聖山の畔の大きな街に來た時に、その貴重の寶を他の貨物と替へ始めたのであるが、彼女の美貌の噂はこの街と云はず國と云はず忽ちに擴がつて、人々は集りつどひ乍ら彼女の美に打たれたのだつた。

英雄スヴィヤトゴールも亦その中に混つて、

彼女の美しさを眺めに來た。

そして彼女に戀して口説きはじめた。

この二人が夫婦になつたあとのこと、

彼は自分の妻の眞つ白な腕に一つの疵を見つけたのだ。

「これは何の疵だ？」と彼は尋ねた。

すると彼の妻はかう答へた。

「海邊に近い妾の國へある一人の見知らぬ男がやつて來て、妾の小屋の卓子の上に、五百ルーブ

ルの金を置いて去つたのです。ふと妾が目醒して見ると、それこの疵が妾の胸についぬました。そして縦の皮が妾の五體から剝げ落ちてゐたのです。尤も、その前の日までに、妾は三十年の間糞尿の塊の上に横つてゐました」

そこでスヴィヤトゴールは悟つた。いかなる者でも自分の運命から遁れ去ることは出来ぬのだと。(この史話完)

(註)「スヴィヤトゴール」は、「史話」の中の「ボガツイル譚」で最後のものである。即ちウラジミル期の先驅としての純神話期或は前歴史期の中で最終に來る話でなければならぬ。この期に屬する話で私たちの目につくものはウルオガやミクラヤスウイヤトゴールと「四十人の巡禮者と一人」なので、是等はいづれも、この時代の無名の英雄として考へねばならぬだらうと思ふのである。その他の一二は擧げないけれども、それは「イリヤと偶像」の中にも現はれてゐるし、その中には、この古代民族の代表的人物として、イヴァニウオシなどがあることを忘れることが出来ない。ところで、この英雄の名は彼が住んでゐるナ、スヴィヤチウク、ゴラク即ち聖き山から來てゐるので、この聖き山が、いづれの邊にあつて何と云ふ地理上の山であるつかと云ふことは研究されてゐないやうである。ロシア傳説の研究家として知られてゐるイザベル・ハブクツド女史は、それを神話的に解釋して「雲」ではなかつたと云つて居る。それは兎も角も、例のプラーグの「コスマの年代記」によればスヴィヤトボルク山に隱遁してそこで秘かに死んだことになつてゐる。それとこれとを考へて見るのも面白からうと思ふ。そのスヴィヤトボルクも、このスヴィヤトゴールと同じやうに、ロシアに對して何の敵對もしなかつた人物であつたことは記録的に解つてゐる。しかし、話が前に戻るやうであるが、聖き山の住人を「雲」の精として、その偉大なる劍を電光と考へて、それが、夏春に空を離れて、秋の暴風雨の鐵帶を支配する。その鐵帶は冬の寒い手が雲の上に置かれる。そして、この雲の精は

寒さのために凍えて冬眠をする、つまりそれが、この英雄の死であると云ふやうな考へはロシア人が一般に描いてゐる想像なのであつた。またかうした話に似寄りもので、マセドニアのアレキサンダーに關する傳説がある。それはこの時代た既にロシアにも傳つて來てゐたし、現今讀まれてゐるノルヴェーヤやスウェーデンの傳説や、アラビヤ物語の中にも散見し得るものであることを参考のために附け加へて置きたいと思ふのである。

ドブルーニアと龍

若きドブルーニアは彼の強き弓を取り
火の如き小さき矢を負ひて

狩りに出て、「青海」の畔に出た。

はじめのうちは、鵝鳥も白鳥も家鴨も見つからなかつた。

次の濱邊にもその次の濱邊にも見つからなかつた。

すると彼の落ちつかぬ心はあせり出した。

彼は振り返つて家へ急いで戻つた。

削られた四角なベンチに腰かけて櫛の床の上に目を落した。

そこへ母親が来て來てかう云つた。

「おゝ若いドブルーニヌシユカ・ニキチチよ！お前は氣嫌よく戻つて來なかつたのだね」

「えい、お母さん。！何卒私をブチャイ河へやつて下さいな」とドブルーニアが云つた。

「いゝえいけませんよ。ブチャイ河へ行つた人で、今まで戻つて來た人は一人もありませんからね」と母親が答へた。

「でもお母さん、お母さんが行つていゝと仰有れば、行きますよ。そして、行つてもいと仰有らなくても僕は行きますよ」とドブルーニアが云つた。

だから彼の母親は承知した。

彼は花の衣裳を投げ棄て、

旅する着物を纏ひ乍ら、

ギリシヤから渡りの縁取つた幅廣の帽子を被り、

今まで誰も乗らなかつた良馬に鞍置いて、

彼の強弓と火の如き矢と鋭い劍とどこまでも届く鎗と戦争に用ふる鎗矛を携へた。

かくて一人の小さい小姓をつれて乗り出すとき、

母親はかう云つて彼に命令した。

「もし、お前がブチャイ河へ行くならば、恐ろしい暑さが降つて來るだらうが、お前は決して母なるブチャイ河で泳いではいけない、なぜなら、その河の流れは烈しい上に激し易いのである、そして、あの第一の流れからは火が燃え上るだらう。その次からは火花が降つて來るだらう。第

三からは、煙の柱が立ち昇るだらう」

人々は、この善良の若者が馬に跨るのも見ることが出来なかつた。

彼等はこの若者が乗り出して行くのも見なかつた。

たゞそこには霧が遙かの平野を閉してゐるばかりだつた。

彼が、母なるブチャイ河へ出た時に、

迎も堪へられないやうな暑さが押し寄せて來た。

彼は母親の教へに従はなかつた。

彼は頭からギリシヤ渡りの帽子を取つて、

旅衣をを脱ぎ棄て、

七重の絹の足袋を脱ぎ、

ブチャイ河の流れに溶し始めたのだ。

「私の母はこの河が荒つぽくて怒りやすいと云つたが、こんなに静かだ——雨水の溜りのやうに」と彼は云つた。

彼は第一の流れに家鴨のやうにもぐつた。

同じやうに次の河流にも、——

と！そこには風もないのに

雲が浮んで行く、

雲もないのに

雨が落ちて來た。

雨もないのに

電が閃めた。

電もないのに。

火花が夕立のやうに降つて來た。

そこに厚い闇が空を暗くすることもなく、

陰暗な雲が降つて來ると云ふのでもなく、

猛々しい龍がダブルイニアの頭上に飛び下つて來る、

十二本の尻尾を持った洞窟の野蠻な龍が。

「おー！若いダブルイニア・ニキチチよ！」

と龍が聲かけた。

「さあお前を食べて了はうか？ダブルイニア！俺はお前の體を尻尾に乗せて生け捕らうか」

「お、龍の畜生め！お前がドブルーニアの俺を捕へるなんて、それやいつのことだ。威張るなら俺を捕へてからにせろ、だが、お前はそのドブルーニアを瓜先にまだ引つけておかないぢやないか！」

と云ひ乍ら彼は第一の流れへ素早くもぐり込んだ、かと思ふと第二の流れから出て来た。だが、うろたへた小姓はドブルーニアの良馬に打ち乗つて逃げ出してつた。

その時、強弓も利劍も長鎗も鎗矛も持ち去つて了つたのだ。

たゞ残つてゐたのは一つの帽子、ギリシヤから持つて来た縁廣のそれだけだつた。

ドブルーニアは、その帽子を掴み取り、

河岸の砂を一抔詰め込んで、

いやな獣へ擲ちつけさまに、

三本の尻尾をへし折つた——いゝ尻尾を。

すると洞窟の龍はドブルーニアへ

「お。若いドブルーニア・ニキチチよ！俺を無駄死させるな。俺の無邪氣な血を流してくれるなよ。俺はもう聖いロシヤへ飛び込まないし俺はもうこれから英雄を幽閉するやうなことはしないし、お前たちの乙女等や孤兒を絞め殺すやうなこともしないから。俺はお前のおとなしい龍にな

らう、そしてお前、ドブルーニアは俺の兄になつてくれ、俺はお前の妹にならうから。」

ドブルーニアは龍の誓を容れて

彼女の願通りに放してやつて母の家へ戻つた。

祝宴の部屋の四角なベンチに座つた。

だが、狡猾の龍は王立の町キエフの空を翔つて、

ウラジミール太公の姪の美しき姫を捕へ、

丘の洞窟へ連れ去つた。

丁度その時主公ウラジミールは、

あまたの王子、貴族、勇女、力強き勇士、

善良なる遊歴者の若人たちの爲に、

榮譽ある祝宴を張つてゐたのだ。

ドブルーニアは母親に別れを乞ふて

その榮譽ある祝宴に行かうとする。

「いゝえ、お前は自分の家に引つ込んでゐなさい。ドブルーニア。お母さんと一緒にね。そして酔つ拂ふまで青い酒をお上り、それから黄金のお寶を構はずどん／＼費つても、あの祝宴に行く

ことはなりません』

だが、彼女の悴がどうしても行かうとするから、

彼女は願ひを聞いて別れてやつた。

ドブルーニアは例の通りの身仕度した。

小さい足に緑色のモッココ皮の靴穿いた

踵の重い、爪先の尖つた靴を

その爪先には卵も轉がつて行ける。

その踵の下を雀でも飛んで行ける。

彼の着物は花織もので、

彼の外套は海を越えて來た黒貂皮だ。

彼は良馬に鞍置いて廣々とした宮廷へと乗り出した。

そこへ着いた彼は、中央の洞の柱の黄金の輪に馬をつないで、

祝宴の廣間へつか／＼と入つて行つた。

廣間の様子がすぐ目に映ると、

二人、三人、四人の各方へも、特に太公や公妃へも、敬々しく敬禮を施した。

すると人々は大きな譽の席の檜の卓子へ彼を連れて行つた。

そこには香高き食べ物と密の飲み物とがあつた。

先づ人々は洋盃に青い酒をつぎ、その次にビールを、第三番目に甘き砂糖水を。

その洋盃の大きさは手桶に一杯半あつた。

その目量は一ブード半もあつた。

これをドブルーニアは片手に受取つて

ぐつと一息に呑み干した。

この宴席に列なつてゐたらウラジミール太公は捲髪を打ち乍ら、

是等英雄達を見渡してかう云つた。

『お、汝強健の英雄よ！我今汝等に一大任務を負はせるぞ、汝等これよりツギーの山々に登り

て美しの佳人、我が姪を連れ去りし猛き龍の許へ參れ』

すると巨きい男がその次の者の後ろに隠れる――

そう云ふ風に代る代る、小さい者の後ろへ。到頭列の一番小者の蔭に隠れて答ふるものもない始

末だ。

ところが、中央の卓子からカラムイチエツカの太守セムイヨンが口を開いた。

「小さき我父よ！王市キエフのヴラジミル殿よ！ほんの昨日であつたと思ふが、私は廣々とした野原の中の、あのプチャイ河の向ふでドブルーイニアが龍と闘つてゐるのを見ました。その時あの龍が彼を欺して彼を見と呼び自分を妹と云つてゐました。だから、ドブルーイニアをお遣しなさい。美しき姫を取り戻しに、あのツギー山へ」

そこでヴラジミルはドブルーイニアへ命令した。

ドブルーイニアは然し嘆き悲しんだ。

彼はこの大理石の部屋の中に突つ立ち上り、

櫳の床を踏みつけた。

卓子はぐら／＼と揺れ、

酒は瓶の中で踊り顛へた。

そして英雄達はその打撃によつて腰掛けの上から放り出されて了つた。

ドブルーイニアは宮庭に飛び出して

黄金の輪から良馬を離し、

打ち跨がつてさつさと我家へ歸つた。

彼が上等のトルコ大麥を馬の前に撒く時

彼の庭の霧の中で。

彼は母の住居へ入つて壁床に腰かけ乍ら、

彼の狂暴なる首をうなだれてゐる。

「お前は何を悲しむのですか？祝宴の席順がお前に不相應だつたのかい、それとも似合はしからぬ場所へ坐らせられたのかい？お前にも洋盃が廻つて来たかい。どこかの酔つ拂ひがお前の目の中へ唾でもかけたかい？それとも美しい娘さん達がお前を見て嘲つたとても云ふのかい？」

と彼の母親は訊ねた。

「私の宴席は一番名譽な場所でした。一番大きな場所でした。どこの馬鹿も私を怒らせるやうなことはしません、どんな娘達も私を嘲ひやしませんでしたがヴラジミル太公が私に大層重い役目を云ひつけられたのです。私はこれからツギー山へ行つて太公の姪をあゝの洞穴の龍の手から取り戻して来なければならぬのです」

「そんなことなら何も悲しむには當らないよ、ドブルーイニア、今夜は早くお休み、そして明日にした方が賢いよ。何故つて、夜よりも朝の人が人は賢くなつてゐるからね。」

と尊いやもめの母、アフイムイヤ・アレキサンドロヴナが云つた。

彼は彼女の言葉に従つた。

翌朝早く起き出て、眞に白い體を洗ひ潔め、やがて旅立つ支度をした。

「悲しむには及ばないよ、お前のお父さんもあのツギー山へ登つて畜生の蛇をお殺しなすつたことがあるんだからぬ、今、おなじやうにお前も行かなければならないのさ。だが、決してお前の足の早い強い弓を取つてはなりませんよ。また、お前の戦鎗も、頸太棒も、鋭い劍も猶更のことといけません。妻がお前に七絹絲の鞭を上げやうからそれを振り廻すのです。その他に魔術の布を上げませう。お前の右の手が下りる。するとあかりがお前の目から消えて了ふ。そこへ龍がお前を引き摺りに来る、そしてお前を叩きつけやうとする。そこへ小さい龍どもがやつて来て、踏みつけやうとする馬の距毛を噛まうとする。が、その時お前は魔術の布を取つてお前の白い顔へあて乍ら、お前の美しい眼を綺麗に拭くのです。すると、お前は以前よりもずっと力強くなるでせう。その時この七つの絹絲で編んだ鞭を衣囊から取り出していきなりお前の良馬の耳と耳の間と後趾を打ち叩くのです。するとお前の栗毛が跳り上つて距にからみついてゐる龍の手を振り放し乍ら一匹のこらず踏潰して了ふだらう。そこでこの絹の鞭を振り廻す。そこで以てお前は龍を曲げ伏せて征伐することが出来るのです、それは丁度あの基督教の話にある獸のやうな具合にね。その時お前は十二本の尻尾を斬り取つて一息に殺して了ふのです。」

かくてダブルイニアは彼の良馬に乗つて、

ツギー山の龍が洞へやつて来た。

彼は十二日の間と云ふものは、

ただ大麥の卷食麵包の外何一つ食べなかつたのだ。

その壯大な丘に乗りつけたのは丁度十三日だったが、

龍は彼女の穴にゐなかつた。

太公の姪も見當らなかつたのだ。

そこで彼は小さい龍共の上を踏みつけ廻ると、

小龍どもはも早馬が跳べないほどにぐると距毛へまきついた。

彼は衣囊からサマルカンドの絹鞭を出し、

良馬の耳の間と趾を打ち叩いた。

良き栗毛はいきなりそこらを跳び廻つて、

しがみつくすべての小龍を振り拂ひ、

一匹のこらず踏み潰した。

ダブルイニアは廣々とした平野を見詰めたときに、

おゝ！呪はれたる龍が彼を目がけてまっしぐらに飛んで来る。

そして龍が彼の姿を見つけたとき、濡れる地上に爪をばづしてはたりと落した。柔らかな密な草の上に、

ある一人の英雄の屍を。

そしてドブルーイニアへ躍りかゝつた。

「あゝ。小さきドブルーイニア・ニキチチよ！お前は何故譬ひを破つて私の子供をすつかり踏み躪つて了つたのか？」

「おゝ。お前は龍の畜生だな！お前はキエフの空で何をやつたか、お前はあの若い美しいブチアチチナ姫を狙ひ取つてもいゝのか？今彼女を何の戦ひも流血もなく俺の手に渡せ」

「いや私は無事に彼女を渡さない」

そこで彼等は一日、日がくれる迄戦ひをつゞけた。

ところが蛇は大いに勝味になつて來た。

だが、ドブルーイニアは、母の忠告を思ひ出して、

美しき眼を綺麗に拭き乍ら白い顔を蔽ふた。

すると彼の力はぐつと強まつた。

次の日も夕方まで闘ひつゞけた。

その次の日も――

ドブルーイニアが蛇の側から逃げ出すかと思ふて。

しかし、天來の聲が聞えて來た。

今三時間も戦へば、彼の勝ちになるぞと。

彼はづゝいて闘つたが、

流れ進む龍の血潮の洪水には堪えられなかつた。

彼はその時再び天の彼方から聲が聞えなければ龍を棄て、立ち去つただらう。

「ドブルーイニア、もう三時間蛇の側に居れ。そしてお前の長鎗を湿地に擲けてお前の短鎗で手品つかへ。口を開けよ、母なる湿地よ、四方へ口を開けよ！そして龍の血を呑み干して了へ！」

それを守つて三時間戦つた彼は到頭勝つた。

彼は母親の言葉を思ひして、

サマルカンドの絹の鞭を取り出し、

十二の尻尾を斬り離し、

罪深き五體を寸断して平野へ放り出した。

そのあとで龍の深き洞へ入り、

ロシア人の囚者を救ひ出したのだ。――

皇帝達や王様達や太公達がどやどやと、

洞の中からは下々の者は黒山のやうに出て来た。

そうした囚者達を行きたい處へ行かせた後で、

若き美しき姫を探したが見當らぬ。

だが、ある奥まつた窟内に彼女は

両手を鎖でくゝられて横つてゐた。

彼は彼女を直ぐさま助け出して、

白き世界へ導いた。

そこで彼は良馬に跨りさま、

美しき姫を右の小膝にのせて

平野はるかに乗り出した。

美しき姫の云ふには、

『あなたのお働きに救はれた妻はよろこんでこれからあなたを小さいお父さまと呼びたいけれども、それはよして、あなたの立派な働きに救はれた妻はあなたを妻のほんとの兄さんと呼びたい

けれどもそれもよして、妻はよろこんであなたをお友達、戀人と云ひませうか？でもあなたは妻を愛して下さらないわね。ドブルーイヌシユカ様』

ドブルーイニアは彼女に答へて云ふやう

『おゝ、美しきブツイチチナさん！あなたは貴族のお生れてはありませんか、私は先祖からの百姓なんです。だから私をお友達とか戀人など、云ふことは叶ひますまい』

二人が平野を横ぎつた時、

ある大きな土塊の投げ出された馬の足跡へ行き當つたが、

それは膝まで入るやうな大きな穴になつてゐた。

ドブルーイニアは途中でアリヨシヤ・ポボヴィツチに追ひついた。

『おい、アリヨシヤ・ポボヴィツチさん！この美しきお姫様を受取つて下さい、そしてキエフ王市の美しき太陽ウラジミル公の許へ連れて行つて下さい、そして私の代りを勤めて下さい』と聲かけた。

その通りにアリヨシヤはやつてのけた。

かうして美しき姫を送り届けた後で、

ドブルーイニアは例の馬の足跡をつけて行くうちに一人の英雄が平野の中を行くのに出會つた。

その勇士は女の着物を纏ひ美しい良馬に乗つてゐた。

『おい！これは、ハテナ、英雄でなかつたわい。いやまつたく勇敢な女使者か、娘か人妻か！』とダブルイニアは呟いた。

そこでこの戦勇女のあとをつけ乍ら

ダマスカスの鋼鐵の槌矛を發矢とばかりに彼女の大きな首に投げつくれば、

この戦ひ好きの乙女はしつかりと良馬に跨つたまゝ、

身動きもしなければ振り向きもしない。

良馬に乗つてゐたダブルイニアは怖れて

この勇敢なボリアニツアと別れて了つた。

『ダブルイニアの勇氣は昔のまゝだが。力は昔の力でなくなつて了つたわい』と彼は呟いたのだ。

さて又行くほどに、平野のかたほとりに、

周圍六尋ほどの濕れる樫の木があつた。

ダブルイニアは槌矛を取つて樫に投げつけたが、

それが微塵に碎けたので彼は仰天した。

『まつたくだ、ダブルイニアの力は昔のまゝだが、元氣は昔ほどもない』と彼は呟いた。

そこで彼は再び先刻の勇敢な女戦士のあとを追ひかけた。

そして彼女の暴風のやうな頭へまた投げつけた。

彼女は身動きもしなかつた、後ろも振り向かなかつた。

ダブルイニアはいたく驚いた。

そして今度は十二尋もありさうな濕れる樫の木で力試しをした。

すると樫の木はまた木葉微塵となる。

そこでダブルイニアは良馬に打乗つたまゝ、ますます怒りつぽくなつて、

三たび勇敢な女戦士のあとを追ひかけて、

彼の槌矛を女に投げつけた。

すると彼女はふと振り返りさまかう云つた。

『妾は先刻からロシアの虜が來て食ひつくのだとばかり思つてゐたが、まあ、ロシアの勇士が叩くのだつたのねえ』

そう云ひ乍らダブルイニアの黄色い襟髪を引つ掴んで、

彼の良馬からねぢ落して、

彼女が持つてゐた深い革囊へ押し込んで

この廣々とした平野を乗り出した。

お了ひになると彼女の良馬が物を云ひ始める。

「お、ミクラの娘ナスタシア殿、勇敢なる女戦士の貴女よ！二人の勇者を私は迎も擔いで行くことが出来ない。力に於てはあなたもあの勇士と同じことだが、元氣ではあの勇士はあなたの二倍もありますよ。」

すると若きナスタシア、ミクリチナが云ふ。

「もしこの勇士がよつほどの老人ならば、妾は首を斬り落して了ふが、もしずつと若くて見かけでもよかつたら、妾はこの男を妾の友達、妾の戀人と云ひませう。もし彼が妾をよろこばせなければ、妾は彼を手のひらに乗せて、一方の掌で押し潰してやりませう。そして勇士のパン菓子を拵へてやりませう。」

そうして彼を革囊の中から引ずり出して見ると、これはまたスツカリ氣に入つたもので、

「まあ、可愛い、ドブルーニア、ニキチチさん！」
と彼女は口走るのだ。

「あなたはどうして私を知つてゐるのですか？ 勇ましい乙女の勇士よ？ 私はあなたのやうな婦人に知り合ひはない筈だが」

「妾はキエフの町にゐたことがありますよ。そしてあなたにお目にかゝつたことがありますよ。ドブルーイヌシユカさん。でもあなたかは屹度妾を知らないでせう。妾はポーランド王の娘、若きナスタシア、ミクリチナです。そして妾は敵を探さうと思つてこの平野を迂路つてゐるので、もしあなたが、妾を妻にしてくれるならば、ねえ、ドブルーニアさん、妾はあなたの命を助けて上げませう。だが、あなたは確かな誓ひを立てねばいけません。でないと、妾はあなたを烏麥のお菓子にして了ひますよ。」

「何卒命ばかりは助けて下さい。若きナスタシアさん。そうすれば、私は屹度立派に誓ひを立てませう。そして黄金の冠をあなたへ上げませうから」

かくて二人は互に誓ひを立て、

キエフの町の爛佳なるヴラジミル太公の許へ向つて行つた

そこへドブルーニアの母親が會ひに来て尋ねるには、

「ドブルーニア・ニキチチよ。お前が連れてゐるのは誰ですか？」

「あゝお母さんのアフイムイヤー・アレキサンドロヴナ、尊いやもめのお母さんでしたか！ 私は自分

の敵手を連れて來たのです。敵手と云ふのはこの若きナスタシヤ・ミクリーチナのことです。私はこの人を連れて黄金の冠を取りに行くのです』

それから彼等はヴラジミル太公の許へ行つて、

祝宴の大廣間へつか／＼と入つたが、

そこでドブルーイニアは居列ぶ人々に、

特に太公を公妃とに、

敬々しく禮を施した。

『おゝ、美しき太陽、王市キエフのヴラジミル様！』

『やあ、ドブルーイニア・ニキチチよ！そこへお前が連れて來たのは何者だ？』

そこでドブルーイニアは今までの話をすつかり打ちあげた。

かくてナスタシヤはこのキリスト教徒の信仰の中に迎へられて、

黄金の冠を二つ貰つたのだ。

改めてこゝに嬪佳の太公ヴラジミルは、

二人のために三日もづゝいた宴を催して、

かくて二人は暫時幸福に暮したのである。

(註)この勇士ドブルーイニアは歴史上の人物である聖ヴラジミルの叔父だと云ふ説と、一二二四年のカルカの役で戦死したりアザンのドブルーイニアであると云ふ説と二つある。この傳説俗話の中には、このドブルーイニアはヴラジミル太公の甥になつてゐることもある。かうした嬪佳な禮儀に篤い太公と相對して恐ろしく粗暴な勇士のドブルーイニアを配したのは、この太公は、「美しき太陽」(一本には赤い太陽ともある)の性質が極端に受動的であるところから、ドブルーイニアのやうな一方に極端な、戦争好きの性質をこの勇者の中に體現させたものであることは明らかであらう。例のアポロやヘルクレスや、ジグフィルドのやうな傳説中の人物で、丁度、例のベルセウスやイェゴリーや日本武尊と同様に、龍を退治して囚はれの婦女子を救ふ役目を勤めてゐるのである。北方神話を参照すると、ドブルーイニアはオチンと同格であるし、ミノンのイリヤの如きは夫に相當してゐる事實を發見する。猶ドブルーイニアがロシヤベネロープのナスタシヤを棄て、何處へか行つて居つたと云ふ話は、ミハイル(遊牧者)が長い間石の中に閉ぢ込められてゐた神話と符合する。或はイリアが籠の中に押し込められてゐたことなども相似てゐる。夜(闇)と冬(密氣)が即ち光(晝)と熱(夏)との神性に含れてゐるのである。ロシヤの詩で長い間家をあけて外へ出て行つた夫の歸宅を詠つたものは、その抒情詩的立ち場から云ふと、西部ヨーロッパの口傳文學時代の傳説よりは、より完成されて居り、より原始的であると思はれる。

ヴォルガとミクラ・セリヤニノウイツチ

王立の町キエフの典佳なる太公ウラジミルが彼の甥ヴォルガに三つの町を與へた。

クルツオヴエツとオリエコヴエツとクレスチアノヴエツと。

ヴォルガが諸國諸種族の間を歴めぐつたしるしとて。

あちこちの皇帝や王から貢がれた土産を持つてゐた。

それをこの壯嚴な町キエフに携へて來た。

そして彼の叔父ウラジミル太公へ贈つた。
彼は黄金・銀・大真珠を集めてゐた。
その他にアラビア青銅もあつた。
それは錆びることも蝕くこともないから、
黄金や真珠や銀よりも貴かつたのだ。
そこで今この三つの壯大な町が叔父のウラジミルから與へられたが、
そこには首の剛い奴共が住んでゐて、
誰の云ふことも聞かなければ又、
贈り物も貢物もしないのであつた。
そこで若いヴォルガ・フセフラヴィッチは善良な護衛隊を集合して、
彼に屬する町々を占領するために押しよせて行つた。
彼等が平野を乗り過ぎやうとするはづみにヴォルガは一人の農夫が耕する音を聞きつけた。
鍬は響を立て犁は石に當つて鳴つてゐた。
ヴォルガは農夫を探し乍ら乗り廻つた。
彼は夕暮近くなる迄終日乗り廻つた。

そして犁が石に當つて鳴る音を平野越しに聞いたのだ。
だが、暗い夜は途中で彼を襲ふて了つた。
かくて彼は農人の姿を發見することが出来なかつたのだ。
次の日も彼は黄昏どきまで農夫を探し廻つた。その次の日も。
そしてその三日目に彼は農夫が鍬を振つてゐるところへ出會した。
農夫は畦の片方へ土の塊を放り出してゐた。
農夫は濕れる檜、切り株、大きな石ころなどを掘り出してゐた。
彼の持馬の鶯牡馬は「揚げ首」と云ふ名前なのだ、
何故なら雲の上まで首をのび揚げる事が出来るから。
彼の鍬は楓樹で出来てゐた。
彼の手網は絹、犁はダマスカスの鋼鐵で銀の飾がついてゐて、把手はほんもの、黄金だつた。
彼の捲髪は黒貂のやうに眞つ黒い眉の上まで波打つてゐた。
彼の眼は鷹のやうに澄み切つてゐた。
彼の靴は爪先の尖つた緑色のモロッコ皮なのだ。
そして靴底の凹みを雀さへ飛び抜ける事が出来る代物だつた。

彼の帽子は毬毛で出来て、長袖は黒天絨絨だった。

太守ヴォルガは次のやうな言葉をかけた。

『農夫よ。神様がお前の耕耘を手傳つて下さるだらう！』

『ヴォルガ・ノセスラウイチ様、あなたは軍隊をつれてお出になりましたか？ヴォルガ様、あなたはこゝへ来るまで随分馬にお乗りになつたてせうね。あなたの護衛兵と一緒に？』

と農夫は答へた。

『俺は自分の叔父にあたる典佳の太公ヱラジミルから貰つた町、クルツオヱツとオルエコヱツとクレスチアノヱツを占領に来たのだ』

『ほゝさうですか、ヴォルガ・ノセスラウイチ様！あそこには泥棒共が巢食つてゐますぞ。二日ばかり前に私はあの町へ行きました。その時私は百ブード鹽囊を二つ鶯牡馬に積んでゐたのですが、彼奴等がやつて来て通行税を出せと云ふのですから、それをやつたが彼奴等はまだ承知しないのです。だから、私が一人を千づゝ引つばたくと、立つてゐた奴は坐り込むし、坐つてゐた奴はひつくり返るし、寝ころがつてゐた奴は永久に腰が立たなくなつてしまつて了つたのですよ。』

そこでヴォルガが云つた。

『農夫よ！俺の友達になつて一緒に来てくれ』

そこで農夫は絹の手綱を緩め乍ら、

鍬から牡馬をはづして、

その良馬に跨ると共に一緒に乗り出した。

だが農夫は直ぐ考へた。

『ほう、ヴォルガ様！私は畦の中に鍬を置き忘れてました。何卒あなたの御家來に云ひつけて、あの鍬を畦の中から引上げ、そして犁の土を掻き落して、泥坊に見つけられないやうに河柳の茂りへ投げ込んで下さい。もし見つかつたら見つけた者の云ひなり次第に働く奴ですから——兄弟の百姓達の』

かくて、ヴォルガは力強き侍の中から五人を遣した。

侍達はさまざまに把手をぬぎて見たけれども、

楓樹の鍬を畦の中から引き上げることは出来なかつた。

するとヴォルガは改めて十人を遣した。

かくて護衛兵を皆つかはして了つた。

だが彼等の力は犁を外すことが出来なかつた。

土塊を掻き落して河柳の茂りに押し込むことも。

ところへ農夫が驚牡馬に跨つてやつて来て、
楓樹の鋏を片手で掴み、

犁から土塊を振り落して雲間へ投げ上げて云ふには、

『わが鋏よさうなら！私はもうお前を使つて土を耕すまゝ』

それから皆は彼等の良馬に乗つて、

名にし負ふクルツオウエツの町へやつて来た。

それからオリエコヅエツへ。

それから小さい町クレスチアノウエツへ。

そこでは民衆が大勢集つて大戦をしかけた。

その百姓達は馬鹿に猪い無頼漢だつた。

悪徒共は偽物の橋を拵へた。

だが若き英雄達はもつと利巧で、

先づ先登に彼等の大勢を樺木の上に追ひやつた。

するとその橋がめり／＼と破れて、

敵の軍はみんな小川へ落ち込んだ。

溺れやうとする者もあれば、哀れな有様なものもある。

その時ヴォルガと農夫は良馬を急ぎ立て、その小川ウォルコフを渡り切つた。

勇敢な寄せ手の勢はそこを跳び越えた。

そこで味方の者はこの百姓達に報ゆるに、

鞭を振つてびし／＼と殴りつけたのだ。

そう云ふ風に思ひのまゝに彼等をやつ／＼けたあとで、

今来た方へ引き揚げた。

その時から百姓共は降参して、正當な貢物を献ずるやうになつた。

例の農夫は先に立つて行く、

ヴォルガは彼を追ひ越さうと試みた、

そしてまつしぐらに乗りつけたが、

たゞ少かに農夫の姿が見ゆるばかりとなつた。

「揚げ首」の尻尾が遙かになびき、

彼女の鬘が微風にそよぎ、

ゆた／＼と歩らく風だが、

ヴォルガの馬は必死の勢で跳ぶけれども、

「揚げ首」はそろ／＼歩くのだが、

ヴォルガの馬は遙か後ろへ残されて了つたのだ。

ヴォルガは帽子を振つて叫んだ。

例の農夫がその聲を聞きつけたとき

彼は鶯の牡馬を止めた。

その間にヴォルガがかう云つた。

「止れ農夫よ！もしお前の馬が種馬ならば、俺は五百ルーブルで買はう」

「あなたは馬鹿ですね。ヴォルガ様、私がこの牡馬を母親から買ったのが五百ルーブルなんてす

よ。もし之れが種馬だつたらいくら出して買へますまい」

「お前の名は何と云ふのか、農夫よ。お前の先祖の名は？」

とヴォルガは尋ねた。

「ヴォルガ・ワセスラヴィツチ様！今だから申し上げますが、私は耕して黒麥を作り、それを禾堆

に束ねて積むのです。私はそれを家へ運んで搗くのです。それでビールを搾へて百姓たちにやる

のです。——すると百姓たちは私のことを村人の子、若キミクラ・セルイヤニノヴィツチと呼びま

す」

と農夫は答へた。

(註)ヴォルガ・ワセスラヴィツチはオレック太公のことで十世紀頃ルーリツクの役をついだ人物であることは或は前にも云つたやうと思ふが、この傳説俗話は明らかに『イゴール兵遠征物語』と年代記に於けるワセスラヴィツチの朦朧とした記憶を保存してゐると云ふことが出来る。「ネストル期」の年代記の中のオレク(或はオルク、又はヴォクトルグ又はヴォクトルガ)の歴史は史事であり乍ら、この傳説俗話と同じやうな程度に荒唐無稽である。このヴォルガの出生に關する不思議な物語は他國の神話にもある。例のインドラの出生に就ても同じやうな奇蹟的現象があつたと記憶する。神話時代に於て英雄が生れると必ずそれに附き物のやうに雷が鳴つて電光が閃めく。このヴォルガに就ても矢張りさうであつた。それはロシア傳説を見れば解る事である。その電の神と云ふのは龍である。神話時代の人々は雨雲中に龍を發見した。(雲の形がそれに似てゐる)その雷神は、雲の間に眠つてゐるが、そして、春が巡り來ままで人の目には見えない(季候の變り目)、春が來て彼自身の美しい光が出ると彼、(電光の閃めき)は龍となつて現はれる。ヴォルガの變裝(變體)は雨雲の形の變化に參照して考ふべきものかも知れない。

第二篇 記述文學と其時代

第一章 傳説文學時代の背景と文化草昧時代の文學と

キリスト教は十世紀の末葉に於て、ギリシャ皇帝の娘の手によつて洗禮を受けたヴラジミル第一世によつて、ロシア南部の文化中心地としてのキエフ市から漸次露西亞へ紹介された。當時コンスタンチノープルから殆んど無宗教の状態にあつたロシアへキリスト教を布教するために來てゐたギリシヤ・オルソドックス寺院派の僧侶があつた。彼等は選ばれて傳道に來た委員で、彼等がロシアへ入る前からロシア語に酷似してゐるスラヴ語に翻譯されてゐた聖書其他の宗教書類を、その時携へて來た。尤も、そこにスラヴ語と云ふものがなかつたならば、ロシア人は宗教上の智識を得るためには非常の不便を感じたかも知れなかつたので、この時、これ等の僧侶委員等によつて齎されたものが文學的にも宗教的にもロシア文化の開発に於ける第一の階段であつたと云ふことは、ロシア文明史を繙く人の直ちに會得出来る事實である。私は、この時代から次々に來るべき時代を追ふて漸進して行く原始的ロシア文學の發達を物語る前に、いさゝかロシアの語學に就て述べて置かねばならぬことがあると思ふ。この時代に於けるロシア言語學並にロシア文學の養育の功勞者として、今、私の頭に浮ぶのは

メソヂウス 聖メソヂウスと聖ミリルとである。彼等はマセドニアのサロニキに生れたギリシャ行政とシリル 官レオの子であつた。即この二人は兄弟であつて、兄メソヂウスのことは餘り多く知られてゐないが、彼は青年時代を軍隊で費し且つ一方行政にもたづさはつてゐた人であるが間もなくその榮職を棄て、オリンピア山中の一僧院に入つて僧侶となつた。弟のシリル（幼名コンスタンチン）は八二七年に生れて八六九年に死んだ人だ、幼年の頃ビザンチン王宮で教育され、兄と同じく職を棄て、聖ソフィア寺院に入つて讀書僧となつた。記録によれば、狐獨を愛するシリルはコンスタンチノールを去つたが、やがて知人等の切なる勸告に従つて再びこの町へ舞戻つて町の哲學講義吏となり、二十四才の頃には、小亞細亞に住するギリシヤ人が異端教マホメット宗門に歸依することを知り且つ之を防ぐための諸國巡遊福音宣傳者となつてキリスト教を傳道して歩いてゐたのである。同様に又クリミヤ半島のゴザール民族がユダヤ教に轉じて行くのを見て彼はそこにも布教の努力を示してゐた。彼の兄メソヂウスも亦弟の事業に大なる興味を感じて信仰と改宗の爲に自分の一切を忘れて弟と共に南方スラヴの地を駆け廻つたのであつたが、それは單に彼等の宗教運動に過ぎなくて、その中に私たちは何等文學上の功義を認むることは出来ないのである。が、ある日、と云ふその日は、ロシヤに對して不思議な運命を形造らねばならぬ日であつた。シリルはギリシヤの故郷サロニキの町に住むスラヴ人が一反キリスト教の洗禮を受けたる後に寺院の勤行、教文の意義に通ずることが出来ない

ため、再び異教へ轉宗すると云ふ事實を聞いて、そこには當然幾多の困難があつたに相違ない事業に着手したのであつた。それはキリスト教の教典をスラヴ語に翻譯することであつた。此處で一寸お断りして置きたいのは、今日そのためにスラヴ民族が活動してゐる汎スラヴ語宣傳は、當時に於ては汎獨逸語汎伊太利語宣傳がなかつたために容易に行はれ得べくして、而も大なる必要を感じてゐた。此意味からすれば、シリル兄弟の事業は、彼等が持ち合せてゐるマセドニア方語をモラヴィヤを第一番の順序として全部西方スラヴ語に變へて了ふ運動で、スラヴ人のためには、非常な民族的好意に結果したものと云ふことも出来るだらうと思ふ。兄弟の狙ひ所も一ツはその邊にあつた。また他方面からこの一大事業を観察すると、この宗教的又は、文學的民族語は毎度スラヴ人がその中間に立つて困つて來た争ひ、それはバルカン半島に住居するブルガリヤ人にさへビザンチン文明の優秀を奪はうとするローマとビザンチンとの文明國民の嫉視から生ずる争ひ、そのローマの人々と如何なる接觸に於てもスラヴ民族を強く誘惑する力のある餌であつた。シリルは兄メソヂウスの助力によつてスラヴ語化されたキリスト教典をビザンチン系のスラヴ人に與へた。計畫は順潮に運ばれて成功したと稱しても差し支へない程度までの効果を收め得た。私たちはこの時先づ第一にその新教典を應用したモラヴィヤ人に多少の躊躇を是認することはあつても、その躊躇は忽ちにして従前の教典をこの交替物と取り換へた勇氣をも認めなければなるまい。それと同時に、南北スラヴ人（例へばブルカリヤ人）も亦進

んで、この新しい福音を受用したのであつた。その理由の一つは、言語學的關係が最も彼等に近かつたからで、マセドニアの方語はブルガリヤ方語と相通する點が頗る廣い。たゞ彼等は、この新來語の中の妖術的繁鎖を棄て、取らなかつただけで、それは少數のスラヴ的語音の記號によつて増加した純ギリシヤ・アルファベットの醜惡さと、その修得に困難なことを知つたからで、要するに、スラヴ語の採適は易々として受け入れられスラヴ人はケルトやチェウトン民族が全く知らないところの新文字を獲得したのであつた。彼等スラヴ人はこの新製文字を使用してギリシヤ文學や自分達民族間に流傳する俗謠或はギリシヤ俗歌、百科全書、年代紀の翻譯をするまでに進歩して來た。八六一年頃にはキリスト教徒等の傳道によつて改宗させられたフィンランド人の間にまで、此文字は廣まつて居つたと云ふ事實もある位だつた。だが、この目醒しい運動は間もなく、ある外界の不利な事情の爲にはばつたり止つて了つた。が、かうした運動の最も盛んだつたのは、この兄弟が、モラヴィヤに住んでゐる頃で、モラヴィヤの王や王子達が國民間に於けるキリスト教の無理解——キリスト教の基礎的教義すら理解することの出来ない有様にあるのを見て、自分達の信仰は勿論として、文化普及の目的からビザンチン皇帝ミハイルにシレル兄弟の招携を乞ふたのであつた。かくしてシレル兄弟は、モラヴィヤへ派遣されてゐたわけではあつたが、モラヴィヤに於ける二人の文化宣傳の結果を恐れた獨逸の政僧等は狼狽の餘り、この土地に於ける彼等自身の勢力の消滅を防ぐためにこの二人の兄弟を捕へてロ

ーマ法王ニコラス第一世へ送つたのであつた。兄弟はローマに於て嚴重な訊問に處せられた。だが、この兄弟に、領土的野心のないことを知つてゐたローマ法王の後繼者であるアドリアン二世が秘かに許してやつた。いや、そののみならず、兄のメソヂウスを僧長として再びモラヴィヤへ送り歸した。かくてメソヂウスはモラヴィヤに十六年の長日月を送つたが、弟のシレルは、それまでの献身的苦闘のために病を得て、そのまゝローマで死んで了つた。

私は、この兄弟のことに就て可なり頁を費したやうに思ふが、かうした文化運動が、ロシヤに入り込んで來る時に、ロシヤの内地では、前に述べたヴラジミル第一世が、頻に宗教を基礎とした同様の宣傳に努めてゐたと云ふことは、學問の普及化に就て當時の遺跡に徴しても明らかな事實である。また、このヴラジミル第一世がキエフを中心として、いかに寺院に屬する宗教文化に資するための學校を建設し、且つ自分の子孫をも教育したかと云ふことは、この時代に發生したところの「新ボガツイル」を通じて知るまでもなく、古代年代記によつても認めることが出來ると思ふ。また、かうした文明の提唱は、ヴラジミル第一世の子第一世ヤロスラヴ(教名ユージ) (九七八—一〇五四)によつて繼ぎ守られた。ヤロスラヴ一個人としても、この「賢明王」(彼のこと)の娘が、一人はポーランド皇子へ、一人はフランス王へ、一人はハンガリー王へ、一人はノルヴェイ王へ嫁して行つた事實によつても見ることが出來る。と云ふのは、是等の國々は、宗教文化の發達から見てもその他の文明機關の完

備と云ふ點から考へても、いづれもロシアより遙かに秀れてゐたのである。「賢明王」の娘達は文化の輸出入の先觸れとして外國への道を開拓したものと云ふことが出来る。夫は、その後は等の國々へロシアの建築法、繪畫(いづれも宗教的のもの)が續々送り出され、引替へに後者の文物が頻りに持來されたと云ふ確實な證據もあることだし、一方地理上から見ても、彼等の便利を阻害するものがなかつた。かうして父の遺業を擴張して行つたヤロスラフ第一世は、讀書、筆寫の外にノヴォゴロドにある聖ソフイヤ寺院中にロシア最古の獨立せる圖書館を建てたり、ギリシヤの僧侶を招いてギリシヤ文物をスラヴ語に翻譯させたりした。聖シリル、メソヂウス兄弟の事業に對して、益々その機運を高めて來たわけである。十一世紀に於ける第一の文學的作物が現はるゝ迄には、以上のやうな課程があつた。しかし、それは、直接間接にロシアの上に感化を及ぼしてゐたビザンチン文明やギリシヤ文明、又はブルガリヤ文明の摸倣に過ぎない、或は翻譯に止つてゐたと云ふことは云ふまでもないことで、當時の民衆文化の程度に於てはこれも止むを得ない現象でなければならぬだらう。そこで十一世紀に於ける文字上の智識普及の主なる目的として考へられたことは、國民に與ふるに文字の心得ある僧侶を以てすることだつた。その結果として、ロシア人の中で、最も早く文字上の智識を受け取つたのは宗教家乃至宗教家の家庭に屬する人々であつたのは當然のこととて、そして彼等が狙ふところは即ち文學上の文化的仕事と云ふのは、筆寫、翻譯、淨書(聖典その他宗教上の書類を)に過ぎなかつたが、漸



Маршан, А. (マトビエーフ)

くここまで辿りついた時に、私たちは、ここにはじめて、ロシア最初の著述家を見出す機会に達する
ヒラリオンと ことが出来た。それは、その當時のキエフ大教正であつたヒラリオンとノヴォゴロド
ジチアータ の僧長ジチアータ・ルカの二人であつた。

「モーゼの與へたる法規とエス・キリストの慈愛と真理」との著者としてのヒラリオンは轍頭轍尾聖
ウラジミルの讚美者であつた。彼はその著書の中にウラジミルの讚美と祈禱の形式とを公表する上に
多くの理論の智識と口述上の才能を發揮してゐる。(この他の人に一〇五〇年頃の記稿が、遺されてる
が、これは、僧グレゴリがノヴォゴロドの知事オストロミールに書いて與へたものと云ふ説がある)、
ヒラリオンと同時代の人ジチアータは、ノヴォゴロド僧長管區の説教——それには神に對する彼等キ
リスト教徒の感謝が書き連ねてある——を以て有名であるばかりでなく、その説教が最も完全な會話
風のロシア語によつて綴られたと云ふので、ビザンチン風の修辭學から全くこれを以て解放されたロ
シア語の教文として最初の實例であると云ふことで私たちの記憶に残されてゐる人である。こゝまで
ネスト 來た私は、順序として、次に來るべきネストルの事を述べなければならぬであらう。傳説
ール によれば、ネストルは十一世紀末から十二世紀初頭にかけて生きてゐた人であるが、この人
に就てはこれまた餘り多く知られてゐないし、識るべき材料も少ないのである。だが、一〇七三年に
僧侶の生活に入つた彼の年齢が十七歳であつたと云ふところから考へると彼は二〇五六年頃に生れた

ものと見なければならぬ。その一〇九一年にはキエフ町附近のペチョラに残つてゐる聖テオドシアテオドシウスの遺跡を発見するために出掛け行つたらしい記録はあるが、そう云ふ紀行以外に「彼等の時代に起つた物語」の著者とこの彼は單に傳説上の人物であつて、例のギリシヤ人で云へば、僧院のイグメン、シルウエステルのやうなものではなかつたかと云ふ學者等の説も参考に止まるだけで、要するに議論は一つとして纏つたものがない。だが、ネストールに關する記稿として現今迄残つてゐるのは、十四世紀から十七世紀までのものと限られてゐて、ネストール研究家として有名なラッレンスキーやラヂゲイロヴスキー其他二三の人々があるに過ぎない、そして此人達の記録もあまり詳しくなかつたと私は記憶する。その發端的年代記は、ノアの子孫の遺産であつた國々の、カタローグから始まり、ずつと大古から認められてゐた地理的スケッチやスラヴ民族の歴史——即ちこの民族がドナウベ河畔の放浪生活から東北への移住、ロシアへの到着、新らしき國にける生活状態などに終つてゐる。この年代記は八六二年から一一一〇年頃までの事實の記録である。猶、この他にも、彼の動物の話や九一年の恐ろしき彗星の物語や、ギリシヤやローマの宗教的又は古代民族的の歴史譚や、例の聖シリル兄弟の話などもある。(丁度この當地に「バレイ」と云ふものがあつた。それは舊約全書の中から話を抄出し、それを僧侶の筆によつて短縮されたものに過ぎない)。で、かうして作られた年代記の性質を調べれば、それは年代記作者の位置、階級若しくは修養によつて(ネストールのやうな人

物もあるところを観れば)取り扱ふ事實の上に何等の批判もなく、或場合には甲事件と乙事件とを混交したり、ひどいのは偽造したり、想像に走り過ぎて正確な根據の上に立つて作らぬことを左程の缺點とも考へなかつたらしいのである。そして、作者が大多數は宗教生活者、一般に僧侶であつたから、その記録するところの年代記の中には、信仰本位の取捨にもとづく種々の誤謬が発見されることは無理のない話ではあるが、しかし私ども露西亞古典文學の研究者にとつては少なからぬ迷惑になる。先づ試みに年代記を繕いて見るならば、第一頁に現はれるのは、ロシアに於けるキリスト教の進歩の有様なのであると云ふ風に、先づロシア文明史としては當然のことかも知れないが、年代の順を追ふて事件の排列がしてある。而も、その年代を附する態度が非常に嚴格で、ある箇所はブランクのまゝの處もある位だ。その用語は、寺院でのみ専ら使つてゐたスラブ語と、ロシア語とである。(尤も「流轉年代録」は全部ロシア語で抒情詩風に書かれてゐる。そして一般人の會話に最も近いものだ。私たちはどちらかと云へば、この異本或は世話體年代記の方により多くの親みを持つてゐる。何故ならば、こつちの方に多く當時の所謂流通語が用ゐられてゐるからだ)で、かやうな風に當時の文人は僧侶に限られてゐたものであるから、その産物の性質が、世間的と云ふよりもずつと宗教の學問に片よつてゐたことは當然のことだと思ふ。であるから、十一世紀、十二世紀の宗教文學に於ける第一の試みも、僅に宗教的感化の印象をとどむるに過ぎなかつたので、それは宗教文學を創造したと云はれ

る「ウラジミル第二の説教」にも窺ふことの出来る事實であると思ふ。このウラジミル第二世は當時の人物中では、最も頭のいい、修養のある皇子だつた。ばかりでなく、彼は非常な愛國者であつた。

自分の兄弟等がガリシヤのロスチスラヴィチと争ふのに助力しなかつたと云ふことで、兄弟等の怨と復讐を恐れてゐたほどの、當時にあつては、極めて温良な君子であつた。そして彼はいつも自分の子達を戒めるために、自ら教訓を書いた。それはつまりこの「ウラジミル第二の説教」なので、大略すると、要するにキリスト教徒としての君主の徳を列べて見せたもので、一寸面白く思はれるのは、その教訓の實例に十三世紀頃の幾多皇子の生活を描寫してゐる。即ちこれ又宗教文學の一つとして數へることが出来る。是等宗教文學の作者が修道士に限られてゐたことは既に述べたやうに思ふ。この最初の文學上の一種の紀念的遺物は、時代の要求を最も端的に明指してゐた。即ち社會が持たなかつたところの諷刺、鞭撻の開示を悉く備へてゐたと云ふことも出来るであらう。無學な民衆、事實に於て異端者の生活を營んでゐた最大多数者は、人生の問題を明確に意識し且つその攻究の必要を認めるまでは進んでゐなかつたし、まだその資格はなかつた。即ち彼等はそう云ふことに適すべく啓發されるまでに到らない状態にあつた。それよりも寧ろ彼等は全くその當時の單純な勞苦の多い生存を、各方面から脅かされる危険から救ひ出すことに腐心してゐたのである。當面の問題はそこにあつた。彼等の周圍には絶えざる外敵が彼等を狙つてゐた。だから、早く云へば、休息の時にも餘暇の時間にも



Царь-Михайль (皇帝ミハイル)

彼等民衆の空想は、自分達の至つてお粗末な荒つぽい、少かばかりの動物的な慾望や慾求や要求をこれまで充たしてくれたところの或る一定制限世界を守るための肉體の力、筋肉の力、腕力の奇蹟流の活躍を露骨に示してゐる神話や傳説や史話の水準を突破して、その上に浮び出るだけの餘裕を持たなかつた。彼等はまだ、依然として精神人間であるよりも、腕力人間である方が生存の上に便利でもあり且つ安全であつたのだ。

即ち民衆は自分達を養つてくれる王や皇子や貴族や地主などと共に楽しい、夢のやうな生活をつづけることにのみ生活の意義を發見してゐた。この高貴の從屬者、その從屬者にも亦階級はあつたが、兎に角このドルジュニーの階級は生活の上の安定と便利を占めてゐて、一方最大多數の民衆の上に首導的立ち場を築いてゐたのである。彼等は王や皇子の手下であり、民衆に對しては一つの權力團體であつた。かくして、彼等は社會の計畫、事業の目論まらるる場合にはなくて叶はぬ階級となつて了つた。當時の外敵——未開人の侵略——に備へられてゐた兵士も亦この階級から組織されるやうになつたことは史實にもある通りだが、かやうなドルジュニー(附隨階級者)の、十二世紀の生活に於ける主なる記録は、これを文學的作物に俟つて見るには私たちのために「イゴール遠征の物語」があるこれは、當時の皇子達が所謂 *Petit Count* の最もいへ傾向の理想のために立つてゐる頃、ドルジュニーの中の一人のカリキ・ペレゴジイ(琵琶法師又は樂人)の手によつて作られた最も優れた「謠」である。

これは、處々韻律を備へてゐるが大體は散文なので、その當時の他の禁慾主義の文學や隱遁者風の作物に比べると頗る奇抜で且新しいものであつた。その主題から調子まで從來の作品とはずつと異つた色彩と感情の中に作られたものであつた。勿論カリキ・ペレゴジイの中の誰が作つたのか不明ない。だが、此單一な渾然とした物語謠がそれまで存在してゐた他の神話や傳説と同じやうに言葉の上にある限りの技巧を弄び、更に、遠い遠い太古の神話迄も參考したものと見えて、その神話の中に於てすら殆んど人間から忘れられてゐるやうな名前を取つて物語の中に織り込んであつたために、當時の人々の力の程度では、なかなか解り難いものらしかつた。最初この物語歌謠は十八世紀末(一八〇〇年)に古代研究家で同時に文學者であつたムスキン・ブーシユキンと云ふロシアの伯爵によつて發見されたもので、その後北方ロシア人に模倣されて續々として類似の物語が作られた位の傑作であつたが、不幸にして物語の原形はモスクワの大火の際に神話蒐集家の家と共に焼け失せて了つたと云ふことであるので、この詩謠が、その當時あまり讀まれなかつたと云ふ理由が、その解釋に骨の折れる爲かと云ふことを私は一寸先刻云つたが、別にシャクノウスキの説を參照すれば、實はこの物語りの内容に、異教徒の信仰が盛られてゐたために詩謠としては優れたものには相違ないけれども、何分、その時代のこととて、キリスト教に反する記述文學としては大びらに流布することを憚つたものと云ふのである。それは兎に角、ムスキン・ブーシユキン伯爵の手で發見された時、ロシアの智識階級は、これ

こそスラヴ詩人のギリシヤ風の歌謠であるとなして、非常な歡迎を與へたものであつた。そして、北方ロシア文學の功績は他に色々あるだらうが、かうしたキエフ文學の古代作品を完全に保つて行くこと云ふこともその中の一つに數へねばならぬと云ふ次第であつた。それほどの傑作「イゴル兵の征遠物語」は實に十二世紀文學のすべてを蔽ひ盡すことの出来る巨作であつたに相違ないであらう。で、今その物語の筋を單簡に述べれば、相互に敵視してゐたウラジミル二世の二家族の、オルゴウイツチとモノマホウイツチとの權力争ひなので、一七六年にフセヴォロド・ユリエウイツチ(ウラジミル二世の「イゴル」遠長子)が太公になつた。その時中央政府がモスクワの町の附近にあるウラジミールに移征物語」された。丁度その時に又、オールゴウイツチの長子スヴィヤトスラヴ・フセヴォロドグイッチがキエフ町の太公を稱した。フセヴォロド即位後の初年間は、後者との争ひに費やされた。二人の皇子リウリツクとダウイドがこのモノマホウイツチから放れて中立した。一方では、イゴルとフセヴォロド(二人ともスヴィヤトスラヴの子)が立つたところがこの五十年來ロシアを頻りに狙つてゐた統治者のポーロウイツを、前者が征服して勇名を馳せた。しかし、オールゴウイツチはこれまでしばしばポーロウイツを助けることによつて自分の利益をはかつてゐたのであつたが、そうした關係から評明がよくなかつた。かくて一一八一年、フセヴォロドは、これまで太公に反對してスヴィヤトスラヴに備はれてゐたポーロウイツの階級中にも有名になつた。イゴル自身は是等ポーロウイツの首領

として働いたものであるが、モノマホイチとリウリック・ロスチスラヴィチーのためにキエフ附近で散々に敗られて了つたのである。かくて、ポーロツイにこれまで面してゐたモノマホイチの後胤により以上の親和を以て繼嗣してゐた人民の目には、ポーロツイがオールゴヴィチーの上に汚點を與へた者と見立たわけてである。一一八一年、南方のロシヤ皇子達はポーロツイと敵對するやうになつた。この遠征中にイゴルとノヴォゴロドの皇子セヴェルスキと彼れの兄弟ウセヴォロド（ツルグツクの）は共にたづさはることを拒つたけれども戦は勝ちだつた。一一八五年に、イゴルとフセヴォロドは、ポーロツイ征伐に向つた。その時、彼の子ブチヴルの王子ヴラジミルも加つた。同時にまたクルスクのスイヤトスラヅも加つた。「年代記」によれば、ドン河に近づく頃、彼等遠征隊は、太陽が月のやうに暗くなるのを見て、之れは何かの凶兆だと云つた。が、イゴルは頓着しなかつた。そしてドン河を渡つた。オスコルクにて彼は、クルスクからはる／＼援勢に來る兄弟フセヴォロドを二日ばかり待ち合せて出發した。かくて開かれたポーロツイとの戦の第一回には見事な勝利を得たが、第二回目には、見る影もなく破られて彼を始め皇子達は捕虜にされて了つた。イゴルの後悔は非常なものであつた。囚はれの彼の前に、ある日突然ラヅオルと云ふボロツイが現はれて救つてやるからこつそり逃げろと云つた。イゴルは、そんなことをしては後の恥になるから嫌だと云つて斷つた。だが、再三勤められて到頭牢屋を破つて逃げたのである。その時には、既にこの種族の統治者の



モサツク兵士の和議　レベソフ作　—露土戦争参照—

娘と結婚してゐた皇子のヴラジミルと兄弟のウセヴオロドを連れて首尾よく無事て來たと云ふのが、この長物語の大體の筋なのであるが、作者は、ロシア史から見れば、左程重大でなかつたこの事實を材料に取り扱つて、自分の愛國心を披瀝し、自分の考へた當時の狀態に對する興味を鋭い血色文字で盛つてゐるのである。今、その物語りを歴史的に觀ることを止めて、作者の描く處に従へば、先づ、概略の山とも云ふべき處は、野心の強い若い皇子達が草原の土賊に向つて征伐に出やうと云ふ冒險心を起す件りから、最初は旨く行つたが、そのうちに兄弟達が連絡を斷たれて、イゴルが虜にされる、しかし、苦心の末に逃げのびて戻ると云ふことなのであるが、その中に、太公が前非を誨ひ始め、子のことと思ひ悩み、イゴルの妻は妻で、泣き悲み、その聲が風に送られて草原を越えてプチゾルの陣から聞えて來る。すると彼女はドン河をまるで木啄のやうに飛び下つた。その時カヤラ河の流で、海鼠の皮で作つた着物の裾を濡して、それで以て、皇子の疵あとを洗つてやる。彼はドニール河の波に彼女の夫を連れて來いと云ふ。彼女は、イゴルが殺された後のロシアの悲しみを考へてゐた。そこへ、首尾よく戻つて來るので、「しかし今、國土は歡び、境は樂しみ、先づ年老へる公子たちに、次に若き皇子へ、歌は吹き向けられたり」と云ふことで終つてゐるのである。――

以上述べたやうにロシア人の智識と才能とは最高の精神的文明に向つて着々と歩を進められて來たが、それは、單にビザンチン文學を手本としての模倣に過ぎなかつた。つまり、ビザンチン風の修辭

學と他の文字上の産物をモデルとしたものばかりであつた。

これまでの話によつて、私はロシアに於ける文化を培植し養育する「土」はまことに順調にその使命を果して來たことを告げねばならぬ。文字の智識——第一階段にあつた文化——は凡ての上流社會を風靡した。ここにも一つつけ足さねばならぬと思ふのは、當時の作家の一人として數へても恥し
ダニ くない「ソロモンの寓話」「エスの智慧」「シラクの子」などの著者である「囚人ダニエル」の
エル ことである。ダニエルが、右の作物を敢て物したのは彼の保護者であつたベレヤスラフ公の憤
怒を和らげるためであつたと云ふことだがどう云ふ譯であるか結局、彼はベレヤスラフ公のために、
ラツへ湖へ沈められて死んだと云ふ記録が残つてゐる位ひでその他に彼を知る材料は殆んどない事を
私は遺憾に思ふ。この他にも當時の古代ロシア文明の裏面にさまざまの文献的努力を盡した人は幾人
もあつたが、さうした人々によつて築かれた文化は、やがて韃靼人の侵入によつて、悉くとまで行か
ずとも、殆んどあらかた亡ぼされなければならぬ運命を持つてゐたのである。十八世紀前のロシアの
「土」の中に、是等啓蒙の根を残して置いたのは、たゞ少かに寺院だけであつた。ロシア全土を征服し
た韃靼の遊牧民族がロシアに發見した個定文化生活の幅畫に引きつけられ、半野蠻人の迷信的空想が、
堂々たる建築の寺院の群像の中に古代ロシアの宗教文化の其幅畫に驚嘆し且つ魂を奪はれた事の結果
として、それに對する彼等の未知物に對する恐怖心はやがて、僧侶に與へるべき一つの特權となつて

現はれた。韃靼人は寺院の僧侶に對して貢ぐ必要のないことを布告した。寺院に免税の資格を與へて
彼等及び寺院を利用しやうと考へたのであつた。生命財産の保證を得た僧侶たちは、その城壁（當時
の寺院は、丁度日本の封建時代の大名の居城のやうに廣大な土地即ち寺領を抱へ乍らそこに素張らし
い殿堂を建ててゐた）の中に隠れて専心年代記を書くことに耽るばかりでなく、十一、十二、十三世
紀の外來の種々の書籍の翻譯に没頭し、國民の宗教精神を廣め道德思想を養ふことに努めたものであ
つた。彼等が云ふが如くは、僧侶等は、韃靼の侵入は、國民が、異教を信仰するに生ずる天帝の懲罰
であつた。有名な僧セラピオンはこの追ひ詰められた寺僧の中にゐたのである。彼はウラジミルの僧
正であつた。この恐ろしき時代に著述された彼の説教が、今日セラピオンの教文として残つてゐるの
である。年代記によれば、彼は稀に見る博識の僧侶であつた。一二七四年彼はキエフ、ベチエルスキ
の教僧長からウラジミルの僧正に昇進し、一二七五年に死んだ。彼も亦、教文の中に、韃靼の侵入
と暴行を國民の不信仰によるものと説いてゐるさうである。かやうな具合に、韃靼の厄に關する事蹟
「ザドンシ」 は時代の人々の心を掻き亂し悩ました。そして是等の人々は、讀む人のために作られた
「ユチーナ」 印象そのものための祈願風のものだと云はれた全部の物語の中にその説明を見出した
のであつた。その著しいものが、ママイ・ザドンシチナ（一二八〇年間のドミトリー・ドンスコイの韃
靼征服、ドン河地方からやつて來たもの）の虐殺物語であらうと思ふ。その内容に多少の誇張がある

としても、是等の作物は韃靼に對する無限の憎惡とその韃靼の犠牲になつてゐたロシア人に對する同胞の感情のあらはれとして私たちは興味深く見ることが出来る。またこの「ザドンシチーナ」がたとへ「イゴル兵遠征物」の摸倣であるとしても、一三八〇年クリコヴォの役に關する唯一の記録と云ふ點から見れば勿論存在の價値を認められなければならないものだと思はれてゐる。

さてこの十四世紀の作物の擬經典的物語或は、古典文學の一部として十六世紀頃まで傳へられて來た宗教的内容の私生物——即ちあの一つの公認事實を取扱つた物語に對して生れたもの——の作目を擧ぐれば、例へば、「セツトの祀り」「エノツク」「アダムスの指揮」「十二僧の命令書」其他がある。是等はひとしくこの十四世紀末葉の古代文學の閉鎖期を形作る要素の一つとはなつた。顧り見ればそれはまことに個性に乏しい生活と、個人の權利に對しても社會一般の意向輿論に對しても、彼等の統治者からは何の尊敬も拂はれなかつた興味のない時代であつた。一方に於ては、これ以上の發展には好しくない種々の境遇に四面を取り圍まれてゐた。例へば、そのこれ以上の發展と云ふのは、敵意あり嫉妬心の強い近隣や西部ヨーロッパに一反押しつけられた文化であつて、ロシアはロシア自身の工夫による文化によつて暫く我慢しなければならぬやうな行き詰りの形となつて來た。だから、ややともすれば、不感、沈滞に傾かうとする一部社會には、當然の現象として此處に新しい「疾病」が生れて來なければ濟まない譯である。その「疾病」とは何であるか？と云へば、あらゆるロシア文明

の價値とその重きをなしてゐる事實は、不可論のことであつて、それは何人も確かに信じて、疑はないことだ。即ち現在のロシア文化はこれ以上の補足と修正の必要を認めない。これ澤山だ。と云ふやうなロシア人自身の目や心に映る幻影或は幻想である。そうした信念を持つて外國のいかなる嶄新な文物から受くる牽引、變化がどれほど自分達にとつて利益があらうと、これを恐れ、且つそれがために自分達の幸福が増進されるとはどうしても信じなかつた。そう云ふ「疾病」なのである。ところが、ロシアのためにはこんな不幸な事態は決して長く續くことを許さなかつたものが、現はれた。それは所謂「文藝復興」として知られてゐる十五世紀から十六世紀にかけての西部ヨーロッパを導いて行つたやや漸進的ではあるが、而もその範圍の廣大な運動から受けた遠い遠い餘波であつたのだ。それはまことに偶然に湧き上つた波紋であらねばならぬ。だが、それは、この行き詰りの時代に於て、ロシア自身が來るべき十六世紀の文學壇の花形と社會上の活躍家との最も優秀な人物を得やうとする無意識マキ識の運命だと云ふことも出来る。その花形役者として突如擡頭したものにマキシムと云ふシム。アトスのギリシャ僧侶があつた。彼はそのはじめ、ウシリー・イヴノヴィツチ（一四七九—一五三三）太公が自分の圖書館に藏されてゐるギリシャ古文書の總目錄を作るために（一五一八年）招かれて來たものであつて、私は今この僧侶に就いていさゝかの記述を試みやうと思ふ。彼は青年時代を多く北部伊太利に費した。と云ふ一つの原因は、十五世紀のギリシャが全然トルコ人の暴虐から安全

を求めやうと藻掻く状態にあつて、従つてそのトルコ人から最も迫害された學者僧侶の類はこぞつて伊太利北部の地へ隱遁所を見出したから勿論、^彼その中の一人であつた。伊太利に於て彼が教養の面倒を見てくれたのは、伊太利宗教史を讀む人が、必ずやその勇敢と精力とに驚かされるであらうところの例の有名な社會革新者サヴォナローラであつた。僧マキシムはサヴォナローラの感化を受けた。その後伊太利からギリシヤへ戻りアトスで僧籍に入つた彼がかくモスクワに來た彼は暫く宗教書類の校正係を勤めてゐたが、それに満足しなかつた彼は當時ロシアの寺院に行はれてゐた虚偽的宗教教育に向つて正面から攻撃を始めた。そして一四七九年バミル・ヨハノヴィツ朝の文化混沌と一五三〇年から一五八四年までつづいたイヴァン第四初期の社會秩序の錯亂に出會つて、猶太教化しつゝあつた社會に對してロシア語で書かれた百餘種の攻撃論文とギリシヤ・オルソドックスの罵倒とは、彼を憎み嫌ふ反對者及び爲政者に絶好の機會を與へたものであつた。イヴァン第四世は彼をトロイツェルギウスキー修道院へ幽閉してつた。かくて、忽然として現はた慧星的人物はまた人知れずこの修道院で死んだのである。この時までには、僧マキシムに刺激されたイヴァン第四世の社會は一つの目醒め「ドモス」を感じた。その結果と云ふべきは、社會學的にも文學的にも、この時代を代表する「ドモロイ」ストロイ(Oikoumenos)を生むに至つたのだと稱しても差し支へないだらうと私は考へる。「ドモストロイ」はイヴァン策四世の道德顧問僧正シルヴェステルのために編まれた家政學、社會學、

修養等を含めた一大經濟學の六十三章に渡る論文であつた。後世の歴史家のためには十六世紀に於ける露亞西の社會状態を知るべき、唯一の書物であらうと思ふ。てこれは餘談に渡るかも知れないが、デンマルクから型字の職工や印刷業に關する職人を招いて、僧イヴァン・フョドロヴィツと僧ビヨトル・チモフイエフとがその助手のやうな形でロシア文字の本が少かばかり印刷されたのはこの時であつた。歴史の上に現はれた所の、「聖シリル寺院のカズマへ與へた書簡が唯一の著述である。イヴァン第四世はまことに當時としては傑物に相違ない、がそのイヴァン第四世が十六世紀の時代人であると同じ意味に於て私は次に述べ様とするアンドルウ・ミハイロヴィツ・クルプスキーも時代人であつた。たと云はねばならぬと思ふ。この時代の特徴ある記念物としてその内容に渾然性を持つてゐるものはイヴァン第四世とクルプスキーとが往復した書信であらうと思ふ。由來二ツの相反せる主義(宗教上の)の争闘がこの國の社會状態を明らかに寫したものと見るならば、今云つた私の言葉は決して空言に終るものではないだらうと思ふ。イヴァン第四世が大した學者でなかつたやうにクルプスキーもさうであつた。彼はクルプスキーへ二通の長々しき書簡を送つてゐる。書簡とは云ひ條、裕に一冊の本を作るだけの分量のものが只書簡の形式になつてゐるだけである。クルプスキーの方は前後に渡つて四通の書信を返してゐる。これも同様に大部のものらしかつた。それは一五八三年から一五七九年頃までのものに限られてゐるが、後に彼はイヴァン第四世に背いてポーランドへ逃亡し

た。太公クルプスキがリヴォニアの戦に破れて、イヴァン第四世の怒りを恐れて一五六四年にロシアニアへ入つたのがつまりそれで、イヴァン第四世は彼に歸服をすすめたが、彼はイヴァンに楯ついで戻ることをしなかつた。その時、クルプスキの書信を携へて來た使者を捕へた皇帝はその手紙を讀んだ後で、使者の足首を床の上に釘づけにしたと云ふ史實があることを人々は知るであらう。皮肉と諷刺、(尤も露西亞文學の目的と云ふのは、當時その邊にあつたらしい)を盛つた手紙はクルプスキへ送られた。有名な手紙の一部がつまりそれである。クルプスキがモスクワ附近のある有力なる行政官に與へた手紙による彼は、この恐怖王に楯衝さかねないほど自我の強い人物であつた。クルプスキの手紙の内容は一口に云ふこと、イヴァン第四世の権力の誤用を非難し、且つ彼の周圍に善良な補佐者がゐない限りは彼の統治は無茶苦茶だと云ふ惡口なのである。このクルプスキにして始めてこの皇帝は面目を發揮した。それは「イヴァン恐怖王傳」がクルプスキによつて書かれたからで、クルプスキの眼目は、この恐怖王の性格の中にある心機を開明するにあつたらしいが、ロシア人がロシアの功利主義的歴史の著述に手を染めたのはこれが最初だらうと思ふ。

で、私はロシア文學が近代に入る前に先づ此十四世紀頃につたロシア南部の新文化と十七世紀に於ける教育、最後にキエフからモスクワへやつて來た學者達によつて紹介された新らしき文學上の主



Иванъ, IV. (イヴァン第四世)

義主張に就て一通りお話をしなければなるまいと思ふ、丁度その頃モスクワにゐた少數の教育者が、ロシアに於ける文化事業の不備によつて生ずる不道徳や政治の空隙や經濟上の不振を嘆じてゐた時にロシア西南部に突然文化の火花が散り始めた。中心地は古都キエフであつた。が、その文化運動は非常な普遍性を以て未開の東北部へ向つて流れて來たものであつたが十七世紀初頭に近づくにつれて性質は漸變した。キエフ文化は一般民衆を離れて單に貴族及び富豪階級の所有物となりこの二者の智識及び徳育の標準を高めることにのみ役立つものと變つて了つたのである。で、この限定された教育と云ふのは、ギリシヤ・スラヴ・ロシア・ラテン・或はポーランドの各言語の修辭學、詩、論理學其他の形而上學の研究であつた。この研究が廣められると同時に學生を收容する學校が各地(ルヴOFF・ツイルナ・キエフ・ミンスク等)に盛んに建てられたのである。そうして例のグツテベルヒの印刷機械發明はこの運動に急足の進歩を捉さずにゐなかつた。かくしてキエフは西南部ロシアの發育中心地となりそこに集る學者達はロシア古代文學の根底を築いて了つた、だが、いづれの時代に於てもさうであつたやうに、この花々しく且つ多忙な時代に於てもやはり無學と無智に馴れた民衆は決して昔の氣儘な生活を忘れることが出来なかつた。民衆はイヴン恐怖王統治下の有識階級特に貴族の慘敗を知つてゐた。そして今、また同じやうにポイヤル(貴族)が新らしく生れたロマノフ朝の下にあつて不可抗の權力を奮ふのを見てゐた、その結果として、たとへそれが「善」であらうと「惡」であらうと、す

すべての命令、すべての宣傳、すべての運動はみな上流社會、ことにその中心をなしてゐる皇帝によつて始められ發布せられて始められてここに效力があり成功があるのだ、それが段々と下々の社會へも惠まれて來る、それが眞正の運動だと云ふ信念を抱くやうになつた。そう云ふ考へはモスクワやキエフ以外の大多數の民衆の頭にこびりついてゐた。だから彼等の間に食ひ込んで行くには當時の學問はあまり無力に過ぎた。従つてその學問は依然としてモスクワやキエフの間門を出なかつた云つていい。ことに、さうした學問を一部の都會に封じて了つたのは民衆に憧憬され彼等の心によつて漸次擴張されて行つた傳説の愛好であつた。昔を愛し傳説を尊ぶ彼等の精神生活には、何の改革も革新も必要でないばかりか、それは一つの恐怖として見られたのである。この極端の無識は宗教の問題に對して殊にこの馬鹿々々しい傾向を形成したものである。寧ろこんな浮薄な、どちらかと云へば當時のロシア人に取つては贅澤極まる形而上學の研究よりも、より痛切にその必要を感じられたのは物質の上の向上でなければならぬことを彼等は自覺してゐた、その結果（一五九六から一六四五のミハイル皇帝時代）には民衆の願望は容れられて職工、製造業社、工手人などが隣接する國から呼ばれた。即ちかうした部門の智識の必要はロシア人をして科學に秀れた外國人を國內に入れしめたものと見るべきであらう、ところが又一方に於てはかう云ふ運動が起りかけた。それは西部ヨーロッパの火急の接觸によつて目醒しい進歩がロシア人の社會の中心に始まつた、だが、我々はどこまでも露西亞人なのだから、

我々が持つてゐる個性、特徴はどこまでも他國人のそれと差別をつけて保存をしなければならぬ、も一ツはギリシヤ人が昔持つて來た宗教々典或は教義はやはりその純潔を保たなければならぬ。と云ふのである。その保守的運動は、一六三三年に到つて僧バトリアク・フライレーの學校建設（彼は「奇蹟の寺」に屬する専門學校を建てて、「チユドウスキ」と稱した）に始まつて、南方スラヴ族出身やギリシヤ僧侶のロシア入國となり、汎スラヴ國建設運動や、スラヴ語の宣傳やスラヴ歴史の編纂、ロシア地理の出版となつて事實に於て現はれた。その活動圈内にあつたスラヴ族オストリア土人のカトリック僧クリジ リック僧イユリイ・クリジヤニツチ（一六五九年）などは、その目的がスラヴ語の筆讀を助アニツチ 成するためばかりでなく、獨逸の露西亞に於ける野望を罵るためにも彼等スラヴ人種を欺く他國人の虚偽陰謀を曝露するためにも文法書、辭典以外に種々の小著述を企てたのだと云ふのである。だが、物質主義——つまり言語學宗教學を迂遠の修養とする一派即ち民衆は勝つた。彼等は間もなく、功利主義一點張りの皇帝を迎へねばならなかつた。それは歴史的人物ピョートル第一世の出現であつた。ピョートル第一世の十七世紀末に於ける所謂文化改革の嫌厭は甚だしいものであつたと云はねばならぬ。その一つの實例として私はイオアキム僧長がピョートル大帝に献策して文化輸入者の外國人を一人のこらず國外へ追出して了まつたと云ふことを挙げやう。だが、十八世紀の前半期を蔽ひ盡すところの文學に資した此時代のことに就ては、是非とも私の述べなければならぬものであらう。民衆は澄徹

せる人格と實際的頭腦の持主であるし且つボガツイリそれ自身であるピョートル第一世の下にあつて、彼が功利主義的以上の見地から考へるとの出来ない文學及び教育を興へられて、そしてこの偉大なるロシア文明改革者が種々の物質學の研究機關を設立するに拘はらず一向これまでのスラヴ・ラテンの文學、教育専門の學校教育の擴張を計らなかつたと云ふことに對して、いさゝかの不平を示さないと云ふことは、寧ろ當然のこととして誰もが考へて差し支へないことだらうと思ふ。彼等は從來の翻譯文の羈絆から一步を出ることを敢てしなかつた。學校は實利上の語學専門に限られた。かうした境遇の中から事態を顧みて嘆聲を放つ者も少なくなかつたが、其中で眞實に心から叫び出した者として私ボソシユ たちの記憶に甦つて來るのは、何人よりも先づ「貧富論」の著者ボソシユコフ(イワン・コフ チホノウイツチ)が最初でなければならぬだらうと思ふ。ボソシユコフは一六七〇年に生まれた純粹の農夫文人であつた。彼が著述に於ける出發點は、當時の社會生活の缺點を衡いて政府の注意を惹くことにあつた。丁度ピョートル第一世が社會事業の工程を處理し始めた時に彼の統治の策の一つとしての社會改革上種々の新事業新計畫に盛んに投資した。同時にそれまで沈黙を守つて居た輿論が沸然として湧き上つた。是等の計畫者、或は企業商人の中にあつて一人異彩を放つてゐたのがボソシユコフである。彼は彼が見聞する社會の事實に就て彼の理想に相反するものを指して大膽に叫び出したのである。彼はそれを熱烈な愛國的感激を以て叫んだのである。モルヴィア人と云つて隣國の



Петръ Великій (ピョートル大帝)

人々から嘲笑されたりお笑ひ草になつてゐることが、彼の血を一層燃やした。彼は當時の行政に衝突して寧ろトルコの正義人道と社會の秩序の方がまじだと叫んで罪せられたのであるが、實際彼は自身に保守的の性質があるに拘はらず、彼等に學ぶことを厭はなかつた。そこへビョートル第一世の火のやうな感情は最後にボンシユコーフの熱心に報ゆるに死刑を以てした。そして捕はれてベテルスブルグのビョートル・ポロの城牢へ投げ込まれた。かくて、彼は、ビョートル等一世の死に後るゝこといづくもなくしてそこで牢死した。それは一七二六年のことであつたと思ふ。ボンシユコーフは要するに、彼自身がたとひモルダウイヤ民族の中からより以上理解のある人々を見出すことが出来ても、ロシアの農民は、より以上有利な境遇にあつても、自分自身の力によつて一體何が出来ると云ふことを具體的に示した見本だつたと云ふことに歸するものではなからうかと思ふ。時に又彼と時代を同うして

ブニコボ　ゐたビョートル大帝の顧問の一人にノツオゴロドの大僧正(一六八一年生)テオフアン・ブ
ウイッチ　コボウイッチと云ふ人物があつたことを私は思ひ出すのである。それと共に彼の作「ヅラ
ジミール」と云ふ悲喜劇(それは彼がローマ在學時代にセント・アタナシウス學校の舞臺で一度上演
したことのある)を思ひ出すのである。一七一六年にブニコボウイッチはベテルスブルグへ呼ばれた。
ブテルスブルグに於ける彼の文化事業は、これまで僧侶と軌を同じくして説教から始まる。しかし、
前者等と異なるところは、宗教學に基礎を置く所謂僧侶文士でなくて平の修道者の文人としてロシア

古典文學史上に、素張らしい位置を作つたのだと云ふ方が適してゐるだらうと思ふ、即ち、私が彼を指してロシアを通じてこの改造期を通じて最初の修道者文人と云ふ理由の主なるものは、彼が僧籍の人物であるに拘はらず、その廣汎なる智識と、全生涯を社會改造に委ねた熱情とを以て、一方に於て彼の著作の上に自分自身をロシア古代精神云ひかゆれば、傳説若しくは神話文學の傳統から切り離して了つたからである。以上少しばかり述べたやうにビョートル第一世が科學は無論文學までも彼の功利主義から眺め且つ獎勵した結果として、社會の先覺者、文學者の中にも、科學と文藝との區別を立つる上にいさゝかの正當な考察をも持ち合せなかつた人々がその大部分を占めてゐたことは當然のこと、云はねばならぬであらう。勿論それは大抵の國にも一度は嘗てさう云ふ時代があつたやうに、學者その他の知識階級者は文學を遊戯の一つと見做してゐた。仕事の合ひ間合ひ間の暇つなぎの道具と心得てゐた。この時代の文學的産物の情況が、科學は文學の目的物に近く、文學は科學への道程と云ふ風に見えるのは、これを史實に基いて、エリザベタ・ペトロヴナと云ふやうな女帝時代のいかなる文人もカンテミールから下つて天才ロモノソフに到るまでは、文人は教師であり、文學は餘技であつたことが實證してゐる。要するに文學は獨立するまでの性質に缺けてゐた。今話をしたテオファン・プロコポウィッチがその一例ではあるまいか。彼が文學上の著作（彼には數十篇の詩がある）に費した時間は先刻云つたやうに教師の暇潰しに過ぎなかつたのである。だがプロコポウィッチに就て大

體の話をした私は、次第に獨立文學の時期に近づかねばならない。その前に私は當時の巨匠カンテミール及びロモノソフの一時代を経なければならぬ。そして、進み行くまゝに、その時代及人物の狀態と思想とを巨細に紹介したいと考へてゐるので、それまでの話は、これへ行き着くまでの序詞であつた。そのために、私は、ことさらに説き盡さねばならぬいろいろの事柄を一切控へて來たことを改めて此處で告白して置きたいのである。そして、改めて機會を俟つた上で、以上に就てもまた後に來るところの數人の文學者に就ても稿を新たに説くことを願つてゐる。さてこの文學の方面で純文學者でない片手間の文人ばかりが、以上の匿名期（或は無名期）と匿名（或は無名）式の流布に依て原稿のまゝで残されたり傳へられたりしたかと云ふと、さうではなかつた。職業文士（或る程度まで）さへ最初は同じ趣味の人々の間に於ける極く極く狭い評判とか名聲とか、そうした小さい勝利に満足してゐた。でなければ別に個人の事情で出版することを控へてゐたのであつて、そこに自然現はれて來たのが、二つの傾向であつた。一つは、ビョートル第一世の精神を守つて獨逸の智識上の活動をつゞけて行く（タチシエーフのやうに）と云ふ傾向と、今一つは、佛蘭西の優佳な文學を摸倣することのこの二つであつた。それはカンテミールによつて代表され、つゞいてトレジャコフスキーやスマローコフとカンテ 云ふやうな當代の首導的文學者によつて受け繼がれて來たのである。そのカンテミールもタミール チシチエーフも孤獨にその主義を守つて來た。先づ私はカンテミール（アンチオク・ドミトリ

エヴァイツ公のこと)に就いて多少の記述を試みやうと思ふ。カンテミールは一七〇八年に、モルダヴィアに生れに貴族であつた。彼の父ドリ・カンテミールは即ちモルダヴィアの貴族の後胤であつた。一七一年ブルート河上の悲惨な遠征が行はれた後に、彼は四千幾百の同胞と彼の家族とを率ゐてロシヤへ移住したのである。その時カンテミールは少かに三歳の小兒だつた。やがて彼の父はピョートル第一世の顧問に用ゐられてペテルスブルグに住居した。カンテミールの家庭教育はこの町のギムナジウムで始められた。両親の感化を比べるならば、母親の方が強かつた。カンテミールの母親はもとギリシヤ人で、驚くべき教育のあるなか／＼^不精巧な婦人だつたと云ふことで、それはカンテミール自身の手になる自叙傳を見れば詳細に知ることが出来る。彼女の美しい性質は同性のすべてから尊敬された。だが、それは彼女の持ち物としては一番貧弱なるものだつた。」と云はれる位の彼女は、アナスタシウス・コントイデスと云ふギリシヤ人の僧侶の力を借りて自ら彼女の子を養つた。彼はラテン語とイタリア語を學んだ。そして十才になる時にモスクワ大學で、ピョートル第一世の面前で、ギリシヤ語の聖デメトリウスの頌徳歌を完全に暗誦し得るほど語學の才能に秀でてゐたと云ふことである。このカンテミールの最初の仕事と云ふのは、ピョートル第一世に導かれる翻譯に従ふこととその後ロシヤ人の一教師が皇帝に代つて彼を教導した。この教師と云ふのは、カンテミールの記録によれば、イヴン・イリンスキーと云ふ名前で、何でも、詩形學に通じてゐたためにカンテミールに後詩の獎勵

をしたと云ふ話であるが、カンテミールが作詩に興味を持つた理由の一つと見ることも出来るだらう。十七歳の時に、他の貴族の子弟が踏んで行く道——ブレオブラゼンスキー護衛兵隊に入つた。彼がテオフアン・ブロボウイツチと相知つたのは丁度その頃のことであるらしい。かくて、一七三一年にロンドンへ行つた。その少し前にアンナ・ヨハノヴナが帝位に即いたのである。今カンテミールの文學上の作品を擧ぐるならば、彼がロンドンへ出掛る迄に書いてゐた五種の諷刺文がある。その一部は童話で他は詩である。ロンドンへ派遣される前から彼の文學上の名聲は貴族間に聞えてゐたらしい。カンテミールが得意だつたのは詩よりも諷刺であつた。諷刺文を書いたのは、一つは彼が愛讀してゐたホレイシオやボワロウあたりの感化があつたため、一つは、社會的にも文學的にもこんな過渡期に出會つたためであらうと思ふ。ロンドン以後のものに「學問の敵」と云ふ作物がある。これも諷刺だ。それは大體を云ふと、この時代のロシヤ人が、いかにも科學及藝術的の職業に役に立たなかつたことを書いたものである。この外に猶「私のミユズヘ」とか「諷刺文を書くことの危険」などがある。それはつまるところカンテミール自身の諷刺觀とも云ふべき内容のものだ。以上の外にまだ私の調べの届かぬ作品があるかも知れないが、これだけでも彼の藝術は或程度迄窺ふことが出来ると思ふ。彼のために惜しむべきことは、ホレイシオやボワロウの思想の蔭に隠れて見たロシヤ人觀、ロシヤの社會觀察が、やゝともすればほんたうのロシヤ人としてのカンテミール自獨の思想が稀薄に流れ

てゐることである。詩に就いて云へば、彼の詩の韻律は或場合には半シラビックであるかと思ふと半
歴語になつてゐる。そしてそのいづれもが十三のシラブルから成り立つてシラブルとシラブルとの間
で二つの部分に停頓されてゐる。そしてその各半分には恐ろしく鋭いアクセントが含まれてゐること
が目につきやすい。その韻律と來ると、これまたひどく單純で貧弱ではあるが、その代りに大きな諧
音を持つてゐることが長所と云へるだらうと思ふ。カンテミールによつて作られた音律詩の韻律は
彼の「眞の幸福について」と云ふ一篇に用ゐられてゐるだけで、その他は、純字音の韻律に従つてゐ
る。彼が死んだのは一七七四年であつた。その時彼はバリに逗つてゐた。このカンテミールと同じや
うにテオフアン・プロコポウイチの友人であり且つピョートル第一世の顧問になつてゐたのが、先刻
タナシチ も一寸話したやうに思ふワシリ・ニキチ・タチシチエフであつた。タナシチエフ（一六
エーフ 八六——一七五〇）は砲兵聯隊に勤務したり、晩年にはアルハンギエリの知事に任命され
たりした經歷の文人である。彼の才能を見出したのは、ピョートル第一世であつて、彼の實務上の手腕
に驚いた皇帝は直ちに彼をスウェデンに派遣して鑛山技手を求めさせたが、さうした方面にまゐる無
識であつた彼は失敗した。失敗後の彼は偶然にロシア地理の編纂に一身を委ねて了つたのである。だ
が、今日、私たちのために少かに遺されてゐるロシア全史五部作以外、「ロシアの法規」「イヴン第四世
時の法規」それ以外に相當に評價されたものに「我子エウグラフィに與ふる教訓」や「學問や學校の利

用を論ずる二人の友人の會話」などがあるけれども、文學上の立ち場から嚴正に見るとき彼はやはり
前にも云つたやうに、ピョートル第一世の主義を押しを行つた獨逸功利派の一人に過ぎないのである。

此處まで來た私は當前の順序として少しく他の方面即ち演劇及び戯曲をのぞいて見やう。

第二章 演劇と戯曲

ずつと昔の演劇に就ては、信頼すべき記録がないから、調べることが出来ない。しかし乍らこの十八世紀の始めから中程へかけて、劇曲が頻りに演ぜられてゐたことだけは充分に解る。丁度アンナ・ヨハノヴナが帝位に即いた一七三二年頃から、露西亞にオペラやドラマが始まつたと云つても差し支へない。即ち演劇の草昧時代から劃然と區分することの出来る時代に移つたのが、つまりアンナ・ヨハノヴナ朝の初期であるといふのである。露西亞の國民音樂や戯曲などは、アンナ朝以前にはなかつたと云つてよい。その頃今のペトログラドへ伊太利やフランスから、種々な階級の旅藝人が流れ込んでゐて、それぞれ伊太利劇或は伊太利音樂、フランス劇、或フランス音樂をやつてゐる外に、露西亞人、露西亞劇或はロシア音樂を演ずる者は殆んどなかつた。ロシア人が演劇や音樂に對する趣味及知識は非常に幼稚なもので、この幼稚の時代はアンナ朝に入つて漸く國民自らの自覺する處となつたのである。然しかう云ふ言ひ方をすると露西亞だけが、左様に聞ゆるけれども當時へテルスブルグに彷彿してゐた外國の旅藝人の藝術としても、それはロシアの方よりは、多少でも秀れてゐたかも知れないが、それほどとりたて、説く可き物もないのである。然し今日、ロシアの演劇が、最も盛んになり、最も優れてゐる個所に達する最初の導火線と云ふのは、外ならぬ是等旅藝人の群の見すばらしき技藝であつ

たのだ。今、便宜上、ロシア演劇の創始時代を三つに區別すれば、

(一)アンナ朝(トレヂアコーフスキイ時代)

(二)エリザベス朝(ウオルコフ時代)

(三)カザリナ朝(フォミン時代)

となるが、アンナ朝を私はトレヂアコーフスキイ時代と稱へる。このアンナ皇后は極めて藝術に趣味を持つた人で、即位の間もなく「學校演劇團」を組織した。列國の皇后で、手づから演劇に手を染めたのは、恐らくロシア位なものだらうと思ふ。この「學校演劇團」がつまりロシア演劇團體の嚆矢であつた。で、當時帝室の直轄に屬してゐた「スラヴィノ・ラテン・アカデミー」の學生十數名を選抜してこれに音樂部員としてギリシヤ正教派の寺僧の中から所謂唱歌僧を三名拉し來つて團體を組織したのである。勿論、當時劇場らしい劇場はないのであるから、また一つは、この演劇團體が皇后の内命でトレヂアコーフ出來たと云ふところから「冬宮」の内部の「隱居院」で演ぜしめた。その團體の中に後イフスキイ 年有名になつたワシリイ・シリロヴィツチ・トレヂアコーフスキイがゐた。第一回の出し物はバイブルの中にあるヨセフの傳記の一部であつた。ヨセフやヤコブやファラオ王やファラオ王に隸屬する法官判官執政官刑官其他に奴隸とか賢人などが出場するので、猶此外にも假設的諷刺人物——例へば、「同情」とか「潔白」とか、そう云ふものが、それ／＼異様な扮装で出場して、此處に、

ロシア建國以來の極めて古風なオペラを演つたのではあるが、何しろ出し物が既にかくの如く古い上に俳優が殆んど全部素人と來てゐるので、演劇は成功せず主唱者アンナは失望して第一回で此劇團に解散を命じた。演劇團體に皇室から解散を命ずると云ふことも露西亞が最初ではないかと思ふ。で、今度はベテルスブルグの伊太利藝人を招いて冬宮の隱居所で伊太利のオペラを演ぜしめた。ところがアンナは伊太利劇と云ふものを初めて見たのであるから非常に目新らしく感ぜられた。然し、芝居そのものは面白いが言葉が異つてゐるから折角のものが、夥しく物足りないと思ふので、トレヂアコーフスキーが幸ひ伊太利語に精通してゐた處から、豫め冬宮で演るオペラの反譯をさせた。最初の反譯は「ラ・フォルザ・デル・アモレ・エ・デル・オチオ」と云ふオペラであつた。引き続き實演された是等伊太利オペラが大成功を収めた原因の一つとして伊太利劇團の中に有名なアラジアと云ふ作曲兼作劇家が居つて、必死の努力を見せたからであつて、アンナはそれからこのアラジアを顧問としてベテルスブルグに「オペラ劇場」(木造)を建てた。これこそロシア最古のオペラ劇場であつたのだ。不幸にして、一七四七年に焼失したが、この劇場が建てられて、オペラの流行は長足の發展した。かう云ふ風にロシアのオペラはアンナ・ヨハノヴナによつて開發された。アラジアの作曲又は戯曲を片端から口譯して行つたトレヂアコーフスキーもその間に大いに修養を積むことが出来たと云ふことで、こゝまで來ると從來は伊太利物を伊太利語で演じてゐたアラジアはトレヂアコーフスキーと協力して露西亞語で

露西亞風の劇を作り、かくて伊太利劇は漸次にロシア化して行くやうになつたので、トレヂアコーフスキーは、例の伊太利の字母的、ザアリスをロシアの字音上の、アクセントに變へた。このオペラ劇場で演ずるオペラやドラマ又はメロドラマと云ふやうな種類のものは、いづれもロシア人の目に映り、ロシア人の心を透して、充分に解釋され味はれることが出来るやうに轉化して行つたのである。トレヂアコーフスキーのロシア演劇道に於ける功蹟と云ふのが、つまりこれであらうと思はれる。トレヂアコーフスキー自身も作曲及作劇したが、それはアラジアの物に比べると、未だ堂に入つたものとは云へなかつた。トレヂアコーフスキーの時代はアラジア劇全盛時代であつた。アラジアはそれまで俳優に伊太利人を使つてゐたのを露西亞人にかへて了つた。例へばその當時、非常な歡迎を受けてゐた「セファルスとプロシウス」上場の際の如きも、唱手及俳優が全部ロシア人であつたやうなものだ。「セファルスとプロシウス」はオヴイドの原作「メタフォルオス物語」から取つたオペラで、作曲者はスマローコフ、背景は有名な伊太利畫家ワレリアニだつたと思ふ(序作ら述べる)ことであるが、當時ロシアでは芝居の背景畫家のことを「帝室演劇美術員」と云つた一種の高等官だつた。此劇の中には、例のラズモーフスキー伯爵の娘ビエログラドスカヤなどが加つてゐたと云ふ記録も残つてゐる。このオペラの上演は一七五年で上演中活字に組んで上梓したが、ロシアでオペラが書物の形を取つた始めてであらうと思ふ。そしてかうした皇室直營の劇場に於て上演された演劇がその結果に於て成功

する場合には、その劇の作者には、必ず金時計が與へられる習慣であつた。この「セファルスとプロシウス」上演の時もアラジヤはこの金時計をアンナ・ヨハノーヅナから貰つたと云ふ話である。閑話休題、このナラジヤとトレヂアコーフスキとの奮闘は、ペテルスブルグを始めとして屈指の都會にオペラ全盛期の初期を形成した。その流行は、殆んどこの時、その頂點へ達してゐたと想像するに充分な根據もあるのである。

貴族とか豪農とか、或は大官などが、己れの邸内に銘々大小様々の身分に應じた舞臺や演劇の機關を設けて、金にあかし暇にあかし各自の家に隷屬する農奴や身内の郎黨に藝道を仕込んで楽しんだのである。先刻の伯爵琵琶法師などは、その尤なるものだつた。

斯様に、漲り渡つた芝居熱は素人を驅つて芝居道へ走らせたために、それまで曲りなりにも、自家藝を賣つて生活してゐた伊太利俳優は觀客を失つて大いに窮地に陥つたためにさまざまの手段を盡して朝廷に取り入らうとした。が時潮は既に彼等旅藝人を顧る暇もない程の速さで日に日に進んでゐたために、彼等の多くは、露西亞に棄てられて、故國へ引き揚げて了つたのである。伊太利劇を露西亞に紹介する目的で働いたアラジヤも時勢に押されて、自國のオペラを、反對に露西亞から放逐るに至つた。一つは彼等旅藝人は、當時の劇評家の言葉を借りて云ふと「品性が劣等で、藝が未熟で、進歩を欲しなかつた」ために招いた止むを得ぬ運命であらう。時代は丁度エリサベス朝（一七四一）に移つ

てゐたのである。エリサベスは、アンナよりも更に熱心な劇道の研究者であり且つ鼓吹者であつた。エリサベスは皇后の即位後直ちに、焼失した木造オペラ劇場の跡へ一七五〇年に石造の大劇場を建築した。彼女は露西亞藝術の外にフランス藝術の好愛者であつた。

それで伊太利俳優が顧られなくなつて間もなく、ペトログラードへ興行にやつて來たフランスの喜劇團を頻りに歓迎して、この石造の劇場で演らせた。その時分、貴族や豪農や大官などは、一週のうち一日又は二日を割いて、必ずこの芝居を見物せねばならなかつたので、エリサベスは彼等高等遊民に命じて一種の階級に應じた「芝居見物着」を作らせた。その規定見物日には、必ず、その着物を纏はせたのであつて、一説によると、一着の芝居着に當時の金で數千ルーブルを投じたと云ふことだ。エリサベスの好劇家であることは此の一事でも知れる。

ウオル
コフ (二)のエリサベス朝に、私は「ウオルコフ時代」と云ふ名稱を附けてゐる。ウオルコフと云ふのは、フェオルド・グリゴリエヴィッチ・ウオルコフのことだ。ウオルコフの略傳を述べれば、あらずし同時代の劇壇の様子が解るから、ざつと掻い摘んでお話をする。

このウオルコフは一七一一年にコストロアで生れた青年で、幼年時代に其時分夫を失つてゐた彼の母親が再婚した。二度の嫁入りをした先が、ヤロスラフ町であつたために、ウオルコフも母に従つてヤロスラフ町へ移つたのだ。彼はヤロスラフ町の一獨逸牧師に就いて初等學を修めて、間もなくペテル

スブルグへ遊學に出た。幼年の頃から音楽に深い趣味を持つてゐた彼は、餘暇毎にオペラ劇場へ出掛けた。丁度名人アラジャがオペラ劇場の舞臺監督をしてゐた時で、彼はアラジャの喜劇にすつかり、魅せられて、自分も作劇家にならうと云ふ考へを起した。餘程アラジャの劇に刺激されて發奮したと見え、彼は思ひ切つてアラジャが率ゆる劇團に入門した。

ウオルコフが芝居道に入つたのが此時で、間もなく、ヤロスラヴ町へ戻り、町の有志と計つて、彼の家に一つの小舞臺を拵へた。其處で日夜オペラやの稽古に耽つてゐたが——ある時、その町に於て公開の上演をすると、それが大分評判になつたと見えて、遠くペートルスブルグに居るエリサベス皇后に識られ招かれて、冬宮内の劇場で試演をさせられた。これが後年彼が露西亞劇界の恩人と云はれて尊崇を集むるに至る第一の登龍門とはなつたのだ。其時の出し物は、「罪人の悔悟」と云ふオペラで、作者はロストフ市の市長某であつた。作劇者が素人でこれを演ずるウオルコフが素人であつたから、餘程成功を危まれたけれども、ウオルコフの天才的技量と、ウオルコフを助けて働いた劇團員の一人であるイヴン・トミドリエフスキー（ウエンサン・マルチン作「ラ・コザ・ララ」の露譯者として今日まで知られてゐる人）の力によつて、首尾よくやつてのけたから、ウオルコフの名聲は一時に都の巷へ鳴つた。

ウオルコフは其後イヴン・トミドリエフスキーと共にモスクワへ下つて、「帝室劇場」を建てた。モ

スクワの帝室劇史に於ける効績は色々あるけれども、その最も大なるものは彼の傑作であるオペラ「タニューシア」とすることが出来る。これは喜劇であつて、今日から當時のことを考へると、この「タニューシア」が露西亞最古の喜劇であつたと云ふことも出来る。彼の劇の特長は、劇の中へ自作の樂譜を入れて俳優に唱はせたことであらう。このウオルコフ時代に最も盛んに行はれ歓迎されたアラジャの作物で、今日まで、史上に現れたものの中の、名品とも云ふべきものを數個紹介すれば、次のやうである。（全部オペラ）

（セレウカス）（一七四四年作）

ミトリアダテス（一七四七年作）

ユードシア（一七五一年作）

許されたるチド（一七五八年作）

セファルスとプロシウス（一七五五年作）

エリサベス朝の次にカザリン朝が来る。このカザリン皇后も劇道の熱心家で、露西亞演劇が今日の盛況を呈するに至つたの有力なる原因は、作曲家や俳優に天才があつたと云ふのも、一つではあるが、それよりも演劇趣味の偉大なる鼓吹者であつた皇后が三代續いたからであつた。で、カザリンは、前二者の遺志を繼いで、ペテルスブルグへ「グランド・オペラ劇場」を建てた。これは餘談であるけれど

も、それから、ずつと下つて、文明露西亞が建設される頃に輩出した作曲家として、今日まで、世界的天才音楽家と呼ばれてゐる例の露西亞音楽の始祖グリツカが、處女作として有名な「皇帝に捧げたる生命」を初めて演じた劇場が即ち此處だ。「グランド・オペラ」はカザリン皇后を記念する建築物であると同時に、大グリツカを記念するものとして、歴史家は見てゐる。そのカザリン皇后朝を、私はまた「フォミン」時代と稱してゐる。それは説明するまでもなく、カザリン朝の群才を厭して巨然と聳えてゐた人であるからだ。エリサベス朝のウオルコフに於けるやうに、私はカザリン朝のフォミンの略傳を述べて、此第三期時代の傾向を知りたいと思ふ。フォミンとは、エヴスグネイ・プラトウイチ・フォミンのことである。彼は西歴一七四一年ペテルスブルグ市に生れた。當時存在して居つた「帝室伎學校」を優等で卒業して間もなく、自費を以つて伊太利のボログナにあつた音楽學校に學んだ。當時の音楽學生は必ず一度、伊太利の地を踏む習慣があつたからだ。伊太利から歸るとモスクワで劇場生活的、音楽的生活に入つた。カザリン皇后が死する前にペテルスブルグへ移住して勅命によつて「帝室劇場」のレベチートルとなつたが、その傍ら、ペテルスブルグに滞在して居つたフランス劇團に加はつて數十の作曲と數十の作劇を示した。その時分、カザリン皇后在位中、カザリン皇后の直營同様の状態にあつた都市大小の劇場は、その經營が、太公ヰルソヰの手に移つてゐた。フォミンの傑作「メルニツク・コルドウン」は、ヰルソヰ太公の「新劇場」の一つで上場された。後にこの記念すべ

き「新劇場」は焼け失せた。私の記憶によると、それは多分一八〇五年であつたと思ふ。フォミンを説いた序でにフォミンの作物を一通り述べる、それから、フォミンこそ前後して擡頭した四作劇家に就いて一言して、この創生期露西亞演劇の話をつなぐと思ふ。フォミンの作物を年時順に列記すれば、次の如くである。

アニウタ（一七七二年作）

ドブラヤ・デヰカ（善き少女）（一七七年作）

ペレイオンデニヤ（新生）（一七七七年作）

メルニク・コルドン（魔法粉屋）（一七七九年作）

アメリカ人（一七九七年作）

僧侶の先生

ホエスラヰイツチ

運命豫言者とマツチ製造人

コロリダとミロン

オルフェウス（等）

この中で「アニウタ」と「魔法粉屋」が一番有名である。今、是等二作をざつと述べて見ると、「ア

ニウタ」はボボフ氏のリブレットによるもので、大體は、當時の貴族的封建制度に對する反抗を叫んだものだ。つまり、階級打破を描いたもので、百姓（小作人のこと）が勞働者の生活の苦痛を歌に唱ふて、觀客に訴へると云ふ趣向のものだ。「魔法粉屋」はアプレシモーフのリブレットに依るもので、十八世紀中最も成功せる三場のオペラであつたと云ふ話である。その證據として、このオペラを演じてゐる時には、二十七夜ぶつ通し満員で、人氣を羨んだ郡小作劇家が、争つて「魔法粉屋」に偽せたものを盛んに拵へて演り出したのを見ても解る。「魔法粉屋」は自由主義の鼓吹である。

農奴所有者が主人公に成つてゐる。粉屋の役を勤めたクロチツキと云ふ俳優は金時計を皇后から貰つたと云ふことが書いてある。日本人は露西亞で自由主義とか解放とか農奴廢止を叫んだのは、例の十九世紀のトルストイやツルゲニーネーフあたりが、最初の人間だと説くが、そのずつと以前に、フォミンが居つたことを知らないのだらうと思ふ。

兎に角このオペラが成功の原因は、作物そのものの性質にもよるであらうが、フォミンが、戯曲中に露西亞の民謡を挿入して、舞臺で唱はせたからであらう。露西亞人と民謡とは、人間生活に於けるバンの様な位置にあつた。民謡のロシア人か、露西亞人の民謡かと云ふ位に切り放すことの出来ない深い密接な、關係がある處から、奇智に富んで彼は、それまで、嘗つて何人も試みなかつた斯様な企てを行つて、豫想通りに成功したのである。「魔法粉屋」は彼の出世作であつた。これを以つて彼は一

躍一流の戯曲作家となることが出来たのである。「魔法粉屋」が最初舞臺に上せられた劇場はヘトロヴスキー町の新劇場であつたさうだ。露西亞人が民謡を熱愛する機微を捕へて、巧みに利用したフォミンは、やがて、その時から出生の聲を與げた純露西亞劇を、從來伊太利演劇家——例へば、サリエリとかサルチとかバイセイロとかシマロザなどの専横な毒手より解放獨立させた。その次に一寸面白いと思はれるものに「アメリカ人」がある。これは多少作風もモザルトの影響を受けたと思れる處もあるが、見方によると、「魔法粉屋」よりずつと後に書いただけに、彼が藝術的手腕の圓熟に達した處を見ることが出来る。アメリカ人とは、アメリカ・インディアンのことで、作中に、グスマンとシムラと云ふ人間が戀のことから決闘する。つまり「戀の決闘」と改題して差し支へないやうな大體の内容である。

フォミンと時を同ふして、マチンスキーやバエウイッチがある。ミハイル、マチンスキは、ヤギンスキーの邸内に生れた。生れ乍ら農奴であつたが、ヤギンスキーの芝居道樂から送られて伊太利へ遊び、歸國後ラズモフスキー伯爵の私立劇團に加つて傑作「ゴスツニー・ヅウオル」を書いた。バスキエウイッチは、カザリン二世の、チャンバー音楽家として、カザリン皇后自作のオペラへ作曲した人物で、自作には「戀は曲者」「フェドウルとその子」「二人のアントン」「けちんぼう」などが有名だ。此人の功績は、オペラへ國民的センチメントを加へたことだ。

